

樺^{かほ}山^{やま}・郡^{こほり}元^{もと}地区遺跡

年見川小規模河川改修事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1992

宮崎県教育委員会

かば やま こおり もと
樺山・郡元地区遺跡

年見川小規模河川改修事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1992

宮崎県教育委員会

序

日頃から埋蔵・文化財の保護・活用に対し、深い御理解をいただき厚くお礼申し上げます。

最近、文化財の新たな発見は、新聞紙上などつきることなく伝えられています。これら文化財の保護は、わたくしたちの大きな課題であり、地域の発展との共生を目指し、日頃より努力しているところであります。

今回、河川改修事業に伴い樺山・郡元地区遺跡の発掘調査を行ない数多くの貴重な中近世の遺構・遺物を検出いたしました。これら遺跡内容を記録保存し、後世に語り継ぐべく、ここにその報告書を刊行いたします。

これらの資料が、さらに文化財への御理解を深め、地域研究に幅広く御活用いただければ幸いです。

なお、調査に際し、都城土木事務所をはじめ三股町教育委員会ならびに地元の方々のご協力に対し、心から感謝申し上げます。

平成4年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山 義孝

例 言

1. 本書は年見川小規模河川改修事業に伴う榑山・郡元地区遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書で使用了遺構の实測図は、近藤 協（現宮崎県総合博物館）、谷口武範、山田洋一郎、大盛裕子、下田代清海、吉村則子、阿久根昌子による。一部、コンピューター・システムを使用した。
3. 遺物・図面の整理は、埋蔵文化財センターで行ない、遺物の実測・拓本・計測及び製図等については、近藤、谷口、山田のほか整理補助員の協力を得てこれを行なった。
4. 遺物整理にあたって、陶磁器類については大橋康二氏（佐賀県立陶磁文化館）、石器の石材同定については矢戸 章氏にそれぞれ御教示賜わった。

また、木製品の樹種同定は、大塚 誠氏（宮崎大学農学部）に御協力いただき、玉稿を賜わった。

5. 本書に使用した写真は、各調査員が撮影した。
6. 本書に使用した方位はすべて磁北である。また、本書で用いた記号はSBが獨立柱建物跡、SCが土壕、SEが溝状遺構をそれぞれあらわしている。
7. 本書の執筆は、各調査員が分担して行ない、文責は目次に明記した。
8. 出土遺物及び調査記録類はすべて宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに収蔵している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	(谷口)	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	(山田)	3
第Ⅲ章	調査区の設定と概要	(谷口)	6
第Ⅳ章	調査の記録		8
	1. 層序	(谷口)	8
	2. I区の調査	(谷口)	11
	3. II区の調査	(近藤)	13
	4. III区の調査	(近藤)	22
	5. IV区の調査	(近藤)	35
	6. V区の調査	(近藤)	75
	7. VI区の調査	(谷口)	85
	8. VII区の調査	(山田)	97
	9. VIII区の調査	(山田)	99
	10. IX区の調査	(山田)	101
	11. X区の調査	(山田)	109
第Ⅴ章	まとめ	(谷口)	116
	〈付論〉		124

挿図目次

第1図	遺跡位置図	5
第2図	調査区	7
第3図	I区遺構配置図	9-10
第4図	SE13及びI区出土遺物実測図	11
第5図	SE12・13土層断面図	12
第6図	年見川II区北調査区実測図	14
第7図	II区北12・14号溝状遺構実測図	15
第8図	12号溝状遺構北壁土層断面図	15
第9図	II区北16・17・18号溝状遺構実測図	16
第10図	II区北出土遺物実測図	17

第11图	Ⅱ区南瓮掘调查实测图	19
第12图	Ⅱ区南21·22号溝状遺構实测图	20
第13图	Ⅱ区南21·22·23号溝状遺構断面实测图	21
第14图	Ⅱ区南出土遺物实测图	22
第15图	Ⅲ区瓮掘调查区实测图	23
第16图	Ⅲ区24·25号溝状遺構实测图	25
第17图	Ⅲ区26号溝状遺構实测图	26
第18图	Ⅲ区27号溝状遺構实测图	27
第19图	Ⅲ区28号溝状遺構实测图	28
第20图	Ⅲ区14号·15号掘立柱建物实测图	31
第21图	Ⅲ区11号掘立柱建物实测图	32
第22图	Ⅲ区出土遺物实测图	33
第23图	Ⅲ区出土遺物实测图	34
第24图	Ⅳ区遺構配置图	37-38
第25图	S B 1 ~ 5 遺構实测图	39
第26图	S B 6 ~ 8 遺構实测图	40
第27图	S B 9 ~ 13 遺構实测图	41
第28图	S E 1 土層断面图 (1)	43
第29图	S E 1 土層断面图 (2)	44
第30图	通路跡遺構实测图	45
第31图	石列遺構实测图	46
第32图	S E 1 北端遺構实测图	48
第33图	S E 1 北側遺構断面图	49
第34图	暗渠状遺構土層断面图	47
第35图	暗渠状遺構实测图及土層断面图	51-52
第36图	S E 1 暗渠状遺構出土遺物实测图	50
第37图	S E 1 出土遺物实测图 (1)	54
第38图	S E 1 出土遺物实测图 (2)	55
第39图	S E 1 出土遺物实测图 (3)	56
第40图	S E 1 出土遺物实测图 (4)	57
第41图	S E 1 出土遺物实测图 (5)	58
第42图	S E 1 出土遺物实测图 (6)	59
第43图	S E 1 出土遺物实测图 (鉄·銅製品)	59

第44图	SE3・4土層断面図	60
第45图	SE5土層断面図	62
第46图	SE6土層断面図	63
第47图	SE5・6, SC4・8・9及び包含層出土遺物実測図	64
第48图	SE6出土遺物実測図	65
第49图	土坑実測図	66
第50图	井戸遺構実測図	68
第51图	井戸出土遺物実測図	69
第52图	V区発掘調査区実測図	77~78
第53图	29・30・31・32号溝状遺構実測図	77~78
第54图	V区B・C・D土層断面実測図	79
第55图	V区E・F土層断面実測図	80
第56图	29号溝状遺構出土遺物実測図	81
第57图	31号溝状遺構出土遺物実測図	81
第58图	30号溝状遺構出土遺物実測図	82
第59图	32号溝状遺構出土遺物実測図	82
第60图	V区出土遺物実測図	84
第61图	VI区余体配置図	87~88
第62图	土坑実測図	89
第63图	土坑及び出土遺物実測図	90
第64图	SE33~35・41土層断面図	91
第65图	SE35・36土層断面図	92
第66图	SE33・35・36出土遺物実測図	93
第67图	4号井戸及び包含層出土遺物実測図	95
第68图	Ⅶ区遺構配置図	98
第69图	Ⅶ区出土遺物実測図	98
第70图	Ⅶ区全体図	100
第71图	Ⅶ区出土遺物実測図	100
第72图	Ⅷ区全体図	103~104
第73图	Ⅷ・Ⅸ区土層断面図	105
第74图	Ⅷ区出土遺物実測図(1)	106
第75图	Ⅷ区出土遺物実測図(2)	107
第76图	Ⅸ区全体図	111~112

第77図 X区出土遺物実測図(1)	113
第78図 X区出土遺物実測図(2)	114

表 目 次

24号溝状遺構	32
25号溝状遺構	32
IV区出土遺物観察表	70~74
V区出土の縄文土器観察表	83
S C 3 出土鉄製品計測表	85
VI区出土遺物観察表	96
IX区出土遺物観察表	108
X区出土遺物観察表	115
出土土器一覧表	118~121

第I章 はじめに

1. 調査に至る経緯

昭和59年、都城土木事務所より文化課へ昭和60年度工事予定地内の文化財の有無について照合があり、10月分布調査を行なった。調査の結果、2箇所^①で遺物の分布がみられ、昭和40年代の耕地整理の際にも土器が出土したことも判明した。また、現在、使用されている水路断面に溝状遺構も発見され、工事区の西150mには、県指定の「祝吉御所跡」があることから付近は古代から中世の遺跡が広がるのではと予想された。そこで翌昭和60年3月に試掘調査を行ない、一部ではあるが文明降下軽石層（白ボラ）や黒色土が御池ボラ上部に堆積し、黒色土から青磁碗や土師質土器が出土し、御池ボラ上面において白ボラが堆積した溝状遺構も検出された。

さらに、昭和63年9～11月には地下レーダー探査が行なわれ、御池ボラ面を電磁波の反射面として、遺構の疎密やV区にみられた深い谷地形の存在など読取ることが可能で、将来、試掘ができない箇所や地下式横穴の検出などへの利用は効果的であろうと考えられる。しかし、柱穴や土壇など比較的規模の小さい遺構の判定は難しく、電気探査との併用など今後の課題といえる。

発掘調査は、便宜上分けた区のI区～VI区（約22,000m²）を平成元年2月22日から平成2年3月31日まで実施し、VII区～X区までの約14,000m²を平成2年10月23日～平成3年3月30日まで行なった。また、各年度の遺物・図面の整理等は、調査に併せて実施し、平成4年度に最終的な整理を行ない、報告書を作成した。

註

- (1) 昭和63年 第2-D号 小規模河川改修工事（文化財調査）報告書 1988年

宮崎県都城土木事務所 応用地質株式会社

春口勝幸他「河川改修工事地区に伴う埋蔵文化財調査への地下レーダー探査の適用」『九州技報』6
1989年

- (2) 「東二原地下式横穴墓群」『小林市文化財調査報告書』第2集 小林市教育委員会 1990年

2. 調査の組織

調査主体	宮崎県教育委員会
教育長	児玉 郁夫 (昭和63年～平成2年度) 高山 義孝
文化課長	久徳 菊雄 (昭和63年・平成元年度) 梨岡 孝 (平成2年度) 長友 巖
課長補佐	木幡 文夫 (昭和63年度) 片野坂次夫 (平成元・2年度) 串間 安園
埋蔵文化財係長	岩永 哲夫
主幹兼庶務係長	小倉 茂光 (昭和63年～平成2年度)
庶務係長	税田 輝彦
特別調査員	大橋 康二 (佐賀県立陶磁文化館)
事務担当	庶務係 串間 俊也 (昭和63年・平成元年度) 長友 広海 巻 庄二郎
	埋蔵文化財係 面高 哲郎 北郷 泰道
調査担当	埋蔵文化財係 近藤 協・谷口 武範 (昭和63年・平成元年度) 山田洋一郎 (平成2年度)
調査協力	大盛 裕子 松浦 由美 棧 陽子 富永 優子 押川 保子 杉尾 愛恵 杉尾 直子 有田 辰美 石川 悦雄 昔付 和樹 長友 郁子 長津 宗重 矢部喜多夫 郡城市教育委員会 三股町教育委員会

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

樺山・郡元地区遺跡は、都城市街地を形成している台地の北縁の郡元地区から三股町の樺山一帯に立地している。

都城市は、県の南西部都城盆地のほぼ中央に位置し、南は鹿児島県と境界をなす海岸線のない内陸部にある。

都城市の標高は、市街地で150m平均して155mあるが最も高い標高は、1,200mである。

三股町は都城市の東隣に位置しており東西に18km南北に12.7kmある。当町中心部から市中心部まで、わずか10分ほどであるので、ベッドタウン化の傾向がある。

本遺跡⁽¹⁾の北西側に久玉遺跡・松原遺跡・祝吉遺跡などが立地し、西側には祝吉御所跡などや早水遺跡・牟田ノ上遺跡があり南側には向原遺跡がある。

久玉遺跡は中世から近世にかけての集落跡で、本遺跡の北東約625mにあり主な遺構として溝・道路・掘立柱建物・井戸・土壌意などが検出された。主な遺物は、石鏃・青磁・白磁・青花・染付・備前・東播系控鉢・土師器などが出土している。西隣には、松原地区遺跡群があり、久玉遺跡と同様に中世から近世にかけての遺跡である。遺構も掘立柱建物など同様で、遺物も白磁・青磁などが出土している。松原地区遺跡群の西隣には祝吉遺跡⁽²⁾があり検出された遺構の時期は弥生時代後期・古墳時代初頭・中世などである。中世の遺構としては溝状遺構と柱穴などが検出されている。祝吉遺跡から南へ約400mのところに祝吉第2遺跡がある。検出された遺構の時期は祝吉遺跡とほぼ同様で遺物は下城式系の刻目突帯の壺・安国寺式の二重口縁壺・高坏・鉢などが出土している。

本遺跡から約350m西に祝吉御所跡がある。この御所は、鳥津家の始祖とされる惟宗忠久が守護職に任ぜられ、薩摩から移り、鳥津荘堀之内御所⁽³⁾をへて建久8～9年(1197～1198)の約2年間この祝吉御所に住まわった。祝吉御所跡から西へ約370mのところに牟田ノ上遺跡⁽⁴⁾がある。遺構・遺物は、縄文時代・弥生時代・平安～鎌倉時代の各時期のものが発掘されている。平安～鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物跡19棟・溝状遺構十数本・土壌意数基が確認されている。

一方三股町側では、本遺跡の東側には中米満遺跡と上沖遺跡がある。中米満遺跡⁽⁵⁾は、本遺跡の南東へ約1.7kmのところにある。遺構はなかったが土師器の小皿・杯でヘラ切り底・糸きり底混在の状態であった。上沖遺跡は、本遺跡の東約2.1kmの位置にあって遺構としては、中世の製鉄炉と考えられる集石遺構と溝状遺構が検出された。遺物としては、攪乱された集石内から陶磁器片・鞆の羽口片・鉄滓等が出土している。

このようにみても、本遺跡の周辺の樺山・郡元地区一帯は中世・近世の遺跡が多い場所のようである。

註

- (1) 「都城市遺跡詳細分布調査報告書」 『都城市文化財調査報告書』 第5集
都城市教育委員会 1986年
- (2) 「昭和63年度遺跡発掘調査概報」 『都城市文化財調査報告書』 第10集
都城市教育委員会 1989年
- (3) 「松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」 『都城市文化財調査報告書』 第7集
都城市教育委員会 1989年
- (4) 「祝吉遺跡」 『都城市文化財調査報告書』 第2集 都城市教育委員会 1982年
- (5) 「宮崎県風土記」 山本有為男 旺文社 1988年
- (6) 「平成2年度遺跡発掘調査概報」 『都城市文化財調査報告書』 第13集
都城市教育委員会 1991年
- (7) 「中米満遺跡」 『宮崎県文化財調査報告書』 第30集 宮崎県教育委員会 1986年
- (8) 「上沖遺跡発掘調査」 『宮崎県文化財調査報告書』 第23集 宮崎県教育委員会 1980年



1. 樺山・郡元地区遺跡
2. 久玉遺跡
3. 松原地区遺跡
4. 祝吉遺跡
5. 祝吉第2遺跡
6. 牟田ノ上遺跡
7. 祝吉御所跡
8. 中米満遺跡
9. 上沖遺跡

第1図 遺跡位置図

第三章 調査区の設定と概要

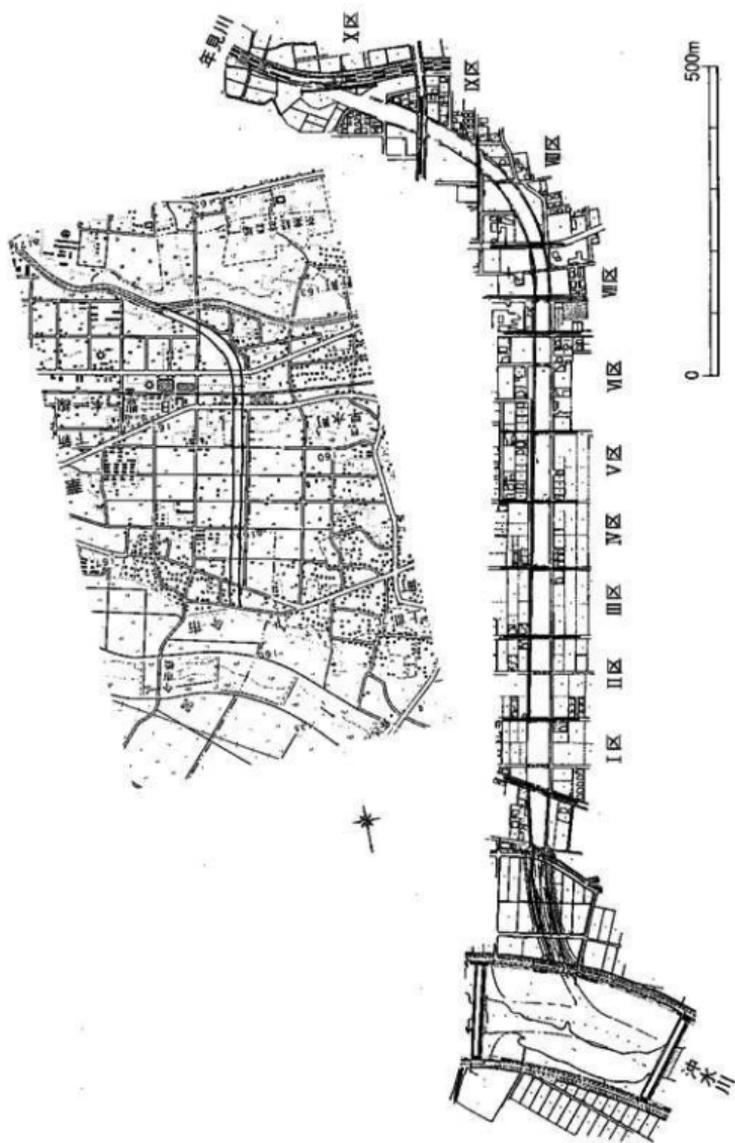
昭和60年の試掘調査により、予定地内は中世の遺物が確認され、磁気探査においては数条の溝状遺構の存在が想定されていた。しかし、調査区は約30m幅で長さ約1.5kmにもおよぶため、全体のグリッド設定は行なわず農道や橋などで便宜的に区切って、北からⅠ区～Ⅹ区と呼称し、各区ごとに10mグリッドを設定した。調査は、試験掘削予定箇所のⅣ区から始め、その後Ⅰ区～Ⅵ区を昭和63年～平成元年度に、Ⅶ区～Ⅹ区を平成2年度に行なった。

一帯は、過去において二度の区画整理で平坦地にならされ、調査地はすでに買収済みで荒地となっていた。そこでⅣ区の調査では、まず重機で表土を除去し手掘りして遺構を確認できる御池ボラ層(第Ⅴ層)上面まで掘り下げ溝状遺構や柱穴などを確認した。しかし、手掘りした第Ⅳ層では遺構上部にあたる箇所以外では遺物の出土はまばらで、時間的制約上、Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅹ・Ⅹ区では立合いのもと御池ボラ直上まで重機によって埋土を除去した。Ⅶ・Ⅷ区では表土下に薄く文明の火山灰(白ボラ)が残存し、第Ⅱ層の黒色土が非常に厚く堆積していたため、重機による除去はこの上面で止め人力によって御池ボラ層まで掘り下げた。

検出された遺構の多くは、Ⅲ～Ⅷ区に分布し、掘立柱建物跡16棟、溝状遺構42条、井戸4基、土壇16基で、そのなかでもⅣ区では掘立柱建物跡14棟、溝状遺構11条、土壇8基、井戸3基を検出した。そのうちSE1は、通路として使用され出入口や石が詰まった暗渠状の遺構もみられる。この通路はⅢ区では検出されていないことから、Ⅳ区を東端として西に延びるものと想定される。他の溝状遺構も大部分は区画のための溝と考えられ、数個の屋敷地の存在が想定されるが大きさは確定できない。また、調査区の南にあたるⅦ～Ⅹ区では、明確な遺構等は検出されなかった。

遺物の大部分は溝状遺構から出土し、土師質土器、東播系鉢、備前焼、常滑焼、渥美焼、青磁、白磁、染付、肥前の陶磁器、薩摩焼、銅銭(大観通寶・洪武通寶・永楽通寶・寛永通寶)、鉄釘、鉄滓、鋤・鋤先、ケセル、土人形などある。また、屋敷地内に作られたとみられる井戸では木製品が3点、Ⅷ区の井戸からは五輪塔の空風輪と火輪、完形の土師質土器が出土した。これらの遺物の年代幅は、13世紀から18世紀と幅広いが、15～16世紀の遺物が多くを占め、溝状遺構の白ボラの堆積状況からみても集落の時期もほぼその時期にあてはまるものと考えられる。そのほか、包含層中から少量であるが縄文土器や弥生土器なども出土している。

下層の遺構・遺物確認のため一部、第Ⅷ層まで掘り下げたが遺物等は確認されず、途中から水が湧き出してきたため中止した。



第2図 調査区

第Ⅳ章 調査の記録

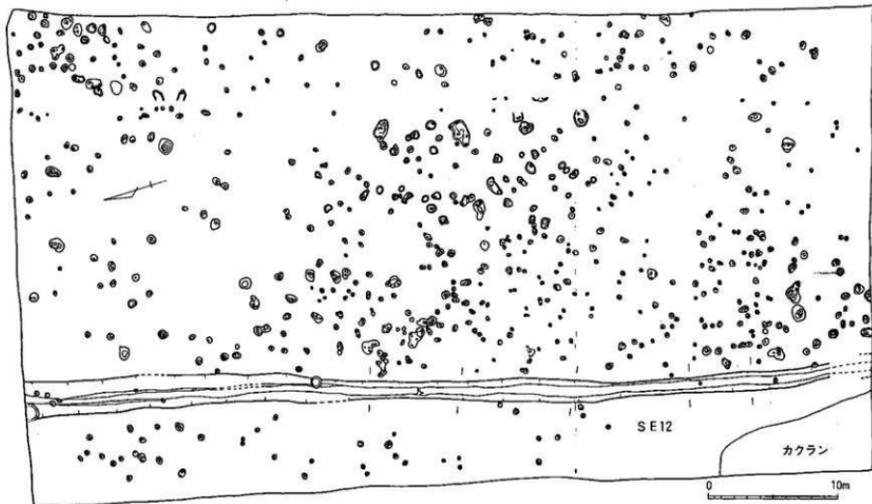
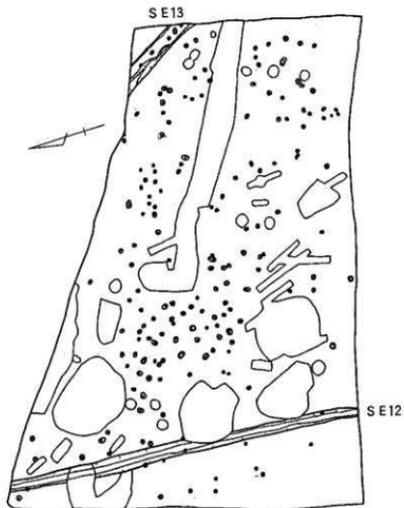
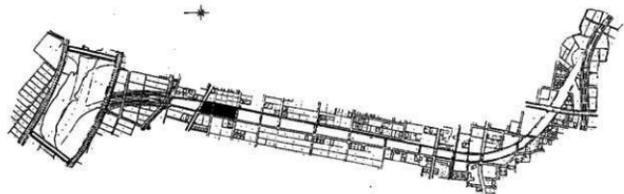
1. 層序

遺跡周辺は、競馬場や農業高校の実習田などに利用されていたが、数回の耕地整理によってきれいに区画され道路も基盤の目に通り、昔の地形をほとんど留めていないと考えられる。

当遺跡の基本層序は、都城地区で調査された遺跡とほとんど同じ状況を示している⁽¹⁾。第Ⅰ層は暗褐色砂質土(表土)で厚さ20～50cm、第Ⅱ層は、Ⅰ層より暗い暗褐色砂質土で桜島の噴出物なども含まれる。厚さ10～20cm。第Ⅲ層は桜島を起源とする文明期(1469～1487年)の降下軽石層(白ボラ)でⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ区の一部に5～10cm程度薄く確認された。また、溝状遺構には10～20cmと比較的厚く堆積しているものもある。この白ボラは、東では田野町天神河内第1遺跡の溝状遺構上部で検出され、さらに宮崎学園都市遺跡群でも報告されている。火山灰の噴出年代が判明しているが、堆積層として安定していないため遺構内堆積によってのみその遺構の下限年代を決定することができる。第Ⅳ層は黒褐色粘質土層で、厚さ30cm前後であるが、Ⅷ区南では1m近い厚さとなり、南に進むにつれまた次第に浅くなってきている。Ⅱ層とⅢ層は遺物包含層であるが、遺物は層位的には別れず縄文後期・晩期、弥生、中世の遺物が出土している。第Ⅴ層は通称御池ボラと呼ばれる黄褐色降下軽石層で厚さは約1mである。Ⅴ区では深く落込み谷地形となっているが溝状遺構の状況から、中世にはすでに埋没しほぼ平地となっている。第Ⅵ層は漆黒粘質土で無遺物層であるが、田野町天神河内第1遺跡では、御池ボラの下層から縄文前期から中期の遺物が検出されている。第Ⅶ層は暗黄褐色土(アカホヤ火山灰)層、第Ⅷ層は灰褐色粘質土層となる。都城市丸谷町堂山遺跡では、アカホヤ層下から集石遺構や壺ノ神式土器や押型文土器などが出土している。当遺跡でも、一部トレンチで下層の調査を行なったが、遺構・遺物は確認されず途中で湧水したため中止した。

註

- (1) 成尾英仁「都城盆地の火山噴出物」『都城市文化財調査報告書』第5集 都城市教育委員会 1986年
「松原地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第7集 都城市教育委員会 1989年
- (2) 「天神河内第1遺跡」宮崎県教育委員会 1991年
- (3) 「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985年
「赤坂遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 宮崎県教育委員会 1985年
- (4) 註(2)と同じ
- (5) 「堂山(南地区)遺跡」『都城市文化財調査報告書』第13集 都城市教育委員会 1991年



第3図 I区遺構配置図

2. I 区の調査

最も北側に位置する I 区から記述していくが、調査は、工事の都合上、IV 区から行なったため掘立柱建物跡などの遺構番号が前後している。また、いくつかの区にまたがる溝状遺構については、各区ごとに土層および出土遺物についてのべ、最後の第四章でまとめることとする。

I 区は調査区の最北端に位置し、南北の長さは約 120m。農道によって北と南の二つに分れ、北側は約 800m²、南側が約 2,400m²を測る。遺構としては、南北に伸びる SE12 と北東隅に検出された SE13 の 2 条の溝状遺構とピット群を検出した。

SE12

溝は N-7°-E 方向に走り、I 区北側南端付近から緩やかに西へ約 9°向きを変え、I 区北端から南方向に約 10m 延び、II 区途中で消失している。御池ボラ上面での溝の幅は約 1.2m、深さ約 0.35m となるが、南北端の壁面で土層を確認すると、本来は幅 2m 以上、深さ 50cm 以上となる。溝の土層は、1 層文明の火山灰（白ボラ）の混じる灰褐色土、2 層白ボラ堆積層、3 層やや粘性のある黒褐色土、4 層御池ボラを少量含んだ黒色土となる。ボラ上面で検出した場合、断面図でもわかるように白ボラが堆積していてもそれが残らない場合も考えられ、白ボラを基準とした溝状遺構の評価は注意を要する。遺物は、土師質土器の小片や陶器胴部片が数点出土したにすぎなかった。

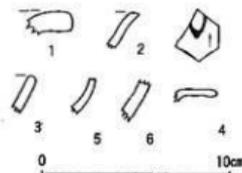
SE13

I 区北側隅に検出され、幅約 1.5m、深さ約 8cm である。土層断面でみると 4 層以下が非常に固くしまっていることから、道路として使用されていた可能性がある。

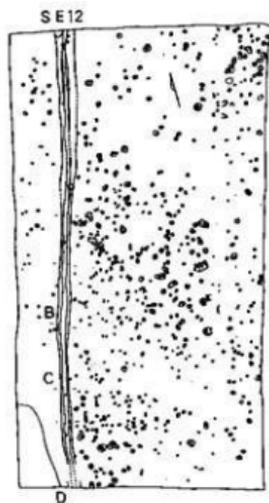
遺物は、近世の陶磁器が少量出土している。1 は薩摩焼系の壺口縁部で、上面が露胎である。そのほか図示しなかったが、外面に二重網目文様を描いた肥前磁器碗もある。

包含層出土の遺物（第 4 図 2-6）

I 区から出土した遺物は非常に少ない。2・3 は青磁で、2 は端反り碗の口縁部で、口縁端は鋭い。明緑色の釉がかかる。3 は口縁が内湾する碗で、外面には線描の剣先蓮弁文が施される。4 は肥前の染付皿で、口縁部は横方向に大きく開く。5 は唐津焼系の皿で、6 は薩摩焼系の胴部片である。



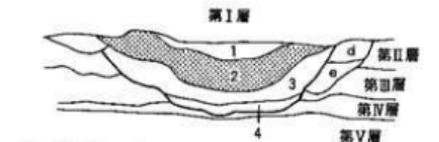
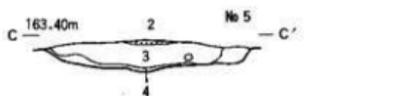
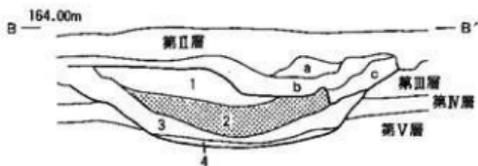
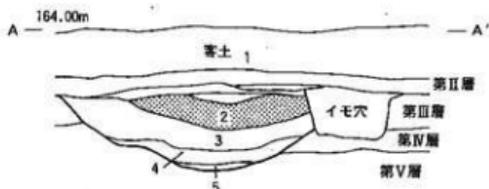
第 4 図 SE13 及び I 区出土遺物実測図



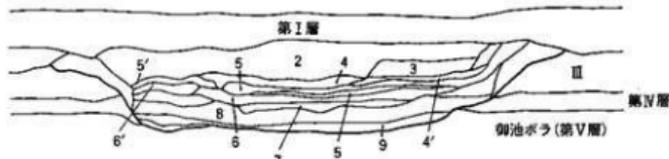
- 第1層 灰褐色土 (白ボラ混)
- 第2層 文明の火山灰 (白ボラ)
- 第3層 黒褐色粘質土 (御池ボラ混)
- 第4層 黒色土 (御池ボラ混)
- 第5層 黒褐色土

SE13

164.00m



- a層 暗褐色土 (白ボラ、砂粒混)
- b層 暗灰褐色土 (白ボラ多量混)
- c層 暗褐色粘質土
- d層 黒色土
- e層 黒色土 (軟質、御池ボラ混)



- 1層 耕作土
- 2層 暗褐色土
- 3層 暗褐色土 (2層よりしまる)
- 4層 黒褐色土 (砂粒、御池ボラを含まない)
- 5層 褐色砂質土 (かたくしまる)
- 6層 暗赤褐色粘質土
- 7層 暗赤褐色土 (かたくしまる)
- 8層 暗褐色土
- 9層 暗褐色土 (かたくしまる)

第5図 SE12・13土層断面図

3. II区の調査

II区北の調査

南北66m、東西35m、調査面積2,300㎡を測る調査区である。本調査区においても遺構検出面を御池ボラ層直上面とし、全面にわたって重機による表土剥ぎをおこなっている。住宅移転、その他によってもおられる擾乱箇所が5ヶ所みとめられたほか遺構としては溝状遺構としてSE12、SE14、SE15、道路状遺構と考えられSE16、SE17、SE18、SE19、SE20を検出している。

なお、御池ボラ層直上面における調査区内のレベル差は北側が南側にくらべて約20~30cm低く、平均標高は163.5mほどである。

遺構

12号溝状遺構

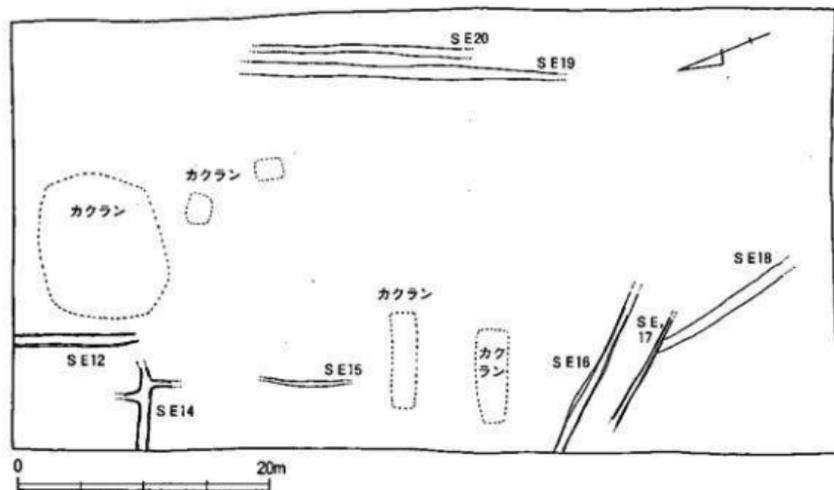
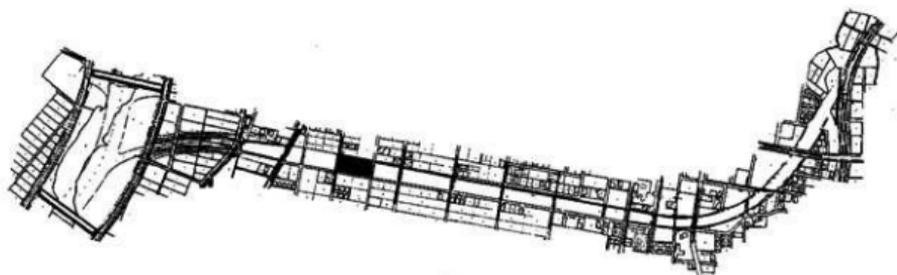
I区から連続している溝でありA-1区の発掘区北壁に断面が遺存し、それからさらに南に延びて、発掘区の南北を貫いてII区へと連続していたものと考えられる。発掘区南壁にもその断面が遺存する。これは発掘区中央部を削平してしまい北壁から長さ9.8m、幅1.3m、深さ8.3~14.0cmで遺存する。北壁、南壁に残る溝断面によって少なくとも深さ50~70cm、溝底面60~80cmであったことが窺いしれる。溝埋土中にいわゆる文明ボラがレンズ状に介在するのが特色といえる。

14号溝状遺構

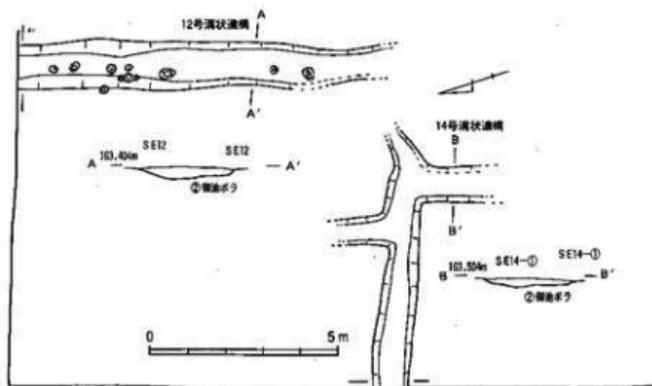
B-2区にあり、発掘区西壁からSE12に直交するように東西方向に延びている溝状遺構である。残存長は西壁より6.8m、幅1.3mで、西壁から約4.0mでSE14②号溝状遺構、同じく約5.3mでSE14③号溝状遺構に分岐する。いずれも溝底面がわずかに遺存するのみでかなり浅い。SE14②号は北にむかって1.2mのび、幅は0.8m、SE14③は南に向かって1.8m、幅1.0mをとって延びるが、その先は残存しない。本来の溝の深さは断面から推定すれば少なくとも40cmの値が想定される。埋土中に文明ボラ層は介在しない。また、SE12との合流部は検出していない。

15号溝状遺構

A-4区にある南北に延びる溝状遺構である。12号溝状遺構、14号③溝状遺構と同方向性をもつ。14号③溝状遺構とはもっとも方向、位置とも継続する可能性があるが、溝幅が狭く時期の異なる溝と考えたい。遺存長5.7m、幅0.29~0.39m、深さ7.0cm~10.0cm。



第6図 年見川Ⅱ区北調査区実測図(1/400)



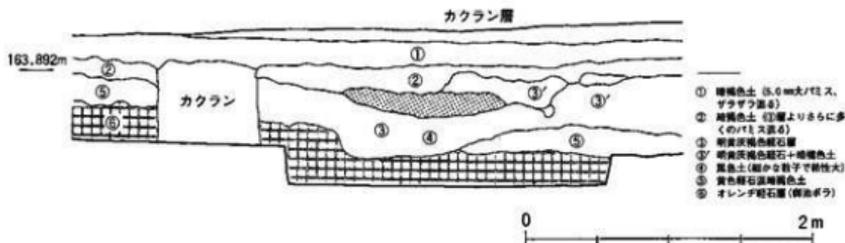
第7図 I区北12・14号溝状遺構実測図(1/50)

16号・17号・18号・19号・20号溝状遺構

これらは、いずれも道路（小径）状遺構と考えられるもので、16号・17号・19号・20号には硬化層が遺存していた。

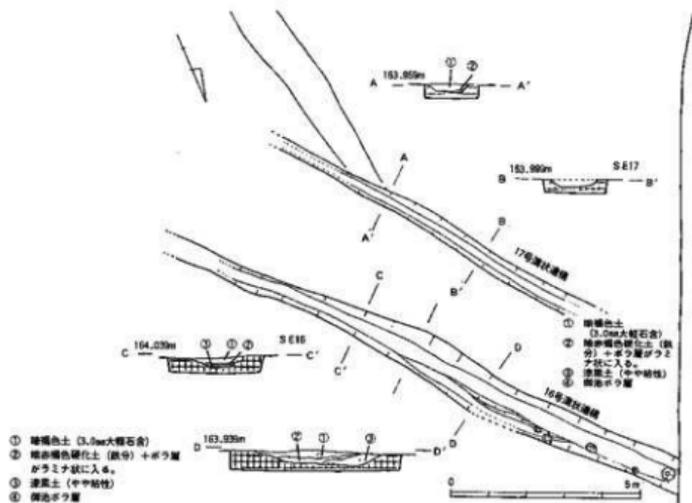
16号溝状遺構

16号は北北西-南南東方向に延び、17号と並行している。発掘区西壁にその断面があらわれ、さらに延びているものと推定される。長さ13.8m、幅0.6-1.2m、深さ6.0-14.0cmを測り、断面をみると幅約40cm、厚さ3.0cmの硬化層がある。硬化層は酸化鉄層が極薄くラミナ状に入るのである。硬化層は西壁の土層断面で見ると二層観察され、二時期にわたって使用されたものと推定される。



第8図 12号溝状遺構北壁土層断面図(1/40)

- ① 暗褐色土 (3.6mm穴パシス、
ザラザラ面)
- ② 暗褐色土 (①層よりさらに多
くのパシス面)
- ③ 暗赤褐色細石層
- ④ 暗赤褐色細石+暗褐色土
- ⑤ 黄褐色(細かな砂子で粒径大)
- ⑥ 黄褐色土
- ⑦ オレンジ暗石層(側溝ボラ)



第9図 I区北16・17・18号溝状遺構実測図(1/150)

17号溝状遺構

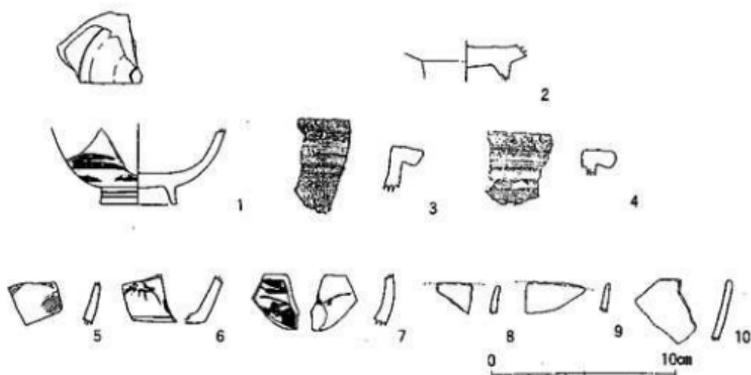
16号から、3.5m離れて並行する。北西端は攪乱のため不明で残存全長は9.3mである。幅は16号より狭く50cmを測る。これも上部削平のため、遺存する深さは10～13cmと浅い。これも、最下底に平均の厚さ2.0cmの暗赤褐色の硬化面（層）がみられる。

18号溝状遺構

溝の床面が辛うじて遺存するもので、周辺の御池ボラ層との境も不明瞭であり、掘り下げも不可能で、断面の図化もできていない。17号と接して、それから切られている。南端は攪乱のため断絶し、発掘区壁にも断面もあらわれていない。残存長14.2m、幅0.8～12.2m、深さ、計測不可能。

19号・20号溝状遺構

19号・20号は発掘区の東端、長辺方向に平行して延びる遺構である。両遺構とも床面が辛うじて遺存するもので、御池ボラ面との境は明瞭ではない。また、断面も極浅く図化できていない。19号は、長さ21m、幅0.9～1.2m、20号は19号から西へ2.0m離れて、残存長16.3m、幅0.7～1.0mを測る。



第10図 I区北出土遺物実測図(1/3)

遺物 (第10図)

出土遺物は、発掘面積に比較して、極少数である。近代陶磁片、薩摩系陶器片、輸入陶磁器片が出土した。細破片のうち、実測に耐えるものを掲載した。1. は、肥前系磁器とは、胎土、染付の色彩を異にするもの。地元の近世～近代の窯産か。見込は蛇ノ目状に釉が剥がれている。2. 3. 4. は薩摩系陶器である。8. は碗の底部で高台内は露胎となっている。3. は内面の拂目から摺鉢の口縁部であろう。4. も摺鉢かあるいはこね鉢となろう。5. は白磁の梅描文皿片である。6. は雪持笹文の筒形湯呑碗で肥前系となる。7. も肥前系染付皿である。内外に染付による文様をみるが明らかでない。外面の釉に二次的に火を受けた跡が残っている。8. 10. は兩胎の碗あるいは皿。9. は白磁皿片である。

II区南の概要

II区北の南側に続く発掘区であり、南北49m、東西35m、調査面積1,700㎡である。遺構検出面は同じく御池ボラ直上面であり、現地表面より約75cm下となる。南端を中心に、これも住宅地跡と考えられる攪乱域が比較的広範囲に広がっている。また、調査区の南北方向には、調査区の西半面全域にトレンチャーによる攪乱帯が延びており、柱穴等、おもに小遺構検出に支障をきたした。

検出した遺構は、I区・II区南から連続する大溝状遺構であるSE12の他、発掘区を東西に縦断するSE21、SE22、同じくSE21に付属すると考えられる道路状遺構SE23がある。なお、SE12は発掘区の北壁に断面としてのみ確認されたもので、さらに南に延びるものと推定されるが、発掘区の南壁は攪乱層となっており、連続する断面を検出しえなかった。

遺構

21号溝状遺構

発掘区西壁より東方向に延びる全長11.2m、幅約50cmの溝であるが溝底面までほとんど削平されて、その輪郭がわずかにみとめられる程度にしか検出されなかった。東壁で断面観察すると浅いU字状を呈し、幅95cm、厚さ23cmにわたって文明ボラが堆積し、その下層（溝底面直上）やわからない黒色土が堆積している。推定される深さ45cm～50cmと考えられる。これを西壁であらわれた断面を観察すると、やや斜めに切られているせいで、文明ボラ層で幅2.0m、厚さ23cmと広がり、直下の黒色土層（溝底面直上）で1.5m、厚さ20cmほどとなる。

22号溝状遺構

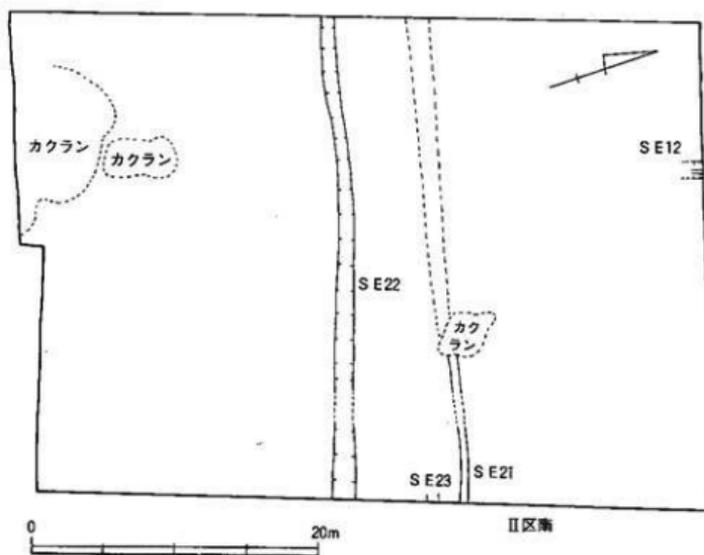
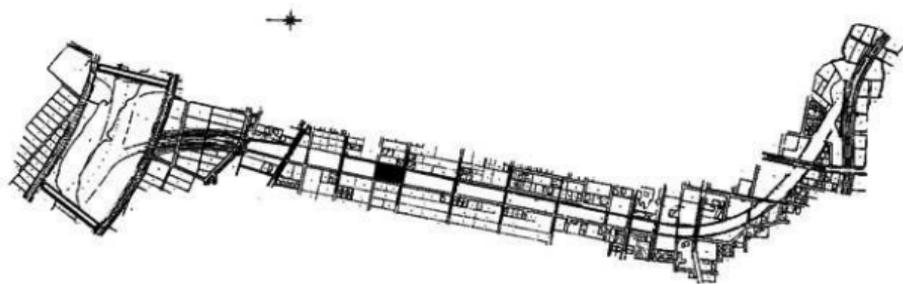
発掘区の短辺にはほぼ並行して、発掘区の東西を貫いて延びる全長35m、上端幅1.4～1.5m、下端幅50cmの溝である。これは比較的遺存状態の良い溝で、断面形は低いU字形をしている。埋土の特徴は全体に文明のボラ層を中間にU字形に包含することで、東壁断面で確認される溝底面までの最深値は85cmを計測する。底面に接する最下層埋土は粒子の細かい黒色土となる。溝中央付近において、薩摩系陶器壺片一点が出土している。

23号溝状遺構

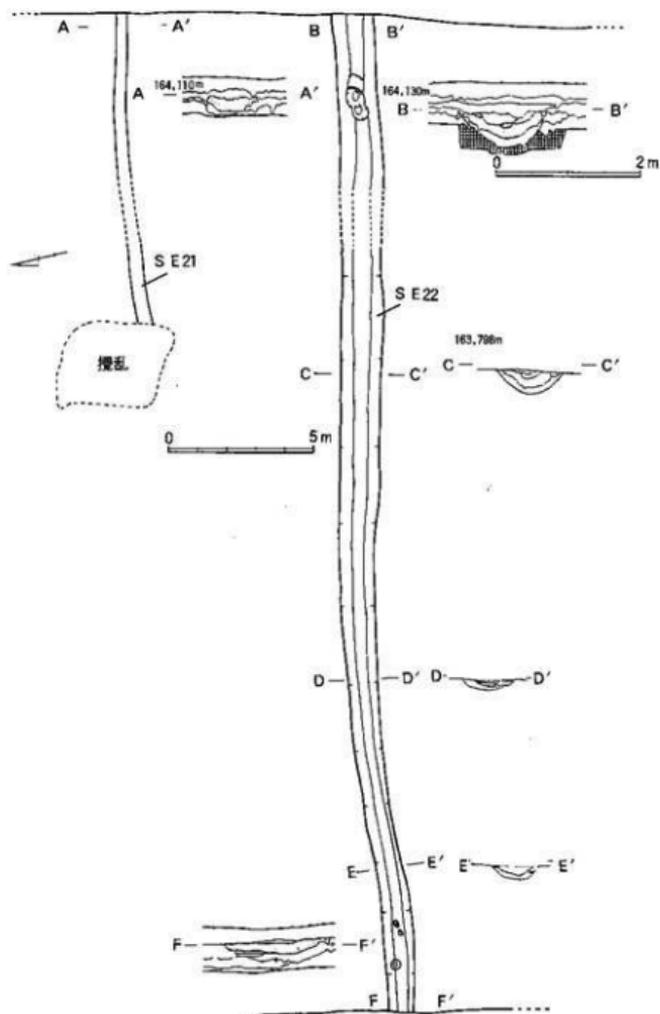
21号溝状遺構に近接して平行に延びていたとおもわれる溝であるが、発掘区の東壁にその断面があらわれるのみで、溝本体は削平されている。断面をみると、幅75cmの文明のボラ層が埋土として堆積し、その下に幅30cm、厚さ4cmの黒褐色の硬化層がみられ、21号溝状遺構に平行する道路状遺構であると考えられる。

遺物（第14図）

1. 2. 3. の3点とも薩摩焼系の陶器である。1. は胴部の半ばに屈曲がみられる。火入れの類か。2. は鉢の口縁であろう。3. は半胴（ハンズ）の胴部片とおもわれる。4. は型づくりの土人形の破片となろう。

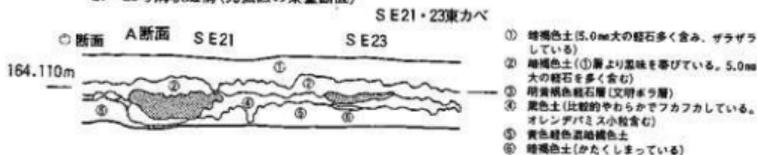


第11図 II区南発掘調査実測図(1/400)



第12图 I区南21·22号溝状遺構実測図(1/200)

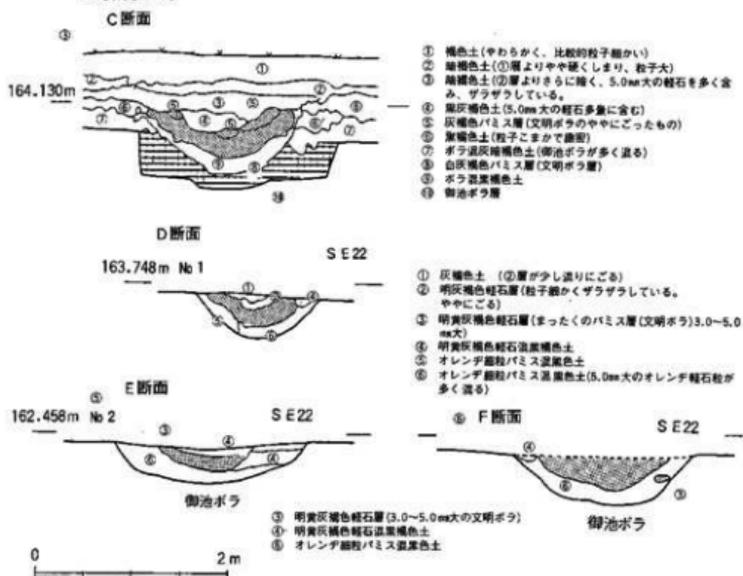
21・23号溝状遺構(発掘区の東壁断面)



21号溝状遺構(発掘区の西壁断面)



22号溝状遺構



第13図 II区南21・22・23号溝状遺構断面実測図(1/60)

4. II区の調査

II区南のさらに南に連続して位置する調査区であり、南北85m、東西34mの南北に細長い発掘区で全面積2,900m²を測る。遺構検出面はこれも御池ボラ層直上面で、溝状遺構（SE26、SE27、SE28）の3本、道路状遺構（SE24、SE25）の2本、さらにA-8、9、B-8、9区において2棟の掘立柱建物、C-4、D-5区で1棟の掘立柱建物、合計3棟の建物跡を検出している。

SE24、25、26、27、28はそれぞれ同一方向の方向性を有し、そのうちSE24、SE25は平行し、SE28は直に折れてIV区に連続するとおもわれる。SE26、SE27は埋土中に文明ボラ層を含んでいる。

なお、B-7、B-8を中心に攪乱域がある。

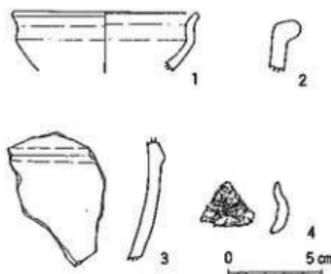
遺構

24・25号溝状遺構

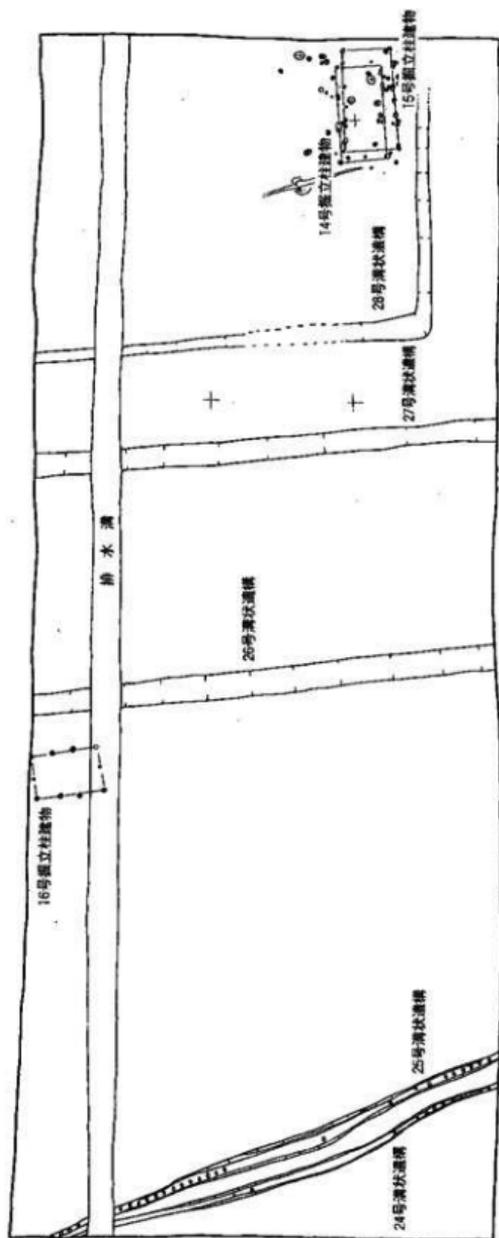
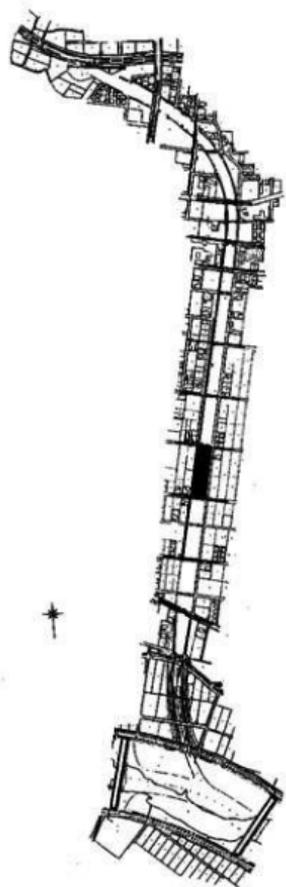
24号、25号溝状遺構は溝底に等間隔に続くピットを有する遺構であり、これ等二本の溝は近接しながら平行して延びていることから、一対の遺構として取り扱うのが妥当とおもわれる遺構である。

24号は、25号に平行しながらN-86°-E方向に延びるもので、検出面からの深さ5.1cm-14.5cmと浅く遺存している。溝中央に円形から楕円形の浅い小ピットが等間隔にならんでいる。小ピットは溝中央から西側により多く遺存する。中央から東側にかけてはほとんど遺存しないが、これは平行する25号東端と対照的である。24号は全長32.1m、全幅30cm-100cmとなり、溝幅は中央付近で幅広く、東端に向かって狭くなる。東端と西端の溝底レベル差は約50cmを測り東端が高い。

25号は全長34.6m、全幅38cm-169.9cmを測り、24号より全幅でやや幅広くなる。方向は24号と平行し、その間隔は溝中心から溝中心までの距離で1.5m-2.0mで、東端でその間隔が狭くなって約80cmとなる。溝西端より東へ9.0m、および溝東端から西へ14.0mの間に一定間隔に穿れた浅い小ピット列が遺存する。24号と同様に溝中央部では希薄となる。溝中央付近でも溝底が残っているので、ピットそのものが浅く掘られていたものと推定され、すでに削平されたものと考えられる。また溝底、ピット底は酸化鉄が凝固したとみられる赤褐色の薄い層となって、ひじょうに硬くしまっている。東端と西端の溝底レベル差は約47cm東端が高く、24号とほぼ同じ値をとっている。



第14図 II区南出土遺物実測図 1/3



第15圖 III区免掘調査区実測図(1/400)

26号溝状遺構

発掘区の東西に延びる溝状遺構である。検出された溝状遺構のなかでは、最大の幅175cmを有する。27号、28号と同じ方向性を有するので、相互に関連する遺構であろう。とくに27号とは、方向性、規模ともに似かよっている。断面は、浅いU字状をしている。埋土中に灰黄白色の軽石粒を厚く含んでいる。溝底は御池ボラ層となり、底に何等の遺構も伴わない。

27号溝状遺構

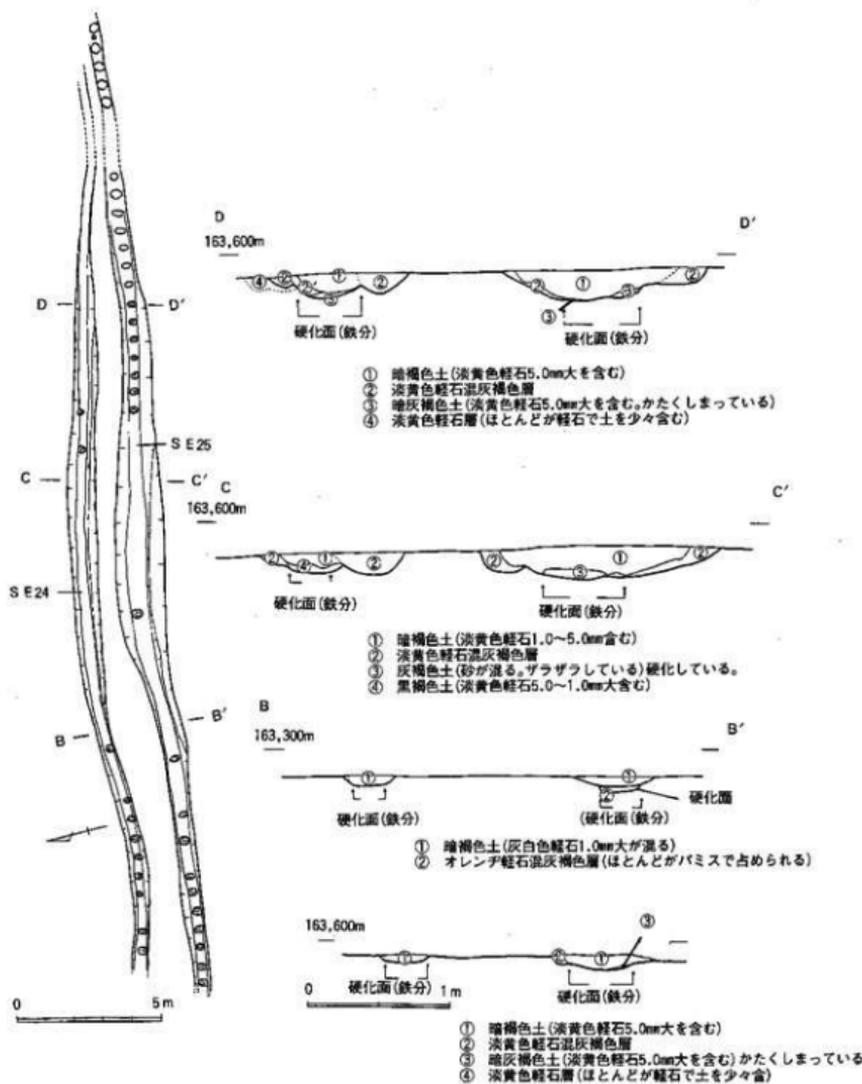
発掘区の東西に延びる溝状遺構で、さらに東西に長く延びているものと推定される。26号、28号と方向を同じくする。幅は160cmで26号よりやや小さな値をとっている。9号、10号掘立柱建物のある一区画を、28号溝状遺構のように閉鎖する可能性がある。断面は、浅いU字形で、埋土中に灰黄白色の軽石粒を厚く含むのが特徴である。

28号溝状遺構

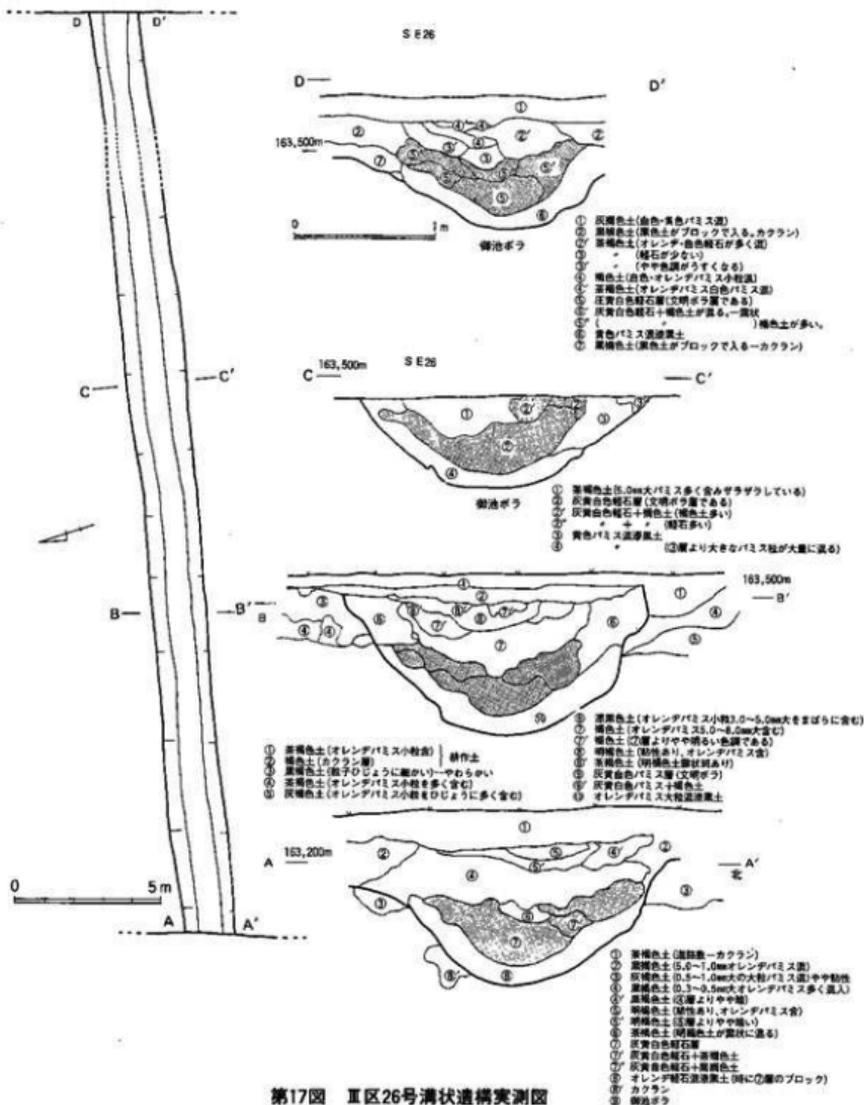
27号溝状遺構の7m南にあるL字状に折れる溝である。26号、27号と方向性を同じくするので、28号は、内区画を護る最も内側の施設であろうか。屈折部はほとんど直角をなしている。幅は平均150cmで、26、27号より小さな溝である。断面は箱型となりこれも26号、27号と趣を異にする。

14号掘立柱建物

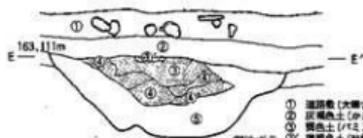
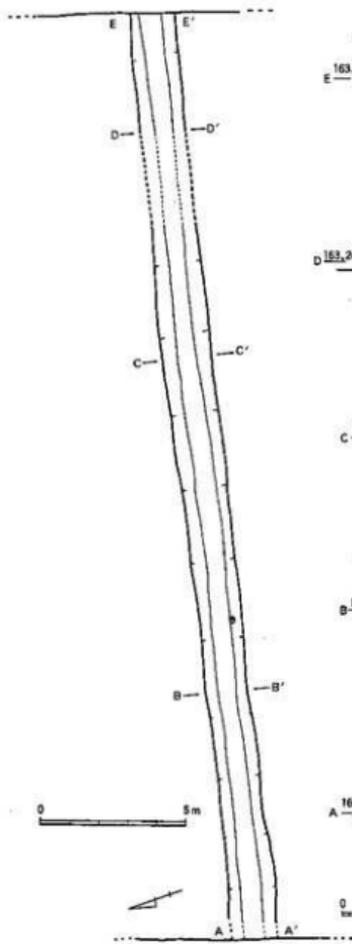
Ⅲ区発掘区の南端にあり、A8、A9、B8、B9区にまたがるもので、15号掘立柱建物と重複関係にある。14号、15号建物は28号溝状遺構が閉鎖するとおもわれる区画内にあって、14号の西側桁行柱列からすぐ1.5m脇を南北に28号溝状遺構がはしっている。14号建物は1間×5間の南北棟建物でそれぞれ3.0-3.9m、7.75mを計測する。柱穴掘方は楕円、あるいは不整楕円形となり、西側桁行側の柱穴に二重、あるいは三重に連結した掘方をもつものがある。柱間寸法は、西側と東側とではやや不対応となる。柱穴埋土はサラサラとした暗かっ色土で、炭化粒を若干含むものもある。掘方はほとんどみな垂直に掘られる。柱穴の直径は27cm-35cmで、深さは検出面から10cmから19cmと浅い。建物主軸はN-16°-Eとなる。



第16図 Ⅱ区24・25号溝状遺構実測図



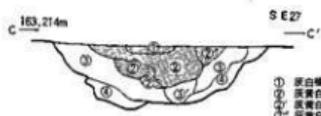
第17図 Ⅱ区26号溝状遺構実測図



- ① 道筋敷 (本層土) カクラン
- ② 灰褐色土 (かたしるも、黄色パリス多く含む)
- ③ 黄色土 (パリス黄サザサしている)
- ④ 厚褐色土 (粘性大)
- ⑤ 灰黄白色粘石層 (文明ボラ)
- ⑥ 灰黄白色粘石+厚褐色土
- ⑦ * + * 土層土
- ⑧ 厚褐色土 (オランダパリス 1.0mm大多く含む)
- ⑨ 厚褐色土 (よくしまっている)



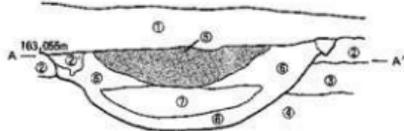
- ① 灰白褐色土 (灰黄白色パリス混)
- ② 灰黄白色粘石層 (文明ボラ)
- ③ 灰黄白色粘石+厚褐色土+灰褐色土 (パリス多)
- ④ 灰黄白色粘石+厚褐色土
- ⑤ 厚褐色土 (オランダパリス混 1.0mm大粒混)
- ⑥ * (1.0-1.5mm大オランダパリス大粒混)
- ⑦ * (1.0mm大のオランダパリス多く含む)



- ① 灰白褐色土 (灰黄白色パリス混)
- ② 灰黄白色粘石層 (文明ボラ)
- ③ 灰黄白色粘石+厚褐色土+灰褐色土 (パリス多)
- ④ 灰黄白色粘石+厚褐色土
- ⑤ 厚褐色土 (オランダパリス混 1.0mm大粒混)
- ⑥ * (1.0-1.5mm大オランダパリス大粒混)
- ⑦ * (1.0mm大のオランダパリス多く含む)



- ① 灰白褐色土 (灰黄白色パリス混)
- ② 灰黄白色粘石層 (文明ボラ)
- ③ 灰黄白色粘石+厚褐色土+灰褐色土 (パリス多)
- ④ 灰黄白色粘石+厚褐色土
- ⑤ 厚褐色土 (オランダパリス混 1.0mm大粒混)
- ⑥ * (1.0-1.5mm大オランダパリス大粒混)
- ⑦ * (1.0mm大のオランダパリス多く含む)

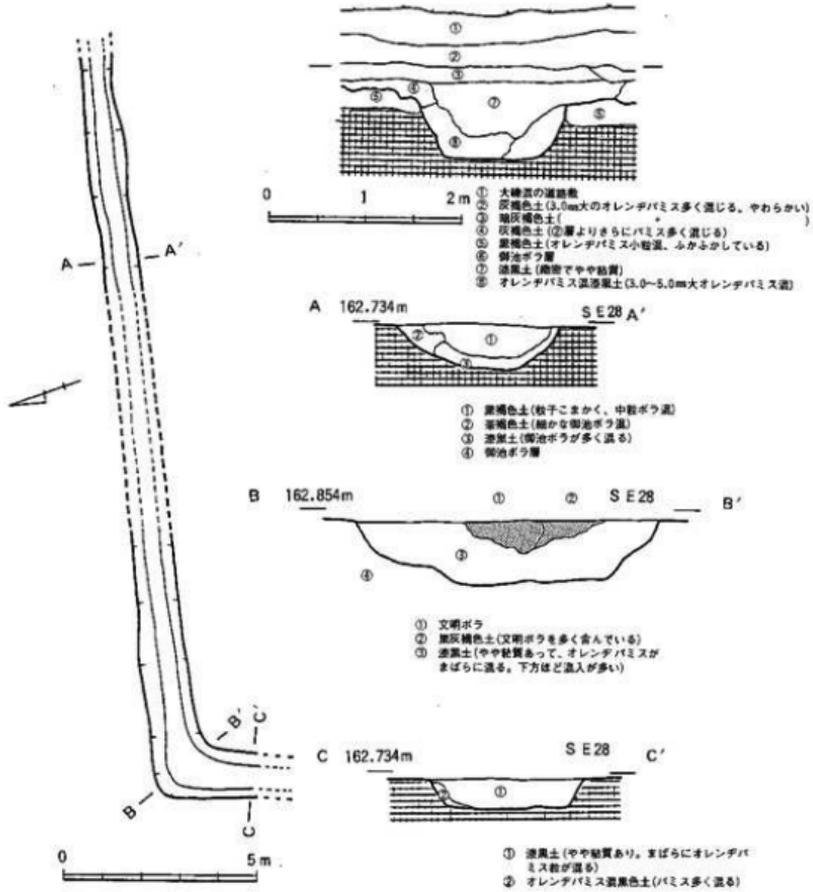


- ① 道筋敷部分 (厚瓦土)
- ② 厚褐色土 (粘土層から、厚褐色の粘石混る)
- ③ 灰褐色土 (灰黄色の粘石層から多く混る)
- ④ 黄色粘石層 (7.0mm大の粘石層である) 一部ボラ
- ⑤ 灰黄白色粘石層 (1.0-3.0mm大の文明ボラ層である、所々に褐色土が入る)
- ⑥ 厚褐色土 (黄色粘石混、0.5mm大の粒が分り、まざるに混る)
- ⑦ 赤褐色粘石層 (1.0mm-1.5mm大の粒の粘石層、やや赤味がかった)

第18図 III区27号溝状遺構実測図(1/200)

発掘区東壁

S E 28東壁



第19図 III区28号溝状遺構実測図

15号掘立柱建物

建物主軸が14号建物より1°東に振れるもので、その規模も14号建物よりひとまわり小さい1間×3間で、それぞれ3.6m×6.6mを計測している。掘方は円形が多く直径の平均は9号のそれよりやや大きな値をとっている。西側桁行の南端は検出していないが、東西桁行柱穴はそれぞれ不対応となっている。柱穴の埋土は9号と同一とみることができ、その違いによって復元できたものではない。14号、15号の新旧関係は検証するものがないが、拡張とすれば15号から14号となる。

16号掘立柱建物

発掘区の西端に一部がかかる掘立柱建物である。14・15号掘立柱建物が28号溝状遺構に囲まれる建物であるとしたら、16号掘立柱建物は26・27号溝状遺構の外側に位置する建物である。また、16号掘立柱建物は、26号溝状遺構に隣接し、北に約4m離れている。16号掘立柱建物の主軸は26・27号溝状遺構の延びる方向に並行し、14・15号掘立柱建物に対しては直行気味である。16号掘立柱建物は、2間×3間の建物となろうが、東側の梁間3箇所の柱穴は、水抜き溝のために失われている。梁間の柱間寸法1.5m、桁行の柱間寸法1.6mを計る。

遺物

Ⅲ区の各遺構からは、SE25の坏底部片、SE28の白磁皿が目立つ出土遺物で、他は遺構に直接ともなわないものである。しかし、遺構の比較的濃密な28号溝状遺構に囲繞された9号・10号掘立柱建物周辺、およびその南側近辺から数は少ないながらも、青磁、白磁、染付、国産陶器片その他が出土している。

25号溝状遺構出土遺物

坏の底部片である。底部は風化のため切り離し痕は明らかでない。

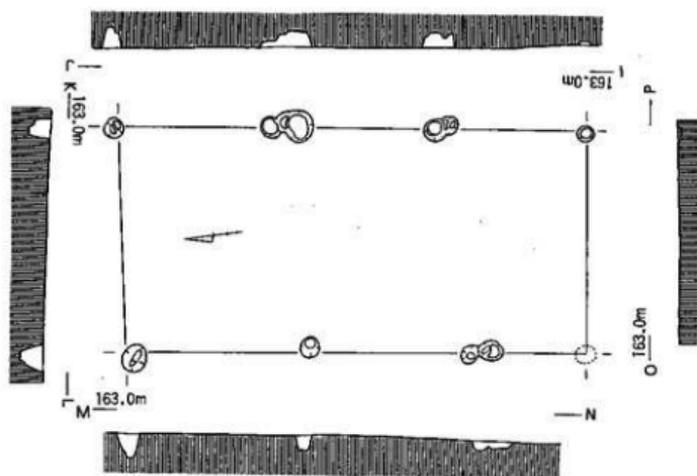
28号溝状遺構出土遺物（第22図11）

11. は片遺存で出土した白磁皿。高台から腰にかけては露胎。口径10.7cm、口縁端は尖り気味となる。高台内、胎は鋭く切られている。胎土は白色精良であるが、0.5mm以下の濃茶、黒色の細砂粒を含んでいる。15世紀代の年代が与えられる。

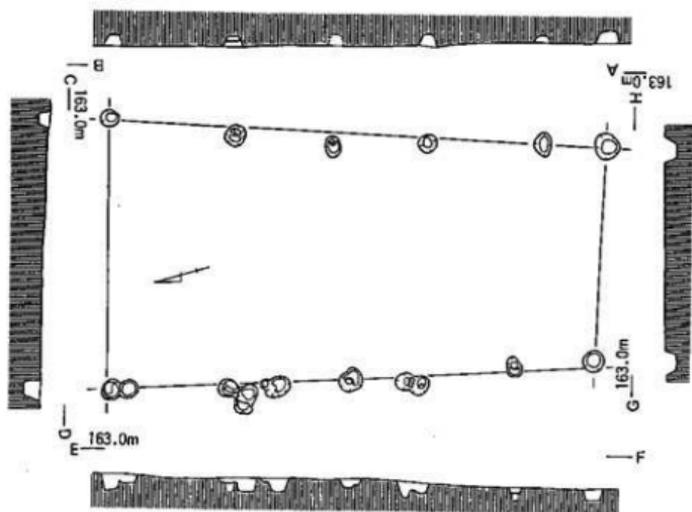
その他の出土遺物（第22図）

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. は青磁碗である。1. は口縁端部が急外反する推定口径13.5cmの14世紀後半から15世紀中ごろの碗。内外に大き目の貫入がある。外側に陰刻草花文が一部遺存

する。胎土は灰白色を呈する。2. は同一個体である。4. はやや薄手で外反の少ない碗形になるものか。口縁部に雷文帯がある。14世紀末から15世紀中頃。5. は、線刻の蓮弁文碗片。7. は龍泉窯系の高台片となる。8. 9. 10. は青磁棧花皿の口縁片である。8. には内側に陰刻線がみえる。12. 13. 14. 15. 17. 18. 19. 20は白磁皿である。12. は見入、腰部が露胎となっている。18. は底部を欠いているが六角坏である。21. は、染付壽字文蓋物である。ツマミの部分が一部遺存している。18世紀代の肥前系とおもわれる。22. は丸文碗の口縁部で丸文が一部見える。肥前系。23. は、19世紀代の肥前系以外の磁器染付碗である。見込みは蛇ノ目軸ハギとなっている。薩摩焼系かもしれない。25. 26. は、備前の摺鉢である。26. は底部で、6~7条の太いおろし目がみられる。25. は片口の部分。口縁断面は下方に垂れる三角形となり、15世紀後半から末の時期となろう。27. は、ほぼ二分の一を遺存する須恵質の摺鉢である。これまでに類例が少なく、九州内産かと推定される。口縁端部は平坦で肥厚しない。おろし目（櫛目）は6条、14本確認される。底部のそれは放射状に施されている。15世紀初頭以降のものか。



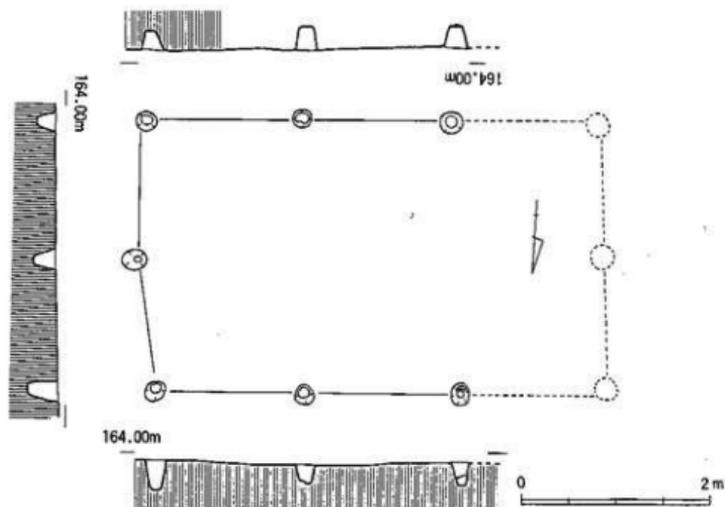
14号掘立柱建物



15号掘立柱建物

0 2m

第20图 Ⅲ区14号・15号掘立柱建物实测图(1/80)



第21图 Ⅱ区16号掘立柱建筑物实测图

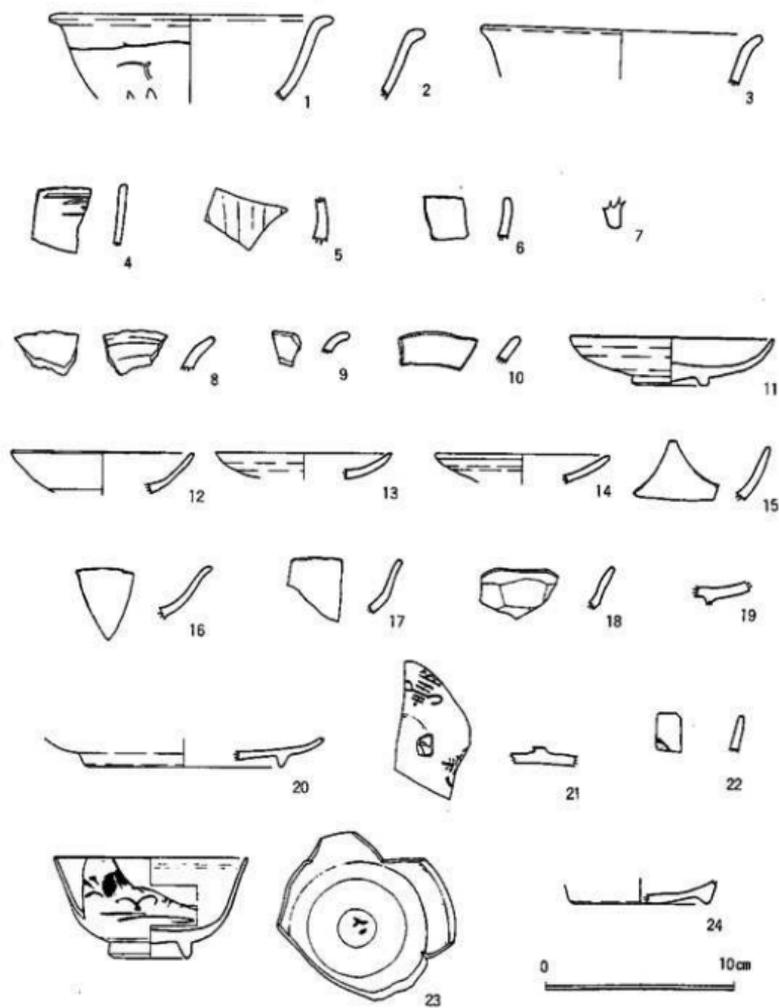
24号溝状遺構

PzNo Pz 位置	Pz No		Pz No																							
	2401	2402	2403	2404	2405	2406	2407	2408	2409	2410	2411	2412	2413	2414												
長径(m)	33	33	34	33	35	32	30	30	38	30	38	38	38	36												
短径(m)	28	66	19 (30)	18	64	36	68	22	66	32	68	23	68	18 (30)	27	66	36	(30)	23	68	18 (30)	24	(30)	24	(30)	17
深さ(m)	10.6	6.0	4.4	9.0	8.1	8.3	8.5	4.8	7.8	3.4	5.9	6.6	7.0	6.1												

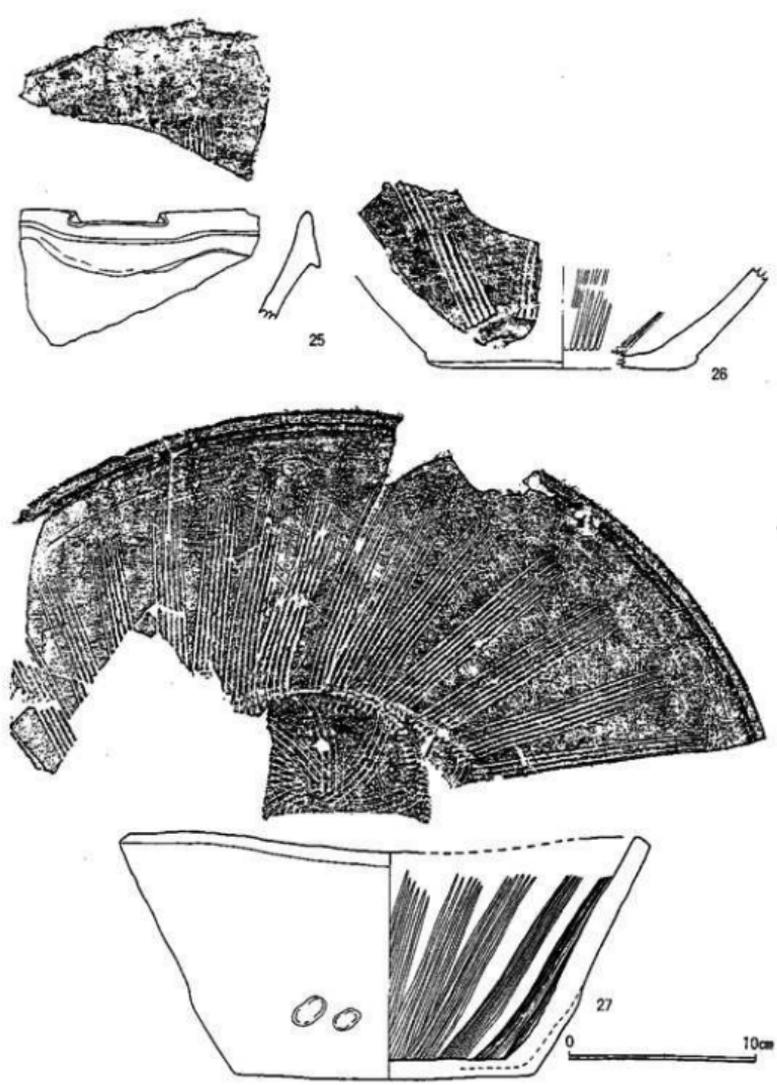
25号溝状遺構

PzNo Pz 位置	Pz No		Pz No		Pz No																								
	2501	2502	2503	2504	2505	2506	2507	2508	2509	2510	2511	2512	2513	2514	2515														
長径(m)	32	33	37	33	32	34	36	36	32	32	42	30	30	32	36														
短径(m)	36	64	21	48	26	43	30	66	24	66	33	58	18 (30)	28	30	22	(30)	20	(30)	30	(30)	19	68	20	62	24	42	18	64
深さ(m)	9.2	8.6	6.9	5.4	3.3	3.9	2.3	9.6	9.0	4.1	1.5	5.7	3.6	6.6	4.9														

2516	2517	2518	2519	2520	2521	2522	2523	2524	2525	2526	2527	2528	2529	2530												
31	30	36	30	34	35	36	47	41	29	30	30	30	34	36												
20	64	20	64	19	68	21	66	20	60	22	66	24	68	32	62	38	(30)	36	68	34	66	34	66	38	70	38
3.0	3.4	7.8	10.6	6.7	7.4	7.4	7.5	6.6	10.7	6.2	9.1	11.2	12.8	10.0												



第22图 Ⅲ区出土文物实测图(1/3) (1)



第23图 Ⅱ区出土物实测图(1/3)(2)

5. N区の調査

Ⅳ区は調査面積約3,000㎡で、掘立柱建物跡13棟、溝状遺構11条、土壇7基、井戸3基、遺物も輸入陶磁など多量に出土し、全調査区のなかで遺構・遺物とも最も集中して検出された。

掘立柱建物跡

Ⅳ区では、柱穴の多くはSE3からSE6に挟まれた区域に分布し、特に出入口付近に集中しているが、全体的には密ではない。また、SE1より南にはほとんど検出されなかった。柱穴の埋土には、御池ボラを含んだ黒褐色粘質土や暗褐色土、わずかに白ボラの堆積が確認されるものなどある。柱穴からはほとんど遺物は認められなかったが、SB6の柱穴からは銅銭が出土した。掘立柱建物跡は、調査時に8棟(SB1~8)、図上操作により5棟(SB9~13)復元し、重複関係から少なくとも二時期以上の時期幅が考えられる。柱穴間の距離については図に示した。

SB1 (第25図)

9・10-A・B区に検出され、主軸をN-13°-Eにとる。建物は1間×3間の規模で、梁の南北に廂を有し、廂は2間となる。梁行3.8m、桁行6.1・6.4mで、面積は24.9㎡を測る。柱穴は円形を呈し、埋土は御池ボラを含んだ黒褐色粘質土である。柱穴径は20~30cmで、深さ20~40cm、廂についてはやや浅めである。

SB2 (第25図)

9B区のSB1のすぐ東に検出され、主軸をN-75°-Wにとる。建物の東側はSE1によって切られている。柱穴の埋土は御池ボラを含んだ暗褐色土でやや固くしまっている。柱穴径は約20~35cmで、深さ約30cmである。

SB3 (第25図)

9B区に検出され、主軸はN-76°-Eを示し、SB2とはほぼ平行している。建物の東側はSE1によって切れ、北側桁の柱穴を一個検出できなかった。柱穴は円形を呈し、埋土は御池ボラを含んだ黒褐色粘質土である。柱穴径は約20cmで、深さ20~40cm。

SB4 (第25図)

7D区に検出され、2間×2間の総柱建物で主軸はN-16°-Eを示す。梁行3.6・3.7m、桁行4.9・5.1mで、面積は23.4㎡を測る。柱穴は円形を呈し、柱穴の埋土は御池ボラを含んだ暗褐色土でやや固くしまっている。柱穴径は20~40cmで、深さ約10cmと浅い。

SB5 (第25図)

5C・Dに検出され、主軸をN-15°-Eにとる1間×2間の建物である。梁行4.0・4.25m、桁行4.2mで、面積は17.4㎡を測る。柱穴の埋土は御池ボラを多量に含んだ暗褐色でやや固くしまっている。柱穴径は30~40cmで、深さ10~20cmである。

SB6 (第26図)

4・5-C・D区に検出された。主軸をN-69°-Wにとる1間×5間の建物で、面積は54㎡

を測り最も大型である。梁行5.4・5.5m、桁行9.9m、柱穴径は20~30cmで、深さ20~40cmとなる。埋土には白ボラの堆積が認められ、柱穴内から洪武通寶や永楽通寶などの銅銭が一枚ずつ出土した。S B 12と重複している。

S B 7 (第26図)

3・4~C・D区に検出された1間×3間の建物で、主軸はN-80°-Wを示す。梁行3.6m、桁行6.0・6.3mで、面積は22.1m²を測る。柱穴の埋土は御池ボラを含んだ暗褐色土で、柱穴径は30~40cm、深さ20~40cmとなる。S B 13と重複している。

S B 8 (第26図)

1・2~C区に検出したが、北東隅の柱穴は検出できなかった。建物は2間×2間で東西に長く、主軸をN-13°-Eにとる。梁行3.8m、桁行4.8mで、面積は18.2m²を測る。柱穴の埋土は御池ボラを含んだ暗褐色土で、柱穴径は30~40cmで、深さ20~50cmとなる。

S B 9 (第27図)

7・8~Cに検出され、主軸をN-14°-Eにとる。建物は1間×2間の規模で、梁行3.6m、桁行3.1・3.5mで、面積は11.9m²を測る。柱穴の埋土は御池ボラを含んだ暗褐色土で、柱穴径は20~30cmで、深さは10~20cmと浅い。

S B 10 (第27図)

6・7~B・C区に検出され、S B 11と重複している。建物は1間×1間の身の舎の西側に桁行2間の廂が付く。主軸をN-12°-Eを示し、梁行1.8・1.9m、桁行3.8mで、面積は10.6m²を測る。柱穴径は約30cmで、深さ20~40cmとなる。柱穴の埋土は白ボラを少量含んだ暗褐色土である。

S B 11 (第27図)

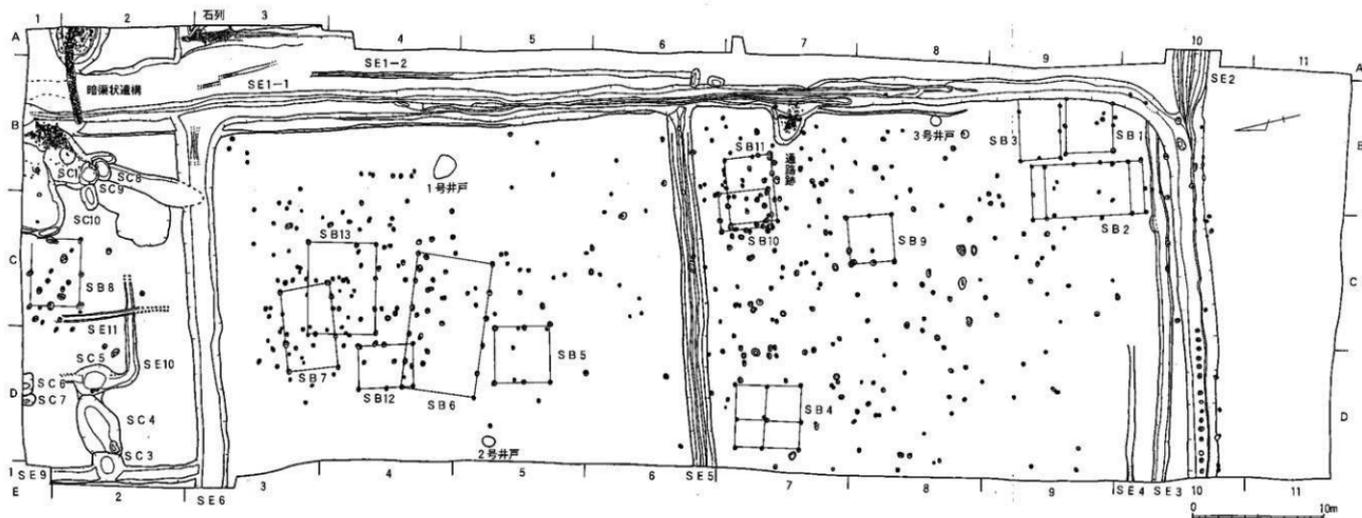
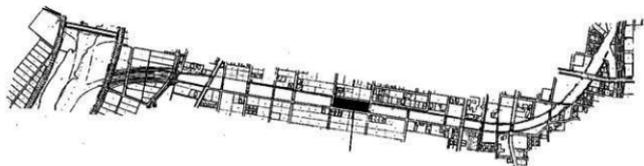
6・7~B・Cに検出され、主軸をN-81°-Wにとる。建物は1間×3間の規模で、梁行3.5・3.7m、桁行4.8mで、面積は17.3m²を測る。柱穴の埋土は御池ボラを含んだ暗褐色土でやや固くしまっている。柱穴径は20~30cmで、深さ20~40cmとなる。

S B 12 (第27図)

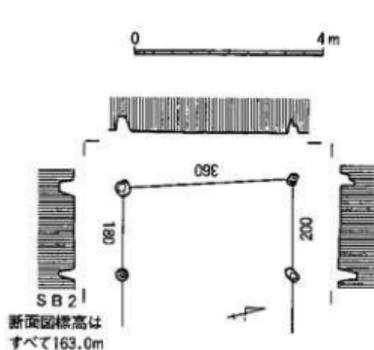
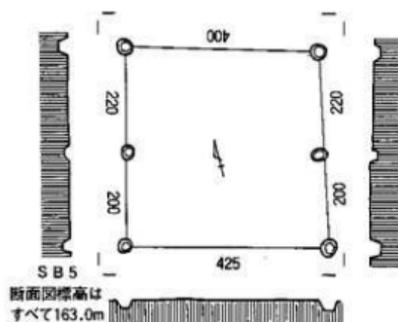
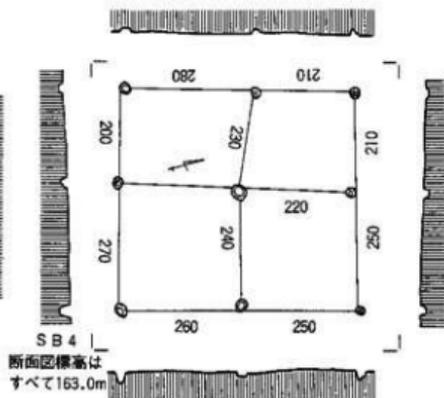
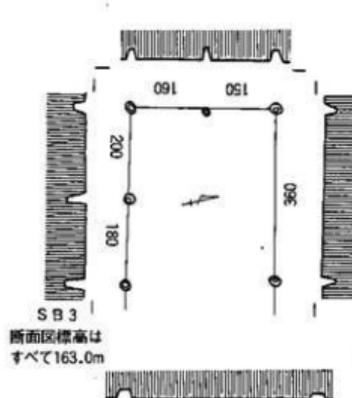
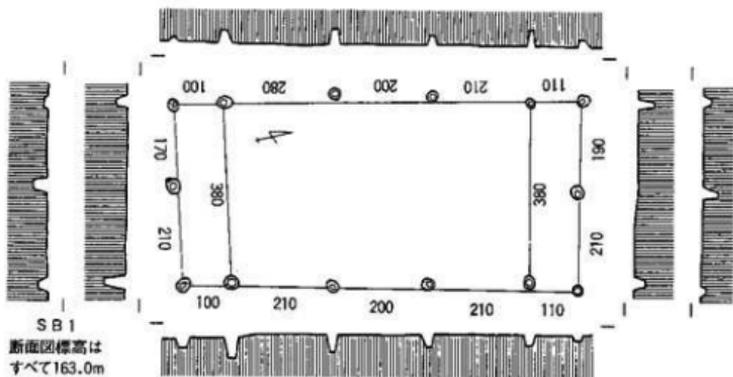
4D区に検出された2間×2間の建物で、N-79°-Wに主軸をとる。北側梁の中央の柱穴は確認できなかった。梁行3.2m、桁行4.0・4.1mで、面積は13.0m²を測る。柱穴は円形を呈し、埋土は御池ボラを含んだ黒褐色粘質土である。柱穴径は20~30cmで、深さ約20cm。S B 6と重複している。

S B 13 (第27図)

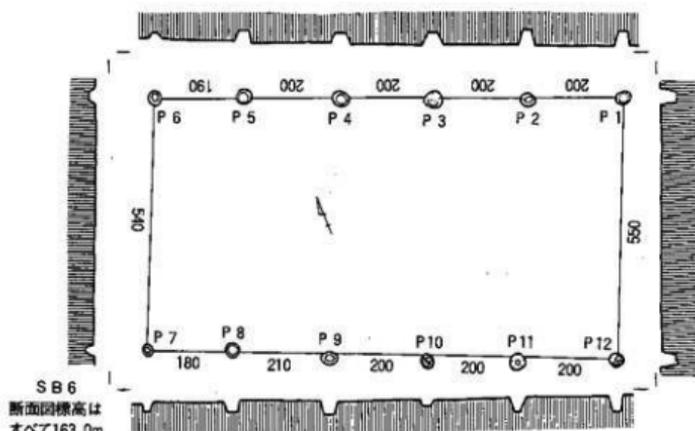
3・4~C・D区に検出され、N-75°-Wに主軸をとる。建物は1間×3間の規模で、梁行5.2m、桁行6.6・6.8m、面積は34.8m²を測るが、北側桁行の柱穴を一個確認できなかった。柱穴の埋土は御池ボラを含んだ暗褐色土でやや固くしまっている。柱穴径は20~40cmで、深さ10~20cmで、S B 7と重複している。



第24图 Ⅱ区沟槽配置图



第25図 SB1～5遺構実測図



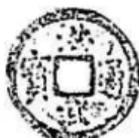
P 1



P 3



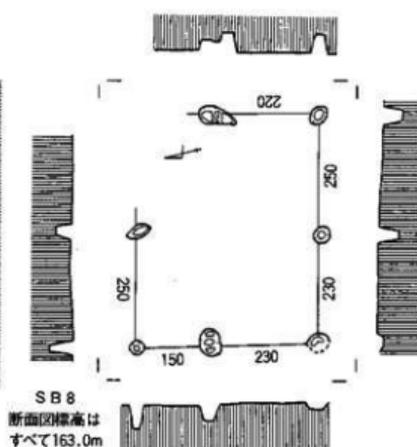
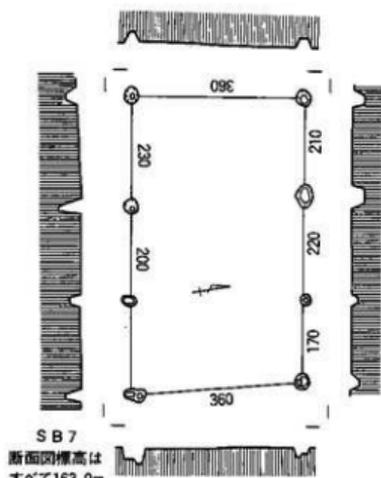
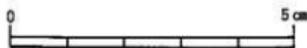
P 4



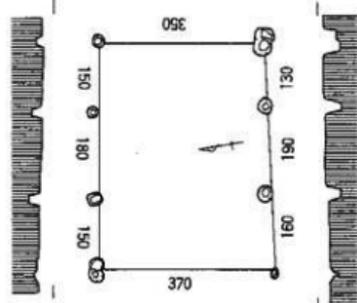
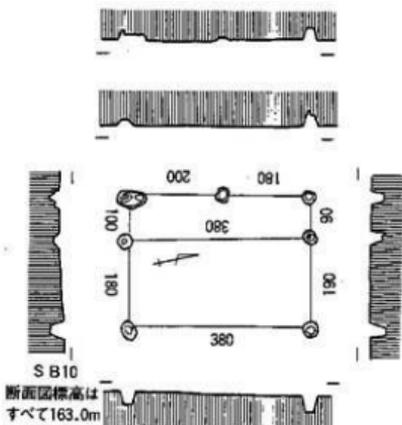
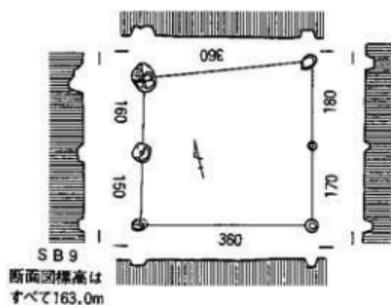
P 8



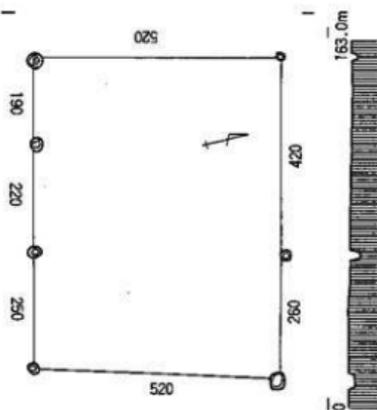
P 9



第26図 SB 6~8 遺構実測図



0 4m



第27図 SB9~13遺構実測図

溝状遺構

溝状遺構は11条検出されたが、SE1・5・6以外の溝状遺構については残りが良好ではないために状況が把握できなかった。SE5・6では白ボラの堆積が確認され、また土層断面による切り合い関係は、SE3→SE1、SE5・6→SE1、SE2→SE1、SE10→SE11となる。なお、SE7・8についてはSE1の一部であると考えたため欠如している。

溝状遺構の広がりは、Ⅳ区南やⅤ区において遺構がほとんど検出されていないことから、SE5・6はⅢ区で検出された東西方向にのびる溝状遺構と繋がる可能性が高く、北側に集落が展開していると考えられる。

SE1

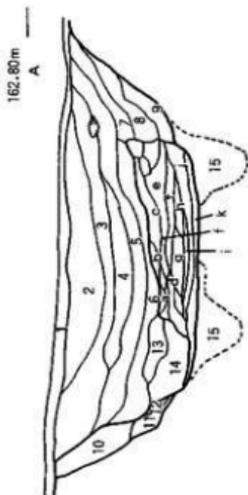
発掘区の東端の壁面に沿って検出され、SE2・3・5・6と重複関係にあり、いずれよりも新しい。遺構は調査区の南端10B区で東西方向からL字状に曲り、N-11°-Eの北方向にのびる。検出面での溝の埋土は暗褐色土で、文明の火山灰は堆積していない。Ⅲ区ではSE1の遺構が検出されていないことから、北端から東あるいは東西に延びると考えられる。

出土遺物の大部分は流れ込みと考えられ、床面から礫群と伴に出土した薩摩焼の三足鉢(131)が溝状遺構の下限を示すものではないかと考えられる。

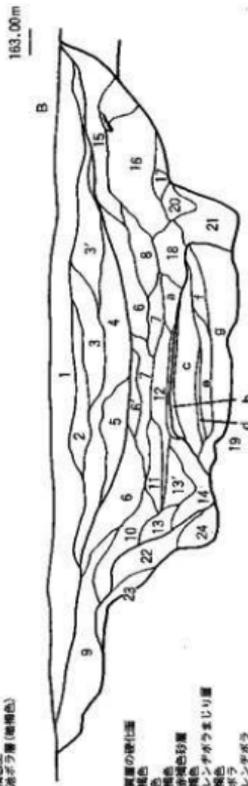
東西方向の溝は、検出面で幅2.2m、深さ0.80-1.0m。第5層下面には砂や炭化物が多くみられ、この面で再利用された可能性がある。断面は浅い箱薬研掘状を呈すが、実際の溝幅は3m前後になると想定される。また、溝底には、幅約1m、厚さ約30cmの硬化面が何層も重なり合い柱状に盛り上がり、硬化面の土層は砂質で白ボラや御池ボラが混入している(第28図)。さらに硬化面の下には、西端から長さ約11mにわたって浅い凹みが検出された。凹みは径約30cm、深さ約10cmの円形をなし、凹みの間隔は20-70cmと一定ではない。硬化面は溝が北に曲がる付近で途切れ、それより北では認められなかった。遺物は、土師質土器(5)、常滑焼(12)、備前焼(16・17)、青磁(26)、白磁(61・83)、染付(89・95・107)、天目茶碗(111)、肥前染付皿(115)、薩摩焼(121・126・137)、キセル(148)などが出土している。

南北方向の溝は、急に幅を広げ調査区外に広がり、その幅は6m以上になると考えられるが、調査区の北端では次第に狭くなり約4mとなる。検出面からの深さは約0.7mで、御池ボラ下層まで掘り込まれている。溝の底面は全体に御池ボラが固く締まるが、東西方向の溝でみられた互層をなした厚みのある硬化面ではなく、厚さ3-5cmの薄いものである。また、西側壁面近くの底面には、1-8区まで約60m、幅0.7-1m、深さ0.1-0.2mの溝(SE1-1)が走る。それに並行して3-6区まで幅約0.4mの溝(SE1-2)のほか、数本の浅い溝が検出されている。

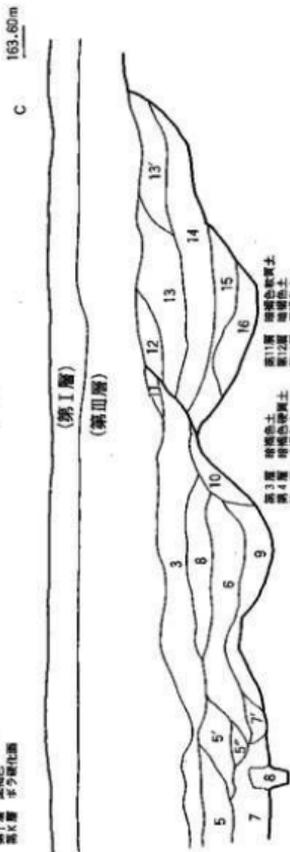
7B区ではSE1から西側に入る通路状の遺構や調査区の北端2A・B区では溝の硬化面を分断して暗渠状の遺構が設けられている。さらにその西側で検出されたいくつかの土嚢や不定形の落込み・石積み(第32・33図)は時期、用途、SE1との関係など不明である。



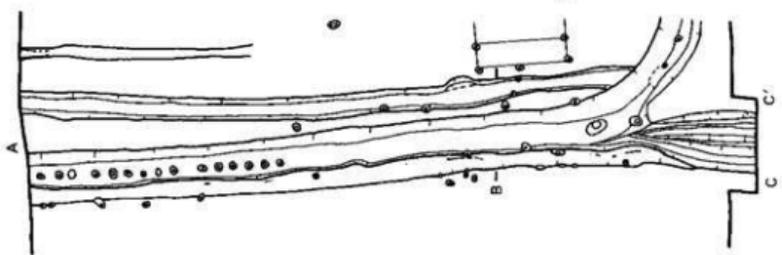
- 第1層 黄土(耕作土)
- 第2層 暗褐色土(砂や礫混じり層)
- 第3層 黄土(粘質あり)
- 第4層 暗褐色土(粘質あり)
- 第5層 暗褐色土(粘質あり)
- 第6層 暗褐色土(粘質あり)
- 第7層 暗褐色土(粘質あり)
- 第8層 黄土(粘質あり)
- 第9層 黄土(粘質あり)
- 第10層 黄土(粘質あり)
- 第11層 暗褐色土(砂混じり層)
- 第12層 暗褐色土(粘質あり)
- 第13層 暗褐色土(粘質あり)
- 第14層 暗褐色土(粘質あり)
- 第15層 暗褐色土(粘質あり)



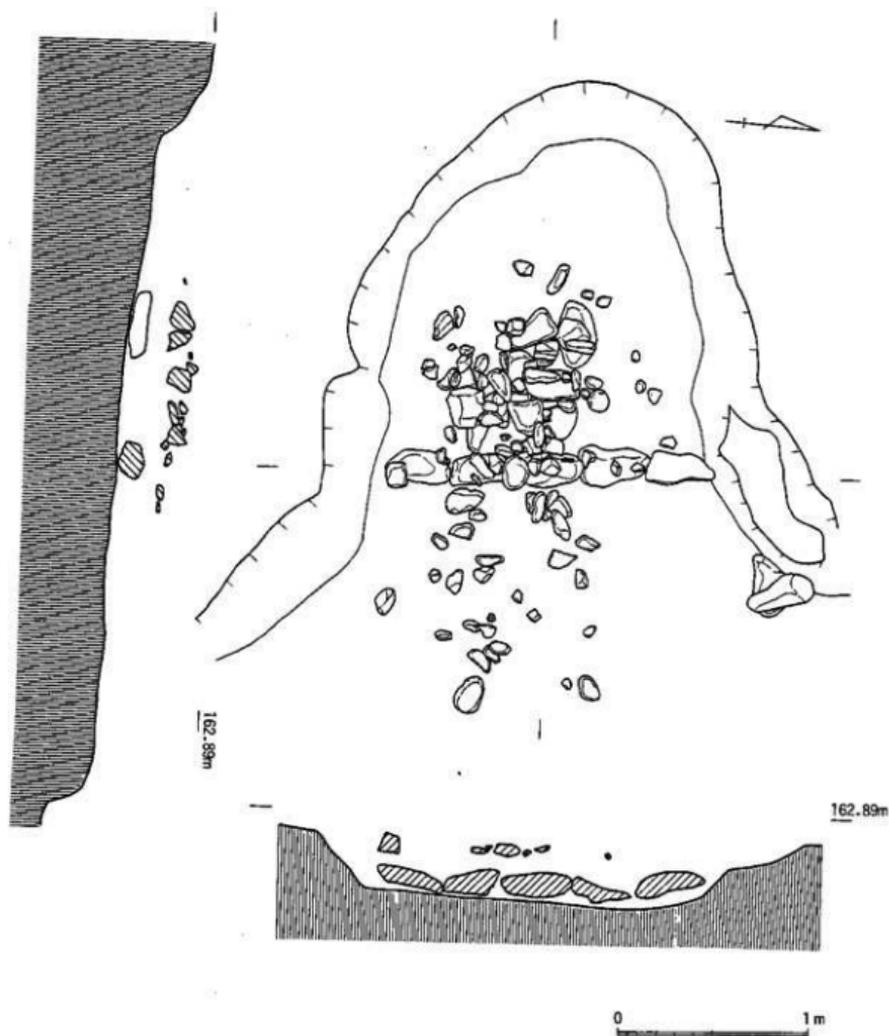
- 第1層 暗褐色土(粘質あり)
- 第2層 暗褐色土(粘質あり)
- 第3層 暗褐色土(粘質あり)
- 第4層 暗褐色土(粘質あり)
- 第5層 暗褐色土(粘質あり)
- 第6層 暗褐色土(粘質あり)
- 第7層 暗褐色土(粘質あり)
- 第8層 暗褐色土(粘質あり)
- 第9層 暗褐色土(粘質あり)
- 第10層 暗褐色土(粘質あり)
- 第11層 暗褐色土(粘質あり)
- 第12層 暗褐色土(粘質あり)
- 第13層 暗褐色土(粘質あり)
- 第14層 暗褐色土(粘質あり)
- 第15層 暗褐色土(粘質あり)
- 第16層 暗褐色土(粘質あり)
- 第17層 暗褐色土(粘質あり)
- 第18層 暗褐色土(粘質あり)
- 第19層 暗褐色土(粘質あり)
- 第20層 暗褐色土(粘質あり)
- 第21層 暗褐色土(粘質あり)
- 第22層 暗褐色土(粘質あり)
- 第23層 暗褐色土(粘質あり)
- 第24層 暗褐色土(粘質あり)



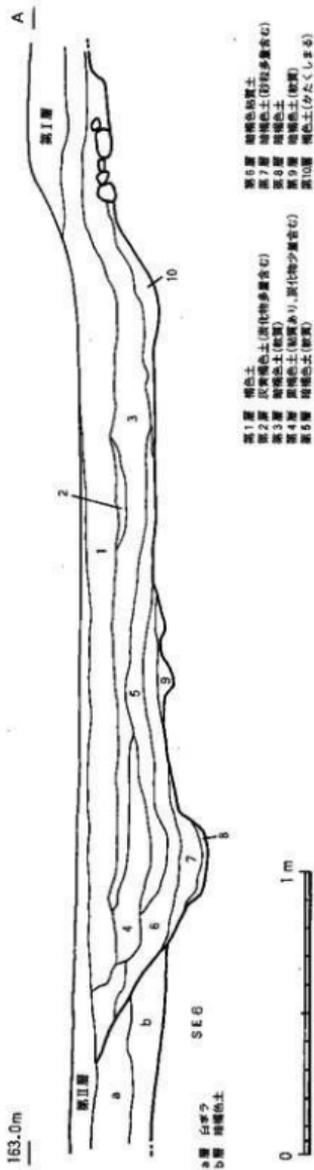
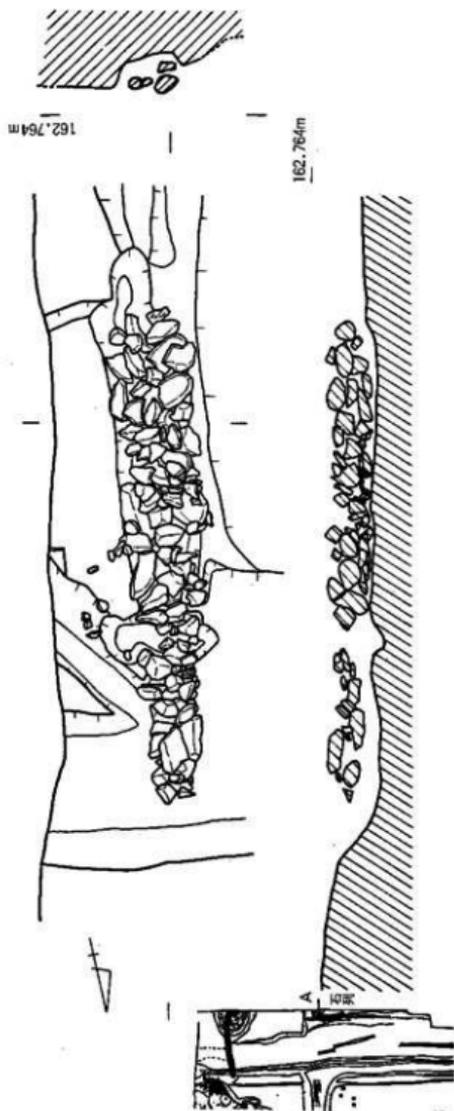
- 第1層 暗褐色土
- 第2層 暗褐色土
- 第3層 暗褐色土
- 第4層 暗褐色土
- 第5層 暗褐色土
- 第6層 暗褐色土
- 第7層 暗褐色土
- 第8層 暗褐色土
- 第9層 暗褐色土
- 第10層 暗褐色土
- 第11層 暗褐色土
- 第12層 暗褐色土
- 第13層 暗褐色土
- 第14層 暗褐色土
- 第15層 暗褐色土
- 第16層 暗褐色土



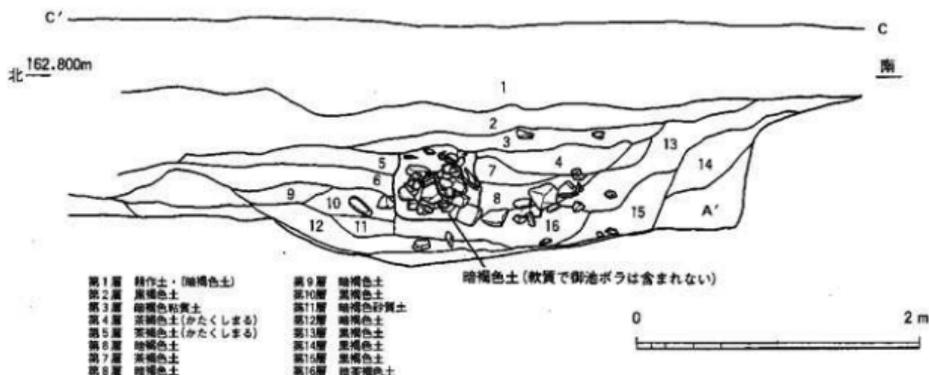
第28図 SE1土層断面図(1)



第30图 通路遗迹构实测图



第31図 石列遺構実測図及び土層断面図



第34図 暗渠状遺構土層断面図(第35図C-C'断面)

(1) 通路跡 (第30図)

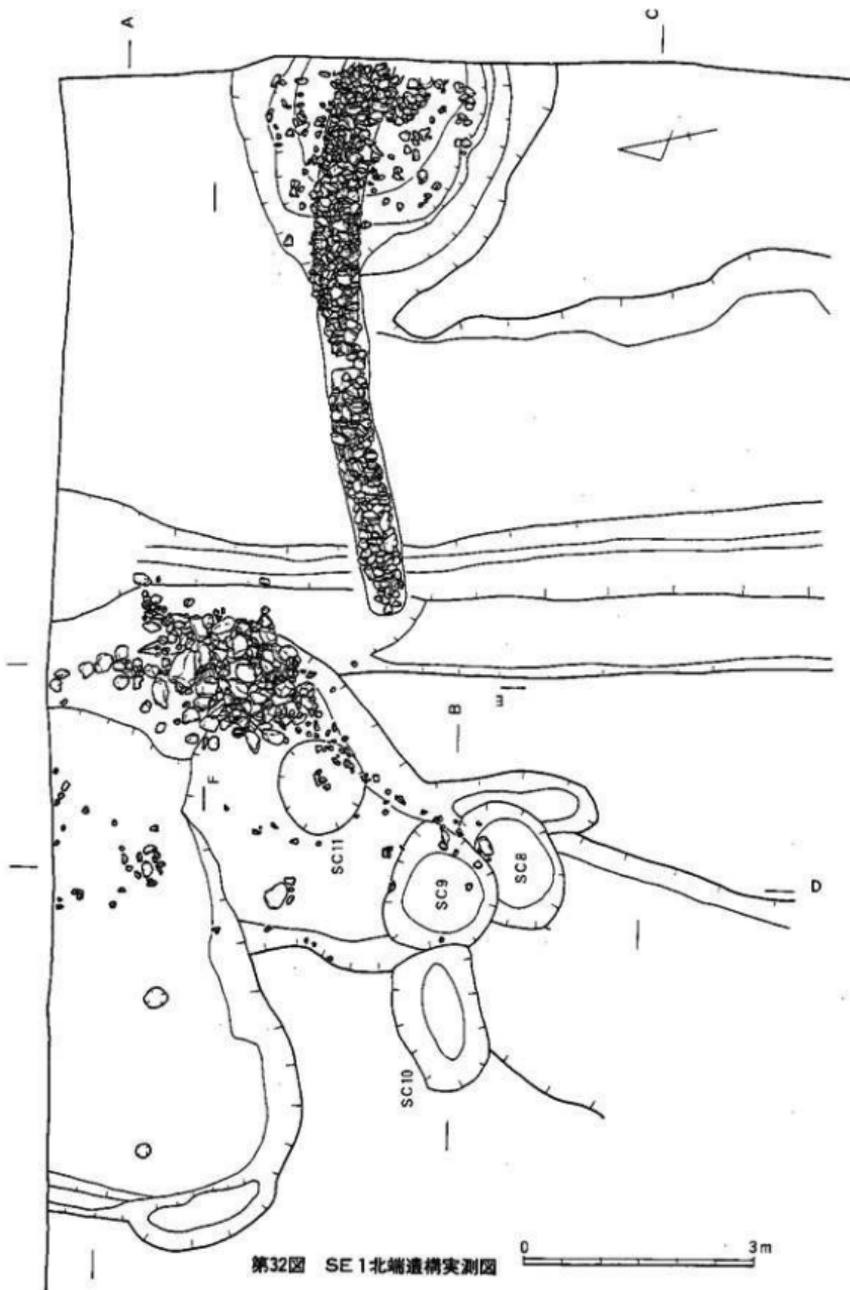
4B区で検出され、SE1から西へ約2.5mのびる。御池ボラ上面での検出時では、小礫が多くみられたが、床面には長さ30~40cmの扁平な河原石が横方向に一列に配置されている。床面は固くしまり、SE1から約25cm高くなり、東から西へ緩やかに上る。西端ではボラ上面との段差は約20cmを測り、SE1から屋敷地へ入る通路と考えられる。SE1-1の上面も固く締められている。遺物は、埋土中から渥美焼の壺頸部片(11)や近世の陶磁器の小片が出土している。

(2) 石列 (第31図)

3A区の東端に検出された。石列はSE1の東壁面に沿うように一段高く設けられ、底面は石積み用に溝状に掘り込まれている。検出面での長さ1.7m、高さ0.15mで、さらに上部に積まれていた可能性もあるが、石列は石塚のようにどちらかがきれいに面取りされているわけではなく、どちらかといえば投込まれたような状況である。遺物は、陶器や鉄滓、石白などが出土している。陶器碗は唐津焼(118)でSE1包含層出土のものと同接した。

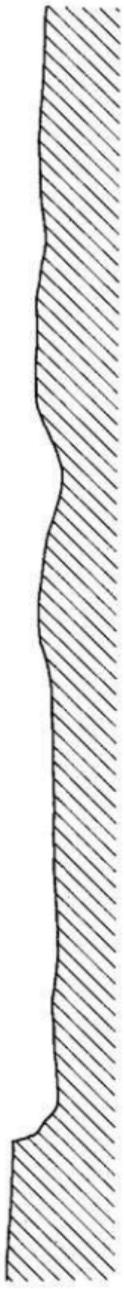
(3) 暗渠状遺構 (第34・35図)

2A・B区、SE1の床面に検出され、東西方向にやや弧を描きながら延びる。溝幅約60cm、長さ7m以上、SE1床面からの深さは約50cmである。断面は逆台形を呈し、途中からさらに約20cm深くなる。土層断面から東側の落込みより新しいと考えられる。溝内には10~30cmの河原石が全体に入り込み、石の間からは備前焼、青磁、白磁、砥石、鉄滓などが出土した。154は備前焼摺鉢の注ぎ口部である。156~158は青磁碗で、157は外面に蓮弁文が描かれる。159・160は白磁、162は染付、161は肥前磁器、162・163は陶器鉢で時期、産地については不明である。165~167は砥石である。164・166は頁岩製である。現存長は165が約6.5cm、166が約6.5cmを測る。167は極細粒砂岩に近い頁岩で上面が黒く変色し、硯として使用された可能性もある。現存長約15cm。

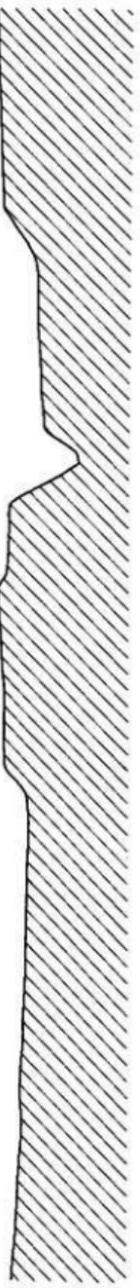


第32图 SE 1北端遺構実測図

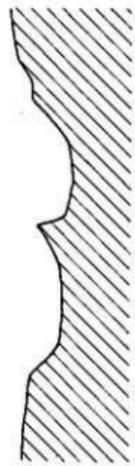
東
163.0m
A



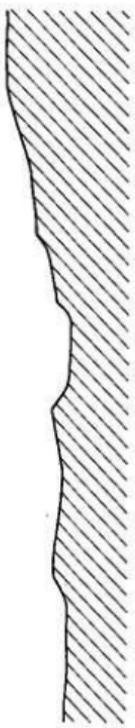
東
163.0m
C



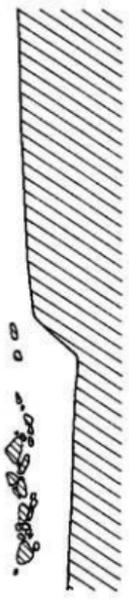
東
163.0m
B



東
163.0m
D



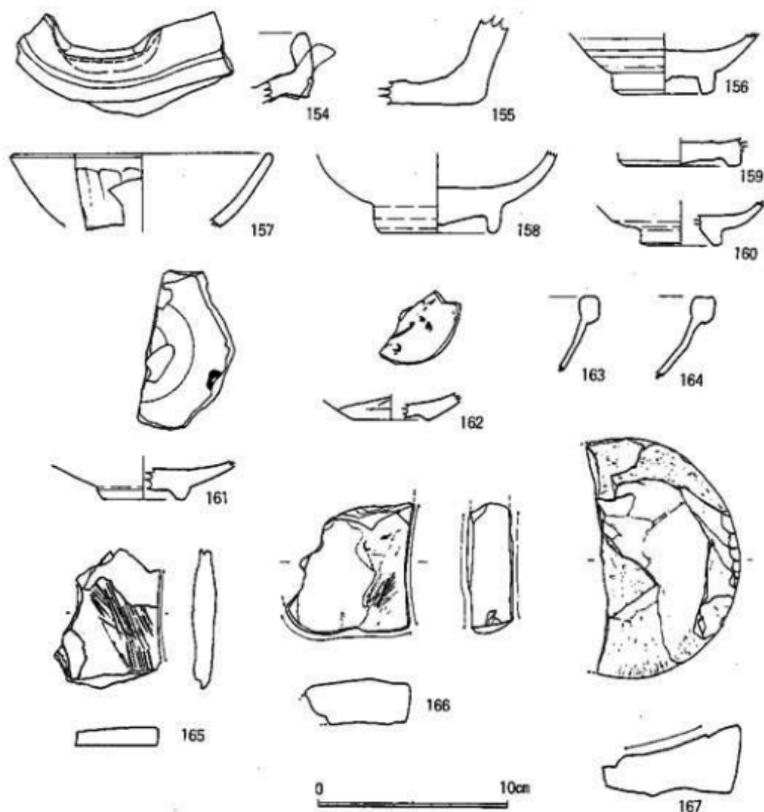
東
163.0m
E



東
163.0m
F



第33圖 SE 1北側構造断面圖

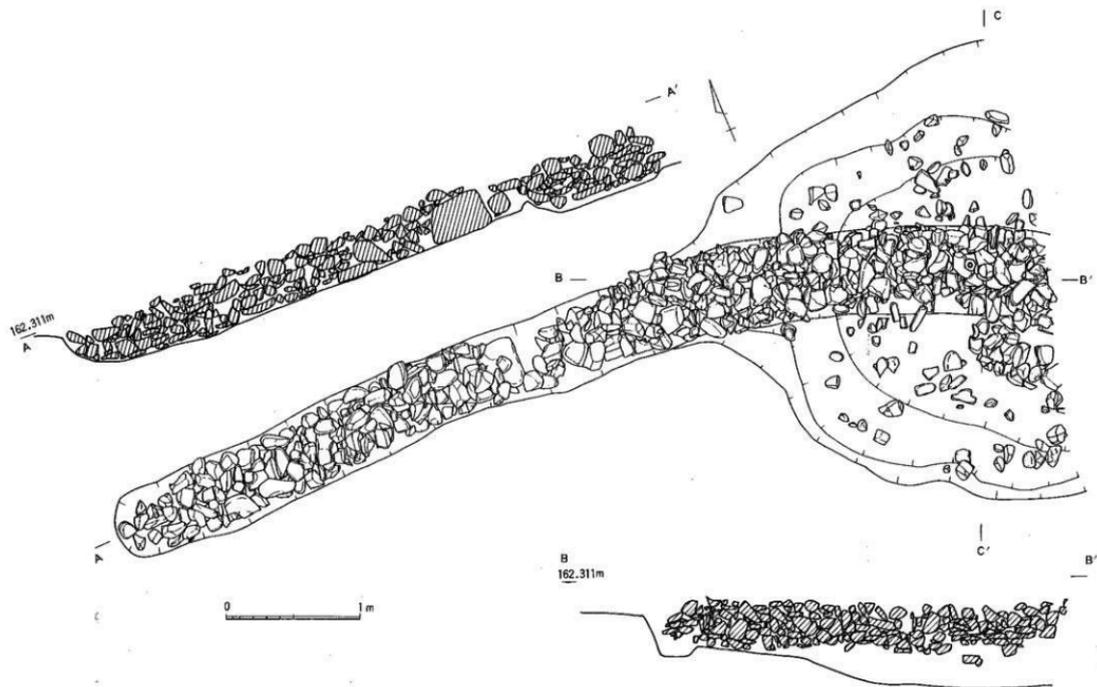


第36図 SE1暗渠状遺構出土遺物実測図

(4) 出土遺物 (第37図～第43図)

SE1から出土した遺物は、IV区から出土した遺物の大部分を占める。種類も豊富で土師質土器、国産陶器(瀬美焼、常滑焼、備前焼、唐津焼、薩摩焼)、輸入陶磁器(青磁、白磁、染付)、鉄製品(釘、鋏・鋤先)、銅銭(洪武通寶、寛永通寶)などがある。また、それ以外に鉄滓が多量に出土していることは注目される。

出土量では、輸入陶磁器類が最も多く、それに対し日常生活品である土師質土器は非常に少ない。遺物の出土地点では、2A・B区から最も多量に出土し、次いで3A・B区、5A・B区の順となる。遺物の接合関係は51(2B・4A)、57(6B・7B)、90(5B・8A)、131(7A・9A)など少なく、そのほかには82がSE6出土と接合した。以下主だった遺物について説明する。

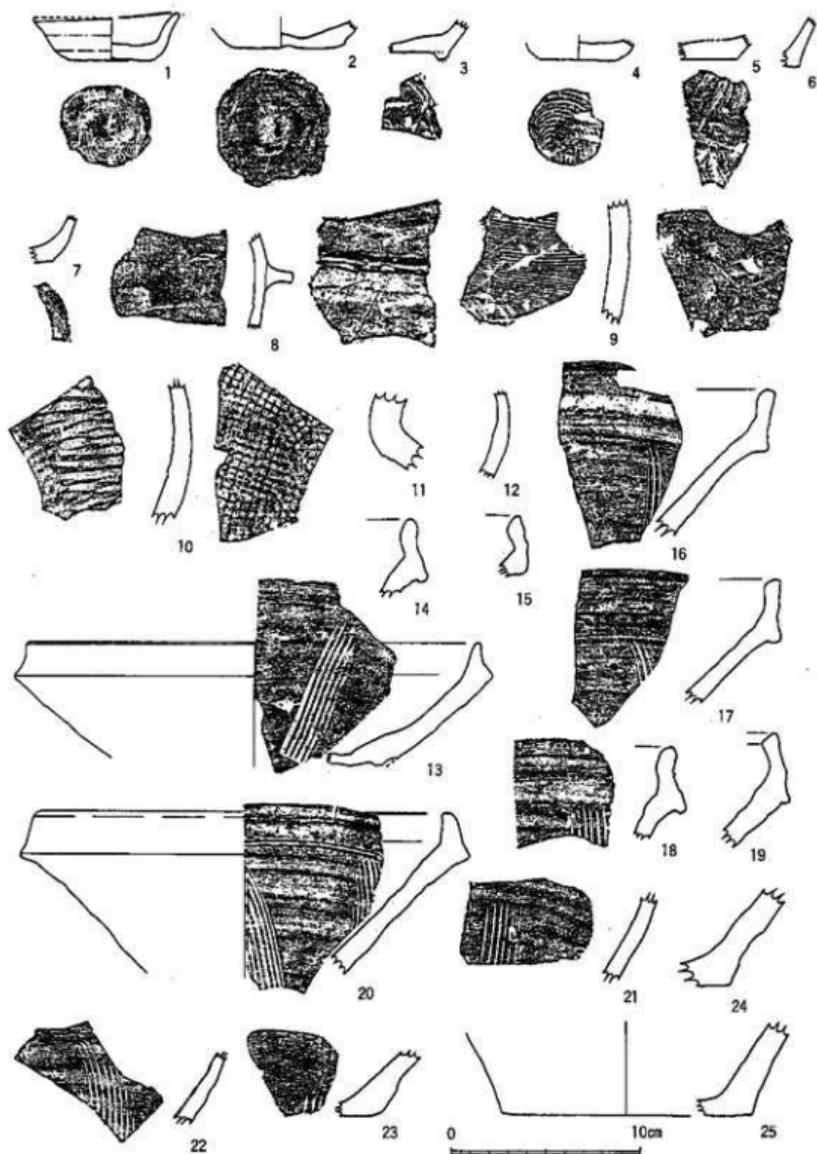


第35图 暗渠状渣槽实测图

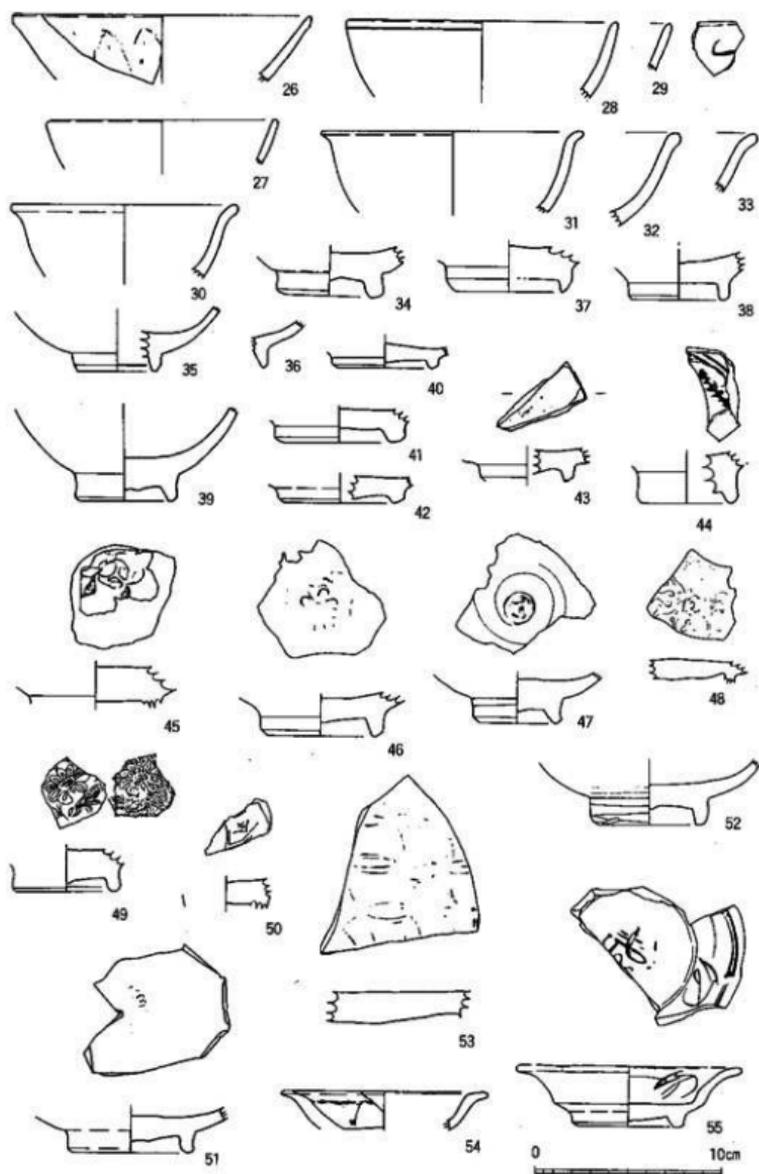
8は土鍋の鈎部分で、外面にはススが附着する。11は瀬美焼甕の頸部で通路跡埋土中から検出された。また12は常滑焼の油煮の破片で、内面には鉄分が附着している。同一個体と思われる破片がⅢ区からも出土している。備前焼は摺鉢が多数みられ、壺・壺類は胴部・底部片が十数点と非常に少ない。出土した遺物の中では輸入陶磁が最も多い。26-52は青磁碗である。26は外面に蓮弁文が、29は雷文帯が施される。30-33は端反り碗の口縁部である。34-52は碗の底部で、43-51は見込に印花文がみられ、47は「公」の、50には「金」の文字が読める。また、48の高台内は硯に転用されている。49は見込が露胎となり、スタンプ文が確認できる。53は盤で内面はヘラ彫りによる七宝繋ぎが施され、高台内は蛇ノ目に釉刺ぎされる。54-60は皿で、54は蓮弁文がみられる。55・56は稜花皿で55は見込に印花文がつけられる。60は萐荷底を呈する。61-87は白磁である。61-65は碗で、61は口縁部が内湾する。63と64は同一個体と考えられるが、63は1C区、64は5B区出土である。69-85は皿で、69・70は口縁部が外反する皿の底部である。80-83は切り高台の小皿で内面に重ね焼の日跡が残る。84は菊花皿、85は八角小坏である。86は壺か合子の蓋で、87は壺か合子の底部で型作りされている。88-110は染付である。88-94・110は碗で89・90・93は外面に蕉葉文が描かれる。94は内外面とも鉄釉で、体部下半は無釉で鉄泥が塗られ、高台内は透明釉で染付がみられる。110は見込が蛇ノ目に釉刺ぎされる。96-98は口縁部が端反りする皿で、97の見込には玉取獅子文が、98の高台内には「弘治年造」の銘がある。99-102はいわゆる萐荷底で蕉葉文や花文などが描かれている。111は瀬戸の天目茶碗で、そのほかにも数点胴部片が出土している。112は瀬戸・美濃系の皿である。115-117は肥前磁器で、115は内面に折松葉がみられる。118は唐津焼で外面は灰釉、内面は犬目釉がかかり体部下半は露胎となる。119は肥前系の陶器皿で、内面には目跡が残る。120-134は薩摩焼で、碗の見込は蛇ノ目に釉刺ぎされる。131は三足の鉢で、内面には貝目がみられ、床面から出土した。鉄製品では、鉄・鉄先や釘のほか鉄滓が埋土、床面、石列などから多量に検出された。143は錆による腐食が激しく形状ははっきりしないが鋤・鉄先と考えられ、現存幅10.1cm、長さ約2.1cmを測る。144-147は鉄釘で断面は方形を呈する。148は煙管の瓶首で羅字挿入部は欠損している。首部の脂返しがなく、側面が直線的である。149は煙管の吸口で端部が欠損している。139-141は砥石で、139は砂岩製で、下部を切断して使用したと考えられる。表面が凹面をなし、かなり使い込んでいる。現存長約10cm。140は頁岩製で現存長約7.5cm。141は頁岩製で表面は欠損している。現存長約2cm。142は石臼の上白片で3/4程度欠損している。高さ13.3cm、上面の周縁は幅約2cmで回り、芯穴の径は約3cmを測る。すり合わせ面の分画は細かい。そのほか寛永通寶2枚や土人形も出土した。

S E 2

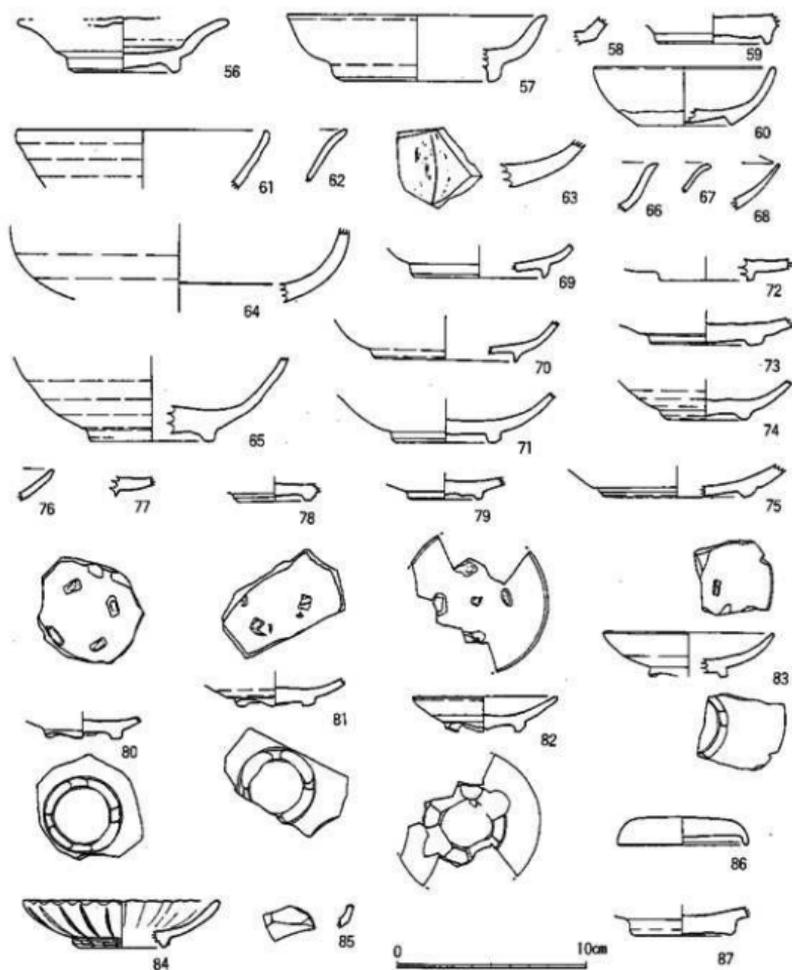
10A・B区、S E 1が北に曲る部分で、東盤十層断面によって確認した(第29図)。東西に延びる溝と考えられるが、大部分はS E 1によって切られている。溝は二段に掘られていたと考えられ、底面はU字状を呈し、埋土は黒褐色土である。遺物は青磁皿片(58)や洪武通寶3枚のほ



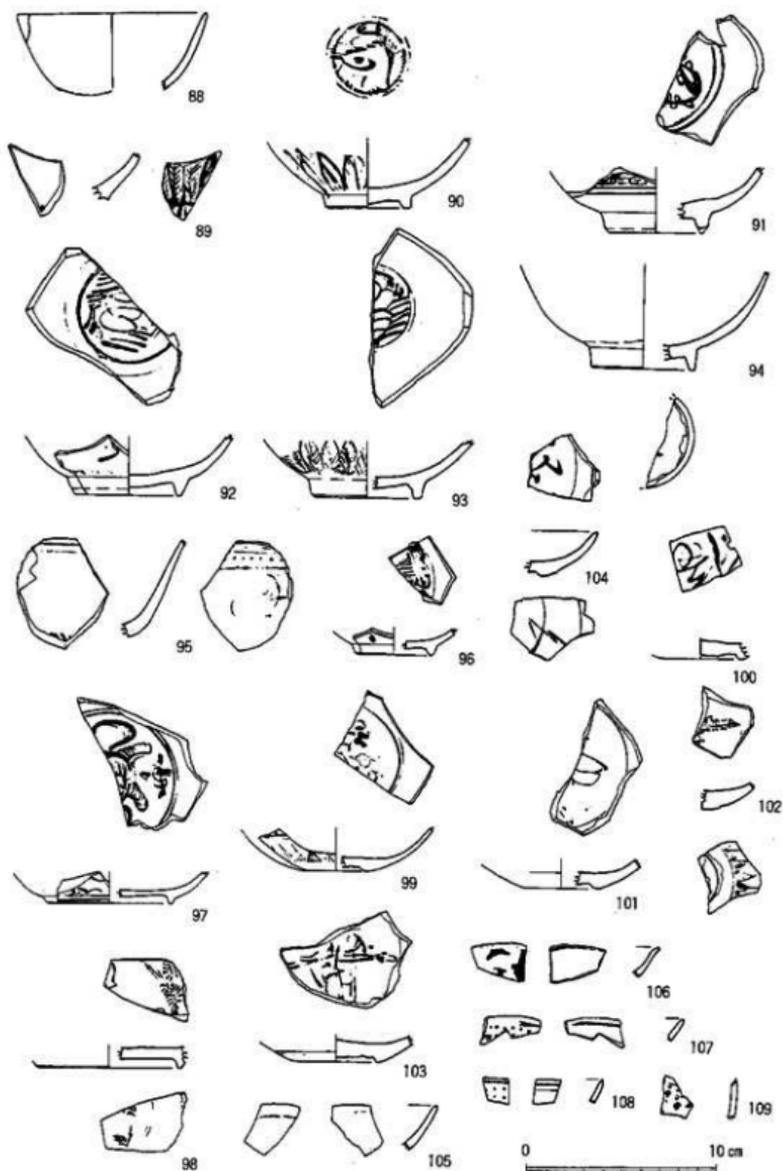
第37圖 SE 1 出土遺物実測圖(1)



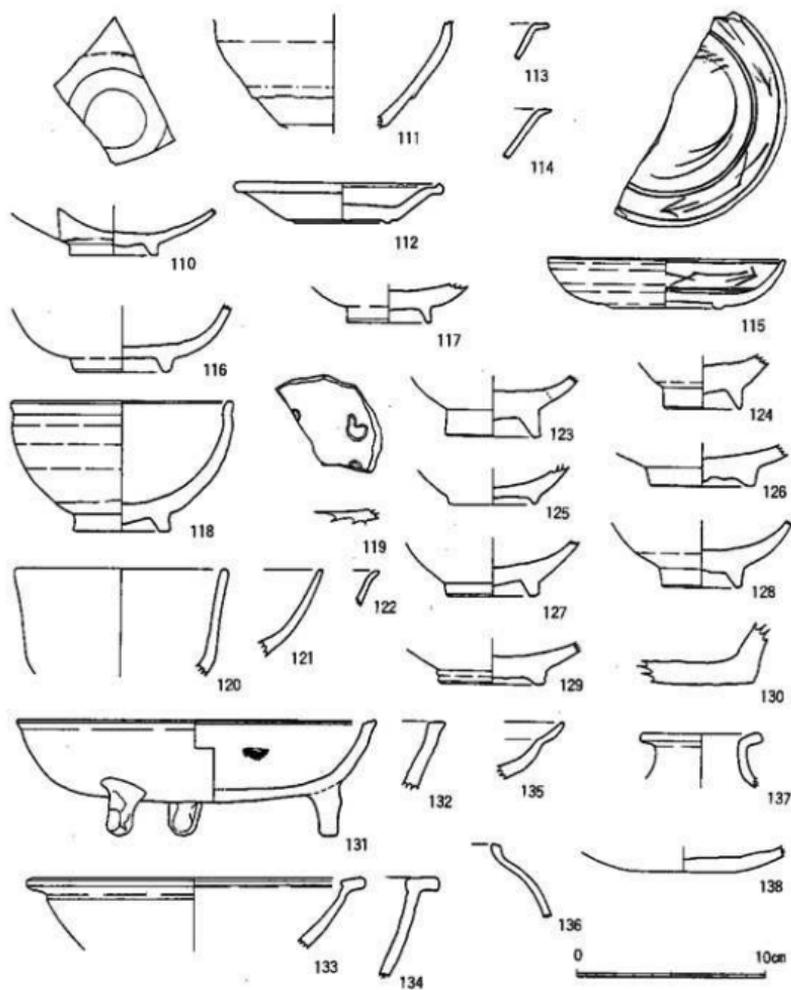
第38图 SE1出土遗物实测图(2)



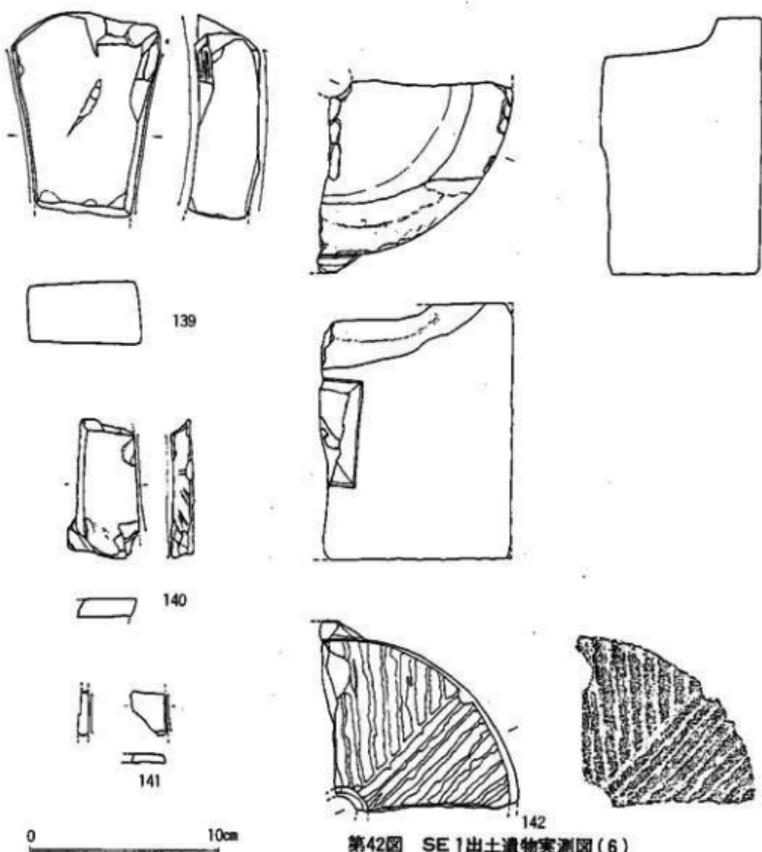
第39图 SE 1出土物实测图(3)



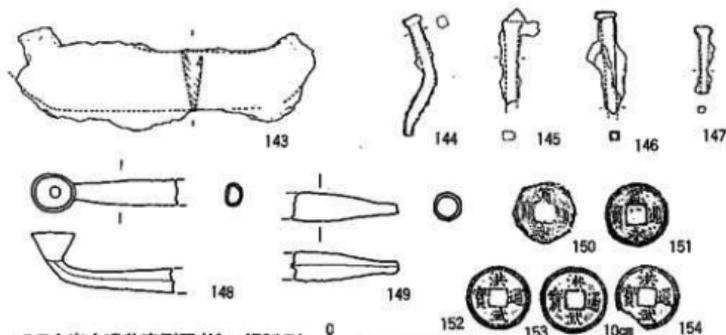
第40图 SE 1 出土遺物実測図(4)



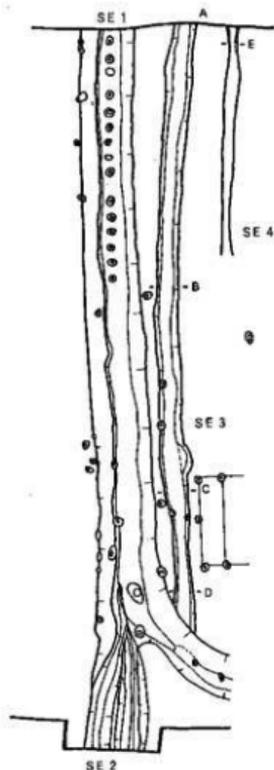
第41图 SE1出土遗物实测图(5)



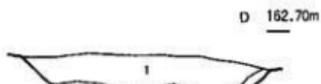
第42図 SE1出土遺物実測図(6)



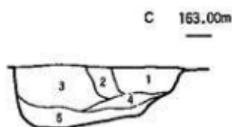
第43図 SE1出土遺物実測図(鉄・銅製品)



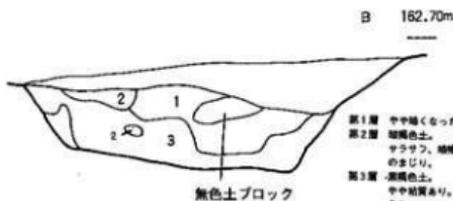
E 162.70m
 第1層 暗褐色土 やや粘質あり、砂粒はほとんど含まれず、ボラも微量。
 第2層 暗褐色土 層の細かいボラを含む。



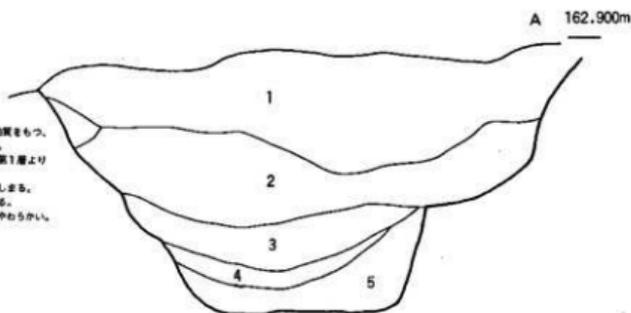
D 162.70m
 第1層 暗褐色土 やや粘質あり、砂粒はほとんど含まれず、ボラも微量。
 第2層 第1層とボラのまじり。



C 163.00m
 第1層 暗褐色土 粘質あり、砂粒、ボラ粒を少し含む。
 第2層 暗褐色土 第1層より、砂粒を多く含み、やわらかい。
 第3層 暗褐色土 第2層と類似、第2層より大粒の砂やボラを含む。
 第4層 暗褐色土とボラのまじり。
 第5層 暗褐色土 ボラと砂粒が多くなる。



B 162.70m
 第1層 やや縮くなったボラ、暗褐色土。
 第2層 暗褐色土とボラのまじり。
 第3層 暗褐色土、やや粘質あり、少量ボラを含む。



第1層 暗褐色土 ボラ粒を多量に含み、粘質をもつ。層としてはやわらかい。
 第2層 暗褐色土 第1層に類似するが、第1層よりめくしくしめる。
 第3層 暗褐色土 粘質、ボラ粒を含む。しめる。
 第4層 暗褐色土 やや粘質をもち、しめる。
 第5層 暗褐色土 ボラ粒を多量に含み、やわらかい。

第44図 SE 3, 4 土層断面図



か炭化物も少量出土している。

SE 3 (第44図)

調査区の市、10区に位置し、溝はN-70°-W方向に走るが若干緩やかな弧を描き、東端はSE 1で切られている。西端壁面で断面を観察すると、壁の立ち上がりが市では同じ傾斜であるのに対し、北では深さ0.4mあたりで二段掘りされている。溝は表土下で幅約1.45m、深さ約0.7mを測るが、東端では底面が次第にあがり、御池ボラ上面において、幅0.6m、深さ0.12mと非常に浅くなる。東西の底面のレベル差は約40cmある。埋土は御池ボラを多量に含んだ黒褐色土層である。出土遺物はみられない。

SE 4 (第44図)

SE 3のすぐ北側に平行して、東西に約10mほどをかるうじて確認した。幅は約0.5m、断面形は浅い皿状をなし、御池ボラが混じる暗褐色土を埋土とする。遺物は出土しなかった。

SE 5 (第45図)

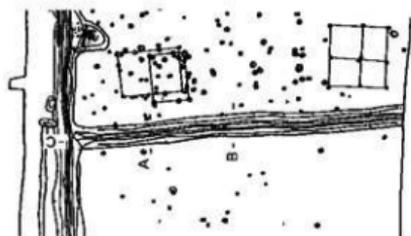
発掘区を南北に分かつかのように、N-79°-W方向に走り、東端はSE 1に切られている。埋土中には白ボラが確認され、その上層は暗褐色土、下層には黒褐色土が堆積している。幅約1.7m、深さ約0.5m、断面は逆台形で、底面は硬化面をなす。硬化面での溝底の東西レベル差はほとんどない。硬化面を取除くと底面中央に幅約0.5mの溝が検出され、深さも東にいくほど深くなり、硬化面も厚みを増している。

出土遺物は少なく、青磁の2点のみであった。168は型作りされた瓶で、口縁部が輪花を呈し、頸部には蕉葉文がみられる。第1層(白ボラの上層)から出土した。169は碗底部で、外面にはヘラ描きによる蓮弁文が施される。

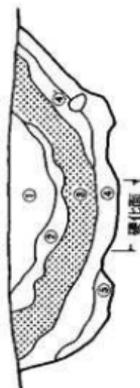
SE 6 (第46図)

調査区の北側、2・3区の境をN-80°-W方向にほぼ直線に延びる。幅約2.5m、深さ約0.5mで、断面形は丸みをおびた逆台形を呈し、底面中央が幅0.45m、深さ0.15cmで二段掘りになる。そして、その両脇の底面が御池ボラ混じりの暗褐色土で硬化面を形成している。溝の埋土は1層が白ボラの混じる褐色土、2層が白ボラ(文明の火山灰)、3~7層が御池ボラが入った暗褐色土で、上層では小礫が多くみられた。溝の東端はSE 1で切られ、3C区でも後世の掘り込みによって一部壊されている。

遺跡は、白ボラの上下から青磁、白磁、陶器、鉄滓、砥石などが出土しているが、時期差は認められない(第47図)。170~175は青磁碗で、171・172は罐反り口縁をなし、外面には蓮弁が施されている。176・177は白磁で、切り高台の皿の口縁部である。193・195は砥石である。193は表裏、両側面に使用痕がみられる。現存長11cm、幅約11cm、厚さ4cmを測る。195は全面をかなり使い込んであり、石の粒子も細かいことから仕上げ砥と考えられる。また、右側面には線状の研ぎ痕がみられる。現存長8.4cm、最大幅5cm、厚さ約1.2cmである。194は茶臼片と考えられ、上

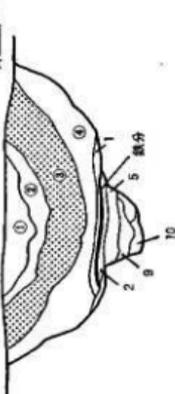


B 162.80m



- 第10層 腐植土
- 第9層 暗褐色土(白ボク多量含む)
- 第8層 白ボク
- 第7層 腐植土
- 第6層 腐植土
- 第5層 腐植土(硬質)

A 162.80m

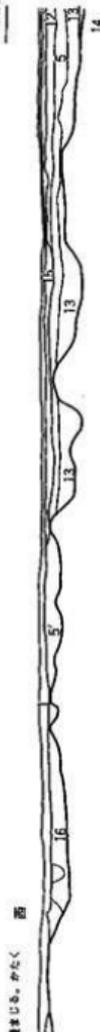


- 第1層 腐植土
かたくしめる。ボク粉。白
い腐葉をむ。
- 第2層 腐植土
- 第3層 腐植土
- 第4層 腐植土
- 第5層 腐植土
- 第6層 腐植土
- 第7層 腐植土を厚したボクまじり
の層。かたくしまっている。
- 第8層 腐植土と砂のまじり
- 第9層 腐植土
- 第10層 砂と腐植土のまじり
- 第11層 腐植土
- 第12層 腐植土
- 第13層 腐植土
- 第14層 腐植土
- 第15層 腐植土
- 第16層 腐植土

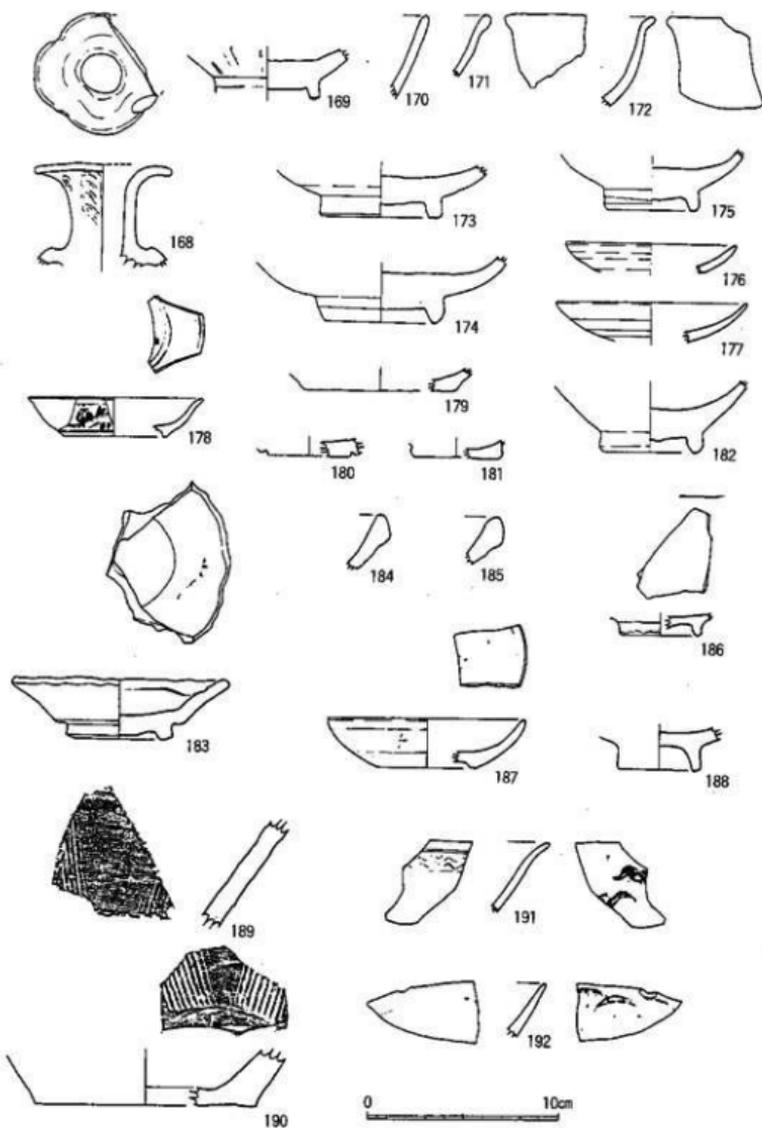
鉄道ボラブロック



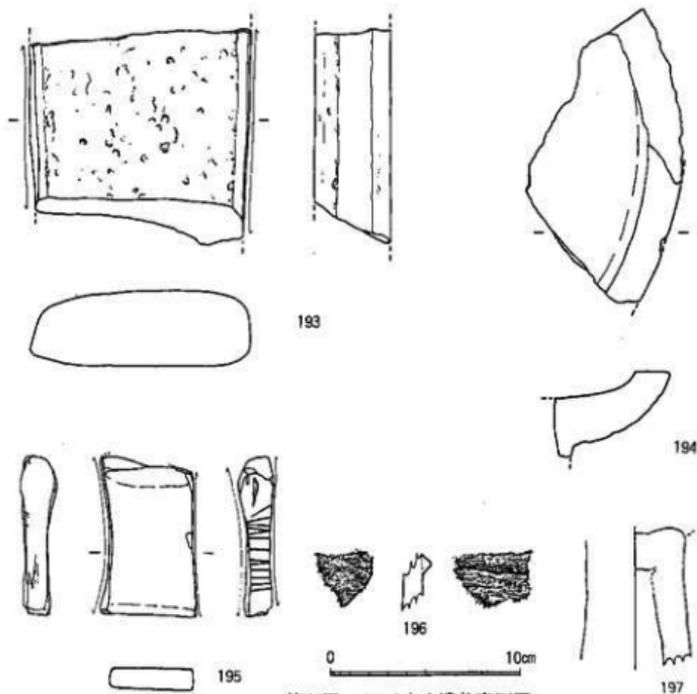
162.47m



第45図 SE5土層断面図



第47図 SE 5・6、SC 4・8・9及び包含層出土遺物実測図



第48図 SE 6出土遺物実測図

面の周縁は幅1.8cmで通る。そのほかに、弥生土器の甕(196)や高坏脚部(197)も出土している。

SE 9 (第46図)

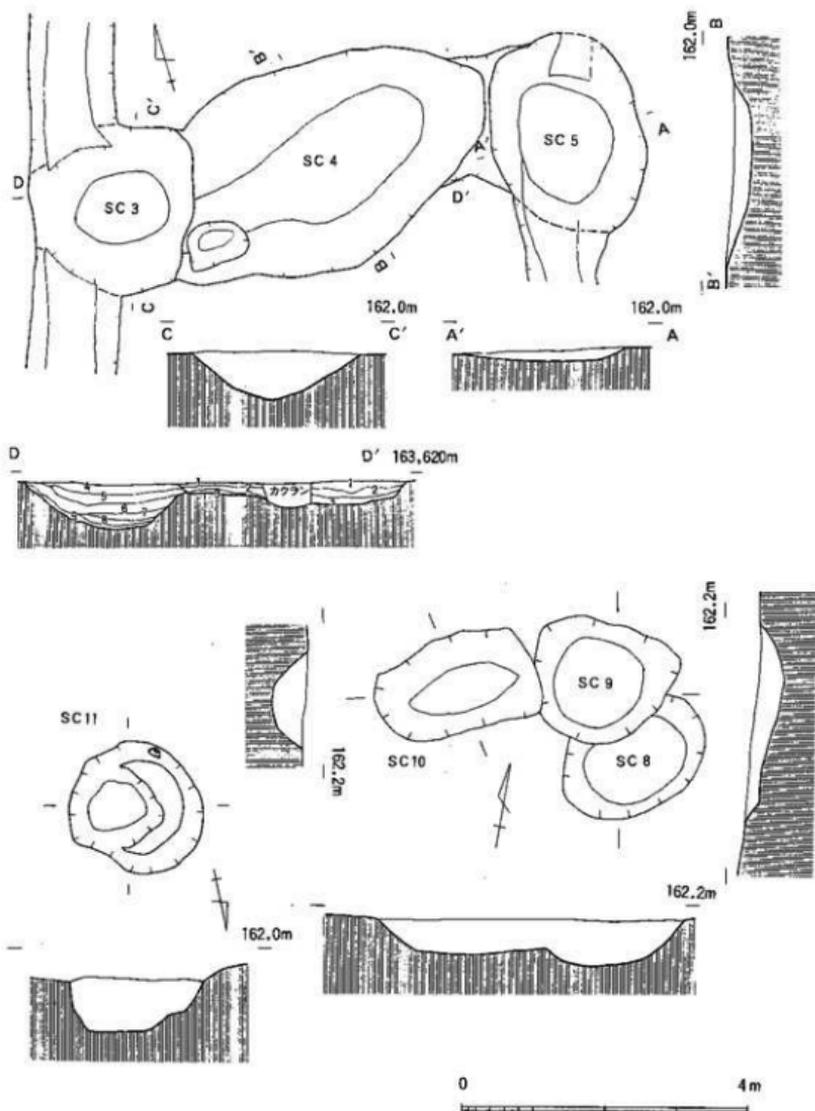
調査区の北西隅、2E区で検出された。南北に走る溝で、SE 6に切られている付近で東へ向きを変えようとしているが、溝の続きが見られないことからSE 6に繋がっていた可能性がある。溝の幅は1.2m、深さ0.2m、埋土は、1層が黒色土、2層が御池ボラが混じる黒色土である。遺物は出土していない。

SE 10 (第46図)

2C・D区を東西方向に延び、D 2区ではほぼ90°の角度で北に向きをかえる。Ⅲ区のSE 28とつながる可能性がある。幅約1m、深さ0.25mで、埋土は暗褐色粘質土である。途中、SE 11とSC 3に切られている。遺物などは出土していない。

SE 11 (第46図)

2C区でわずかに確認された。南北に走る溝で、幅約0.7m、深さ約0.1mと浅い。埋土は黒褐色土で、断面はレンズ状を呈す。SE 10を切っている。出土遺物は無い。



第49図 土塚実測図

土坑 (第49図)

Ⅳ区では、調査区の北側を主に7基検出したが、円形、不定形など様々で出土遺物も少なく、時期・用途については不明である。切り合っているものなどはまとめて記述する。

SC3・4・5

調査区の北西隅、2D・E区で検出された。SC4がSC3より新しいがSC4とSC5との前後関係は、はっきりしない。

SC4は不定形を呈し、長軸約5m、短軸約3m、深さ約3mである。埋土は暗褐色土で、御池ボラや砂粒を含む。遺物は外面に唐草文のある染付皿(178)や磁器の小片が出土した。

SC3は径約2.2mの不整形で、SE9を切っている。深さ60cmを測り、軟質の黒褐色土を埋土とする。出土遺物はみられない。

SC5は長軸2.9m、短軸2.1mの楕円形をなし、SE10より新しい。深さ約15cm、断面は浅皿状を呈す。薩摩焼と考えられる陶器片が1点出土している。

SC6・7

調査区のD区壁面で検出された。SC6がSC7より新しい。SC6は深さ約60cm、SC7は深さ約40cmを測る。遺物は出土していない。

SC8・9・10

2B・C区、SE1の西に3基重なり合って検出されたが、それぞれの前後関係は不明である。SC8は径1.7m、深さ0.27m、SC9は径約1.5m、深さ約0.5m、SC10は長径1.9m、短径1.1m、深さ約0.4mである。出土遺物には、土師質土器、青磁、染付などがある。179~181は土師質の皿で糸切り底である。182は青磁碗で外面には蓮弁文が描かれている可能性がある。そのほかに鉄滓が11点出土している。

SC11

SE1石積のすぐ西側に検出され、これらに付随する遺構の可能性もある。長軸約0.9mの不整形で、底面は二段掘りされ、深さ約0.4mを測る。遺物としては183の青磁桜花皿が出土した。

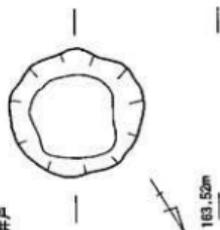
井戸 (第50・51図)

Ⅳ区では3基検出され、調査区内に点在している。掘方平面形は円形を呈するが、表土剥ぎの段階でも井戸枠などは確認されず、素掘りの井戸と考えられる。

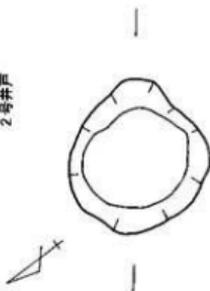
1号井戸

4B区に検出され、当初SC2としていたものである。検出面では長径約2m、短径約1.5mの不整形円形を呈していたが、約1mの深さから径0.9mの円形の掘方に変化した。検出面からの深さは2.55mで第Ⅲ層の粘質土層まで掘り込まれ、調査時には粘質土層を少し掘り込んだところで水が湧き出した。1は容器の蓋板か底板と考えられるもので、針葉樹(カヤ)を柱目板材として利用している。側面には釘跡が六箇所確認できる。左縁辺は面取りされている。残存部径は

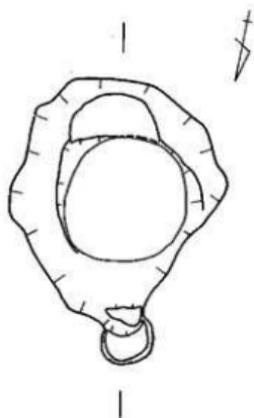
3号井尸



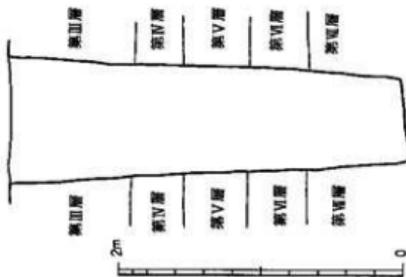
2号井尸



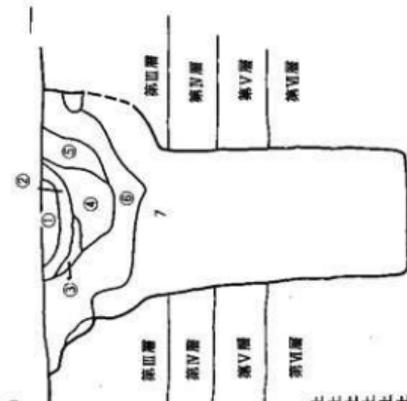
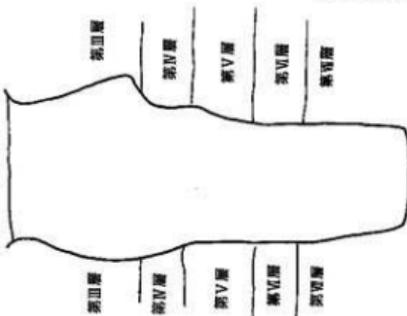
1号井尸



163.144m

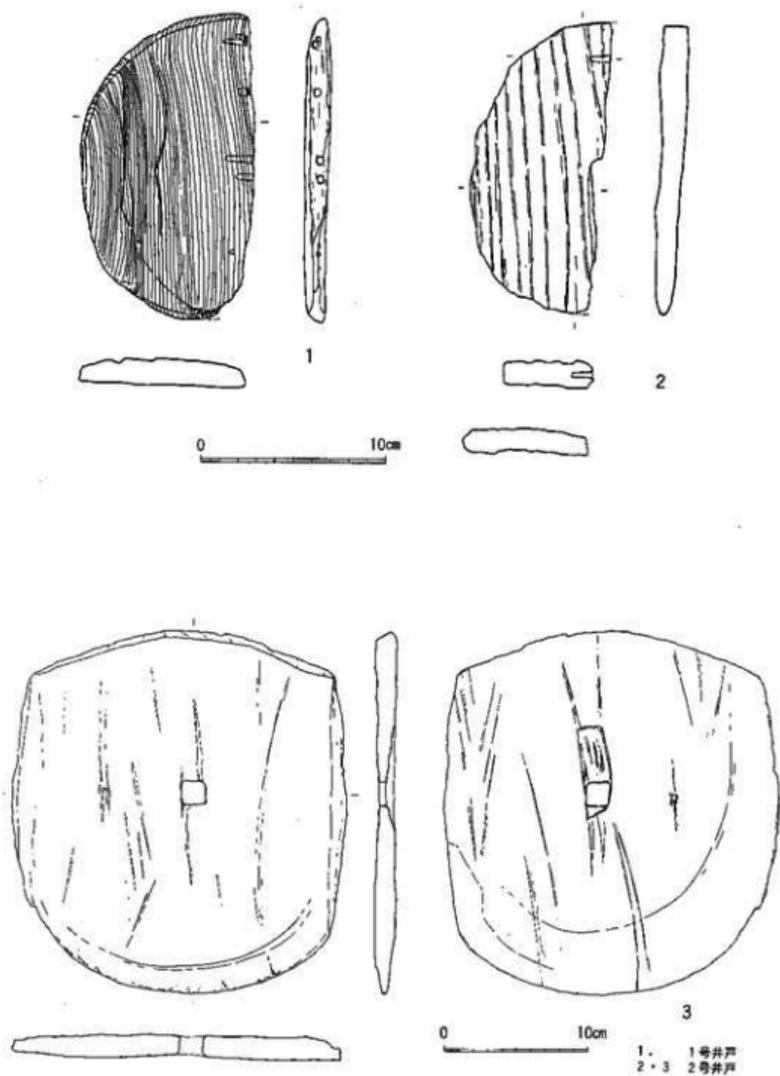


163.772m



1. 暗褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土

第50图 井尸遺構実測



第51図 井戸出土遺物実測図

16.2cm、厚さ1.4cmを測る。

2号井戸

5 D区に検出した。径約1mの円形を呈し、途中御池ボラの崩壊によって一部挟れている。検出面からの深さは約2.8mで、2.2m付近から湧水があった。また、底面あたりから木製品や木片が数点出土した。2は容器の蓋板か底板と考えられるもので、側面には釘跡がみられる。針葉樹(モミ)を板目材材として使用している。残存部径は15.5cm、厚さ1.2cmを測る。3は用途不明の木製品で、長軸25.4cm、短軸23.2cm、厚さ1.3cm、中央に一辺1.5cmの方形の孔が設けられている。また、上面と側面には刃物での調整痕がみられる。先端部は先細りとなり、特に裏面には鉄先・鎌先などを装着した痕跡があり、円形の底板か蓋板を農具として再利用した可能性があり、中央の孔には当初つまみがついていたかもしれない。広葉樹(クスノキ)を板目材として使用している。

3号井戸

8 B区に検出し、当初SC1としていたものである。平面形は径約9.4mの円形を呈し、深さ2.75m、調査時では最深部から約20cm上位で湧水があった。遺物は検出されなかった。

包含層出土の遺物 (第48図)

表土および第Ⅱ層からも数点遺物が出土している。184・185は東播系摺鉢の口縁部、189・190は備前焼摺鉢である。186・187は中国産の染付で191・192は肥前系の磁器碗と皿である。

遺物番号	種類	器種	出土地点	法 量 (cm)			形態・文様の特徴	色 調		備 考
				口径	変径	器高		外	内	
1	土師質	皿	S E 3 (3 H)	7.6	4.4	2.5	口縁に一落ス付着 底部 糸切り	淡黄	淡黄	
2	土師質	皿	S R 1 (8 B)	—	5.8	—	底部、へら切り	橙	橙	
3	土師質	皿	S E 1 (8 B)	—	—	—	高台付き碗?	灰黄褐	灰黄	
4	土師質	皿	S E 1 (8 H)	—	4.2	—	底部、糸切り	浅黄橙	浅黄橙	
5	土師質	皿	S E 1 (10 C)	—	—	—	底部、糸切り 一部板目あり	橙	黄橙	
6	土師質	皿	(7 A)	—	—	—	底部、糸切り	浅黄橙	浅黄橙	
7	土師質	皿	S E 1 (6 H)	—	—	—	体部、内湾きみにのびる	にぶい橙	にぶい橙	
8	土師質	土 須	S R 1 (2 B)	—	—	—	黄緑、外面にスチッチ 外面、横ナデ 内面、竹おろしの様ナデ	灰黄褐	灰黄褐	
9	須恵質	壺	S E 1 (3 B)	—	—	—	外面、ナデ 内面、ハタ目状のナデ	灰白	灰白	
10	須恵質	壺	S E 1 (1 C)	—	—	—	外面、格子目ナデ 内面、平行ナデ	灰	黄灰	
11	陶 器	壺	SC 1	—	—	—	口縁部、内外面とも横ナデ 内外面に横く、埋込裏の輪 有線、ナデ 内面、横ナデ 外面に一部自然釉、内面に横ナデ	にぶい黄 緑灰黄	暗赤黄	赤黄焼
12	陶 器	浴 壺	S E 1 (10 B)	—	—	—	口縁部は上方に横くのびる 内外面、横ナデ 6色を1線とする	黄赤	黄赤	備前焼
13	陶 器	すり鉢	S E 1 (2 B)	—	—	—	口縁部、上方に長く拡張 横ナデ	赤	赤	備前焼
14	陶 器	すり鉢	S E 1 (2 B)	—	—	—	口縁部、上方に長く拡張 横ナデ	灰赤	灰赤	備前焼
15	陶 器	すり鉢	S E 1 (2 B)	—	—	—	口縁部、上方に長く拡張 横ナデ	灰赤	灰赤	備前焼
16	陶 器	すり鉢	S R 1 (10 B)	—	—	—	口縁部、上方に長く拡張 内外面に自然釉	赤黄 灰黄	にぶい赤褐	備前焼 17と同・群体
17	陶 器	すり鉢	S E 1 (10 B)	—	—	—	口縁部、上方に長く拡張 内外面に自然釉	にぶい赤褐	にぶい赤褐	備前焼
18	陶 器	すり鉢	S E 1 (3 B)	—	—	—	口縁部、上方に長く拡張 口縁部外部に自然釉	赤	赤	備前焼
19	陶 器	すり鉢	S E 1 (1 B)	—	—	—	口縁部、上方に長く拡張 横ナデ、半焼け	明赤褐	黄	備前焼
20	陶 器	すり鉢	S E 1 (1 B)	—	—	—	横ナデ	灰褐 橙	にぶい赤褐	備前焼

遺物番号	種別	器種	出土地点	法量 (cm)			形状・文様の特徴	色		備考
				口径	高さ	器高		外	内	
21	陶器	ナリ鉢	SE1 (2A)	—	—	—	横ナデ、内面使用痕	赤褐色	にぶい赤褐色	備前焼
22	陶器	ナリ鉢	SE1 (2B)	—	—	—	横ナデ	灰赤	灰褐色	備前焼
23	陶器	ナリ鉢	SE1 (2B)	—	(9.6)	—	横ナデ はげしい使用痕	赤 赤褐色	赤	備前焼
24	陶器	甕	SE1 (5A)	—	—	—	横ナデ	にぶい赤褐色	灰褐色	備前焼
25	陶器	甕	SE1 (10B)	—	(13.2)	—	横ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色 薄灰	備前焼
26	青磁	碗	SE1 (10B)	(15.8)	—	—	外面縁蓮弁文	オリーブ灰	オリーブ灰	
27	青磁	碗	SE1	(11.7)	—	—	口縁部内湾気味	灰オリーブ	灰オリーブ	
28	青磁	碗	SE1 (2A)	(14.4)	—	—	外面口縁下に1条の圓線	オリーブ黄	オリーブ黄	
29	青磁	碗	SE1 (2B)	—	—	—	外面に雲文書	オリーブ灰	オリーブ灰	
30	青磁	碗	SE1 (3B)	(12.0)	—	—	口縁部端反り やや厚手貫入あり	灰オリーブ	灰オリーブ	
31	青磁	碗	SE1	(13.6)	—	—	口縁部端反り	灰オリーブ	灰オリーブ	
32	青磁	碗	SE1 (2A, 2B)	—	—	—	口縁部端反り	緑	緑	
33	青磁	碗	SE1 (5A)	—	—	—	口縁部端反り	オリーブ灰	オリーブ灰	
34	青磁	碗	SE1 (2B)	—	5.7	—	厚手高台内露胎	灰オリーブ 灰白	黄緑	
35	青磁	碗	SE1 (1B)	—	4.2	—	見込み露胎、赤付け	青緑	青緑	
36	青磁	碗	SE1 (2B)	—	—	—	高台内露胎、胎土は灰褐色	灰 黒褐色	灰	
37	青磁	碗	SE1 (9A)	—	(5.7)	—	厚手、高台内紀目輪割ぎ	オリーブ灰	オリーブ灰	
38	青磁	碗	SE1 (3B)	—	(5.4)	—	見込み及び高台内露胎 貫入あり、器の可塑性	緑灰	緑灰	
39	青磁	碗	SE1 (2A, 1C)	—	5	—	横線、高台内露胎	浅黄褐色	浅黄褐色	
40	青磁	皿	SE1 (1B)	—	5.6	—	高台内に一部輪割ぎ 見込み盛り上がる	明緑灰	明緑灰	
41	青磁	碗	SE1 (3B)	—	(7.0)	—	低高台 高台内はていねいな輪割ぎ	オリーブ灰	オリーブ灰	
42	青磁	碗?	SE1 (6B)	—	(5.7)	—	高台内、胎土輪割ぎ 貫入あり、器の可塑性	水色	水色	
43	青磁	碗	SE1	—	—	—	見込みに印花文 高台内露胎	明緑灰	明緑灰	粗製
44	青磁	碗	SE1 (2B)	—	(4.9)	—	底部厚手 見込みに印花文	緑	緑	
45	青磁	碗	SE1 (8B)	—	—	—	底部厚手、高台内紀目輪割ぎ 見込みに印花文	暗オリーブ	緑灰	
46	青磁	碗	SE1 (6B)	—	6.5	—	高台内露胎 見込みに印花文	灰白	オリーブ灰	粗製
47	青磁	碗	SE1 (3B)	—	4.8	—	高台内露胎 見込みに「金」の印判	灰白	灰白	
48	青磁	碗	SE1 (3B)	—	—	—	見込みに印花文 高台内露胎に転写	明緑灰	明緑灰	
49	青磁	碗	SE1 (2B)	—	(5.3)	—	見込み及び高台内露胎 見込みに印花文	明緑灰	にぶい橙	
50	青磁	碗	SE1 (2B)	—	—	—	見込みに「金」の印判 高台内露胎、貫入あり	灰白	灰白	
51	青磁	碗	SE1 (4A, 2B)	—	(6.1)	—	高台内露胎、一部輪割ぎ 見込みに印花文	灰白	灰白	
52	青磁	碗	SE1 (2B, 2A)	—	5.4	—	見込みに圓線 高台内露胎	明緑灰	明緑灰	
53	青磁	盤	SE1 (2A)	—	—	—	底部輪割ぎ 内面へう彫りの七宝文、貫入あり	緑	緑	
54	青磁	皿	SE1	(10.7)	—	—	口縁部端反り 外面蓮弁文	オリーブ灰	オリーブ灰	
55	青磁	皿	SE1 (5B)	12.1	5.6	3.3	桜花皿、高台内露胎 一部輪割ぎ	緑	緑	
56	青磁	皿	SE1 (4B)	(11.1)	5.9	2.8	桜花皿、高台内露胎	灰オリーブ	灰オリーブ	焼成不良
57	青磁	皿	SE1 (1B, 2A)	(13.4)	(8.0)	3.5	口縁部端反り	オリーブ灰	オリーブ灰	上質
58	青磁	皿	SE2	—	—	—	貫入あり	オリーブ灰	オリーブ灰	
59	青磁	皿?	SE1 (2A)	—	(6.1)	—	見込み及び高台内露胎 低高台	オリーブ灰	オリーブ灰	

器物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm)			形製・文様の特徴	色調		備考
				口径	底径	器高		外	内	
60	青磁	皿	S E 2 (2 B)	(9.3)	(5.0)	3.1	底部磨蝕、体部下半露胎 全体に貫入	オリーブ灰	オリーブ灰	
61	白磁	碗	S E 1 (2 C)	(13)	—	—	口縁隆部内湾	明緑灰	明緑灰	
62	白磁	皿	S E 1 (3 B)	—	—	—	口ハゲ、口縁部外反	明オリーブ灰	明オリーブ灰	碗の可能性
63	白磁	碗	S E 1 (1 C)	—	—	—	体部下半露胎 体部は内湾気味にのびる	灰白	灰白	64と同一個体
64	白磁	碗	S F 1 (3 B)	—	—	—	体部には、整形時の凹凸が残る 内湾一途の露胎	灰白	灰白	
65	白磁	碗	SE1, SC9 (2 B)	—	(6.4)	—	低高台、体部に内湾気味に立ち 上がる高台露胎	明緑灰	明緑灰	
66	白磁	皿	S E 1 (1 B)	—	—	—	口縁部外反 全体に貫入	明緑灰	明緑灰	中国製?
67	白磁	皿	S K 1 (3 A)	—	—	—	増反り、薄手	灰白	灰白	
68	白磁	皿	S K 1 (1 B)	—	—	—	体部は外方にのびる 体部下半露胎	灰白	灰白	複製
69	白磁	皿	S E 1	—	(7.2)	—	骨付露胎 高台は薄い三角形を呈し内湾する	白 黄	白	
70	白磁	皿	S K 1 (5 B)	—	(7.5)	—	量り露胎 高台は薄い二角形を呈し内湾する	白	白	増反りの皿
71	白磁	皿	S E 1 (3 B)	—	(5.8)	—	体部外方にのびる、見込み肥背露胎 体部下半及び高台は露胎	白	白	複製
72	白磁	皿	SE1, SF7 (3 B)	—	(5.0)	—	小さな高台、見込み露胎 体部下半及び高台は露胎	灰白	灰白	
73	白磁	皿	S E 8 (2 A)	—	(5.9)	—	低高台、見込み肥背露胎 体部下半及び高台は露胎	灰白	灰白	
74	白磁	皿	S E 1 (3 B)	—	4.6	—	高台は小さく丸みを帯びる 見込み露胎、体部下半及び高台は露胎	灰白	灰白	複製
75	白磁	皿	S E 1 (1 C)	—	(8.2)	—	大さめの高台、見込み露胎 体部下半及び高台は露胎	白	灰白	複製
76	白磁	皿	S E 1 (3 A)	—	—	—	口縁部やや内湾、体部下半露胎	白	白	
77	白磁	皿	S E 1 (1 B)	—	—	—	小さな高台、外面にへつ張り状 見込み及び体部下半・高台は露胎	明オリーブ灰	明オリーブ灰	複製
78	白磁		S E 1 (3 A)	—	4.3	—	見込み及び高台は露胎	白	灰白	
79	白磁		S E 1	—	(4.0)	—	小さく低高台 体部下半及び高台は露胎	白	白	
80	白磁	皿	S E 1 (2 H)	—	4.05	—	切り高台 見込みに重ね焼きの目跡	灰白	白	
81	白磁	皿	S E 1 (3 A)	—	(4.1)	—	切り高台 見込みに重ね焼きの目跡	白	白	
82	白磁	皿	S E 1 (2B, 3C)	7.5	4.3	1.9	切り高台 見込みに重ね焼きの目跡	灰白	灰白	
83	白磁	皿	S K 1 (3C)	(8.8)	(4.1)	2.4	切り高台、見込みに重ね焼きの目跡 体部下半及び高台は露胎	明緑灰	灰白	
84	白磁	皿	S E 1 (6B, 7B)	(10.4)	(4.5)	2.5	薄底皿 体部下半及び高台は露胎	明緑灰	明緑灰	
85	白磁	杯	S E 1 (3 B)	—	—	—	八角の小花 体部下半露胎	灰白	灰白	
86	白磁	蓋	S E 1 (2 A)	12.8	—	1.5	内面一帯露胎 蓋あるいは蓋子の蓋	灰白	灰白	
87	白磁	底部	S E 8 (2 B)	—	(5.1)	—	光面露胎、体部下半露胎 蓋のり、蓋子あるいは蓋子の底部	灰白	白	
88	染付	碗	S E 1 (10 D)	(10.0)	—	—	外面に青花	灰白	灰白	焼成不良
89	染付	碗	S E 1 (10 B)	—	—	—	外面に紫雲文	明緑灰	明緑灰	
90	染付	碗	S E 1 (5B, 6A)	—	4.1	—	外面に紫雲文、見込みに「貝」の文様 高台の露胎でその露胎	明緑灰 灰白	灰白	
91	染付	碗	S E 1 (3 A)	—	(5.0)	—	骨付露胎 見込みに「梅」を数す文様	明緑灰 灰白	明緑灰	
92	染付	碗	S E 1 (3 A)	—	(5.6)	—	骨付露胎 見込みに「貝」の文様	明緑灰	灰白	
93	染付	碗	S E 1 (2 B)	—	(5.4)	—	外表面紫雲文 見込みに「貝」の文様、骨付露胎	灰白 明緑灰	明緑灰	
94	染付	碗	S E 1 (4 B)	—	(5.6)	—	全体に鉄地、体部下半に鉄地 高台の透写無骨付露胎	藍褐色地	藍褐色地	肥前系
95	染付	碗	S K 1 (10 D)	—	—	—	外面書草文	明緑灰 灰白	明緑灰	
96	染付	皿	S E 1 (7 B)	—	(3.7)	—	骨付露胎	明緑灰	明緑灰	
97	染付	皿	S E 1 (4 B)	—	(6.5)	—	外面書草文、内面透写加子文 骨付及び高台の露胎	灰白	灰白	
98	染付	皿	S E 1 (2 B)	—	(7.4)	—	高台内、口沿半露の縁 骨付露胎	明緑灰	明緑灰	

器物 番号	種別	器種	出土地点	法 要 (cm)			形 態・文 様 の 特 徴	色 調		備 考
				口徑	底徑	器高		外	内	
99	染付	皿	SE 1 (2 A)	—	(3.6)	—	外面垂蓮文、葵菊底	明緑灰	明緑灰	
100	染付	皿	SE 1 (7 B)	—	(4.0)	—	高台内露胎、内面に「花」の字	肉黄 灰白	明緑灰	
101	染付	皿	SE 1 (5 B)	—	(4.0)	—	体部下半露胎、葵菊底	灰白	灰白	
102	染付	皿	SE 1 (2 A)	—	—	—	外裏垂蓮文、内面草花に鳥の文様	明緑灰	明緑灰	
103	染付	皿	SE 1 (7 B)	—	(4.3)	—	内面に宝の田中体、葵菊底	灰白	灰白	
104	染付	皿	SE 1 (7 B)	—	—	—	葵菊底	灰白	灰白	
105	染付	皿	SE 1 (7 B)	—	—	—	内外面に團扇	灰白	灰白	
106	染付	皿	SE 1 (3 B)	—	—	—	外周草花文	薄い青	薄い青	
107	染付	皿	SE 1 (3 B)	—	—	—	外面に花文	明緑灰	明緑灰	
108	染付	皿	SE 1	—	—	—	外面に花文	明緑灰	明緑灰	
109	染付	皿	SE 1	—	—	—	外面に花文	明緑灰	明緑灰	
110	染付	皿?	SE 8	—	(4.8)	—	内面絶目輪刺ぎ、高台にモミ散灰	灰 明赤焼	灰 にぶい焼	複製
111	陶器	碗	SE 1 (10 B)	—	—	—	天目茶碗、体部下半露胎	黒 にぶい赤焼	黒 にぶい赤焼	瀬戸美濃系
112	陶器	皿	SE 1 (2 B)	11.1	(5.0)	2.2	内外面に輪 見込み露胎、器形にワドナ	浅黄	浅黄	瀬戸美濃系
113	白磁	皿	SE 8 (2 C)	—	—	—	口縁部くの字に團扇	明緑灰	明緑灰	肥前系、半青磁
114	白磁 半青磁	皿	SE 8 (2 C)	—	—	—	口縁部くの字に團扇	明緑灰	明緑灰	肥前系、半青磁
115	染付	皿	SE 1 (10 C)	(12.7)	(5.9)	2.6	透付露胎、内面に松蓮 見込み露胎の文様	明オリーブ灰	明オリーブ灰	古田窯
116	青磁	碗	SE 1 (5 B)	—	(4.8)	—	透付露胎、 見込み絶目輪刺ぎ	明緑灰	明緑灰	肥前系(陶輪)
117	白磁	碗	SE 1 (5 B)	—	(4.4)	—	外面のみ透オリーブ灰焼 見込みに絶目状の露胎	透オリーブ灰	白	国産
118	陶器	碗	SE 1 (2 B)	(11.8)	(5.2)	6.9	口縁部反、体部下半及び高台は露胎 外周露胎、内周天目露	灰白	黒	岩津焼
119	陶器	皿	SE 1 (9 B)	—	—	—	見込み目露	灰白	灰白	肥前系
120	陶器	碗	SE 1 (9 B)	(11.0)	—	—	筒形の碗、内面は磁場の輪	灰黒	黒褐	薩摩焼
121	陶器	碗	SE 1 (3 A)	—	—	—	体部は内湾しな ら上方へのびる	黒褐	黒褐	薩摩焼
122	陶器	碗	SE 1 (3 B)	—	—	—	薄手、口縁部は外反	黒褐	黒褐	薩摩焼
123	陶器	碗	SE 1 (4 B)	—	4.8	—	高台は高く、高台内は露胎 見込み絶目輪刺ぎ	赤黒	赤黒	薩摩焼
124	陶器	碗	SE 1 (4 B)	—	4.0	—	高台内は露胎 見込み絶目輪刺ぎ	暗オリーブ灰	オリーブ黒	薩摩焼
125	陶器	瓶?	SE 1	—	4.7	—	高台内露胎 内面は露胎	にぶい黄橙	明緑灰	薩摩焼
126	陶器	碗	SE 1 (10 C)	—	(5.6)	—	体部下半及び高台内露胎	灰黄 焼	明緑赤焼 黒焼	
127	陶器	碗	SE 1 (3 B)	—	4.55	—	高台内露胎 見込み絶目輪刺ぎ	にぶい赤焼 黒焼 オリーブ灰		薩摩焼
128	陶器	碗	SE 1 (1 B)	—	(4.0)	—	高台が、体部下半及び高台内露胎 見込み絶目輪刺ぎ	灰白 黄橙	灰白	薩摩焼
129	陶器	碗	SE 1 (7 A)	—	(5.4)	—	透付露胎 見込み絶目輪刺ぎ	灰白	にぶい焼 灰白	薩摩焼
130	陶器	鉢?	SE 1 (5 B)	—	—	—	内外面とも横ナデ	オリーブ黒	灰赤	薩摩焼
131	陶器	皿		(19.0)	15.0	6.18	三足付皿、横ナデ 内面に貝目	黒褐	灰褐 黒焼	薩摩焼
132	陶器	鉢		—	—	—	横ナデ 口縁上部露胎	褐灰	黒褐	薩摩焼
133	陶器	鉢	SE 1 (9 A)	(18.0)	—	—	横ナデ 口縁上及び内面露胎、蓋?	灰黄褐	赤灰	薩摩焼
134	陶器	鉢	SE 1 (7 B)	—	—	—	横ナデ 口縁上及び内面露胎	灰褐	赤 灰灰	薩摩焼
135	陶器	皿	SE 1 (5 B)	—	—	—	横ナデ	灰褐 黄橙	浅黄	薩摩焼
136	陶器	壺?	SE 1	—	—	—	口縁上部露胎	暗褐	黄 にぶい焼	薩摩焼
137	陶器	壺	SE 1 (10 D)	(6.3)	—	—	横ナデ、体部内面露胎	浅黄	灰黄	薩摩焼

遺物番号	種別	器種	出土地点	法量 (cm)			形態・文様の特徴	色調		備考
				口径	底径	器高		外	内	
138	陶器	底部	SE 6 (2 A)	—	(5.6)	—	横ナデ、外面露胎 底面灰化?	にぶい黄褐色	灰白	露胎焼
154	陶器	すり鉢	SE 1 (10 H)	—	—	—	注口部内外面とも横ナデ	にぶい黄褐色	赤褐色	露胎焼
155	陶器	甕	SE 1 (2 B)	—	—	—	底部横ナデ	褐色	明赤褐色	露胎焼
156	青磁	碗	SE 1 (2 B)	—	4.7	—	体部下半に鉄赤の沈線、高台内露胎	緑灰	緑灰	
157	青磁	碗	SE 1 (2 B)	(13.1)	—	—	外面削先露胎	明緑灰	明緑灰	
158	青磁	碗	SE 1 (2 B)	—	(5.0)	—	下半の底部、高台内露胎が 貫入あり	緑	緑	
159	白磁?	皿	SE 1 (2 B)	—	6.15	—	見込み筋目輪割ぎ 体部下半及び高台内は露胎	灰白 橙	淡黄	粗製
160	白磁?	碗	SE 1 (2 B)	—	(3.6)	—	小さな高台、高台内露胎	明緑灰	明緑灰	
161	染付	皿	SE 1 (2 H)	—	(4.2)	—	染付及び高台内露胎 見込み筋目輪割ぎ	灰白	灰白	淡色見
162	染付	皿	SE 1 (2 B)	—	(4.0)	—	摹写 外面人形十字文、内面「寿」	明緑灰	明緑灰	
163	陶器	鉢	SE 1 (10 H)	—	—	—	口縁部肥形、全体に薄い輪 割ナデ	にぶい赤褐色	灰赤	164と同一器体
164	陶器	鉢	SE 1 (10 H)	—	—	—	口縁部肥形、全体に薄い輪 割ナデ	にぶい赤褐色	灰赤	
168	青磁	瓶	SE 5	(7.0)	—	—	型作り、口縁部輪花 彫刻彫文	オリーブ灰	オリーブ灰	
169	青磁	碗	SE 5	—	—	—	外面へラ描き露胎文 高台内及び見込み露胎	灰白	灰白	
170	青磁	碗	SE 6 (3 C)	—	—	—	厚手の口縁部	オリーブ灰	オリーブ灰	
171	青磁	碗	SE 6	—	—	—	端反り口縁、へら描き露胎文	灰白	灰白	
172	青磁	碗	SE 6 (3 C)	—	—	—	端反り口縁、へら描き露胎文	明緑灰	明緑灰	
173	青磁	碗	SE 6 (3 C)	—	—	—	染付及び高台内露胎	淡黄	淡黄	焼成不良
174	青磁	碗	SE 6 (3 C)	—	—	—	大型の碗、厚手の底部 高台内露胎	オリーブ灰	オリーブ灰	
175	青磁	碗	SE 6 (3 C)	—	—	—	高台内露胎、貫入あり	灰白	灰白	
176	白磁	皿	SE 6 (3 D)	—	—	—	切高台目の口縁部	灰白	灰白	
177	白磁	皿	SE 6 (3 C)	—	—	—	外面の彫刻形の凹凸 口縁部は内面露胎	灰白	灰白	
178	染付	皿	SC 4	—	—	—	外面露胎文、染付露胎	白 薄い青緑	薄い青緑	
179	土師質	皿	SC 5 (2 B)	—	(7.8)	—	へら切り?	灰白 褐色	灰白	
180	土師質	皿	SC 5 (2 B)	—	(4.3)	—	へら切り?	灰褐色	にぶい橙	
181	土師質	皿	SC 5 (2 C)	—	(6.7)	—	糸切焼	灰白	灰白	
182	青磁	碗	SC 5 (2 B)	—	—	—	削先露胎文、高台内露胎	緑	緑	
183	青磁	皿	SC 9	(11.0)	(4.4)	3.2	桜花皿、染付及び高台内露胎	にぶい橙	にぶい橙	酸化気味
184	陶器	鉢	包含層	—	—	—	口縁部に自然熱、横ナデ	褐色	褐色	東洋系
185	陶器	鉢	(8 B)	—	—	—	全体露胎、横ナデ	灰白	灰白	東洋系
186	染付	碗	一掃 包含層	—	(4.0)	—	染付にモミ紋	薄い灰	薄い灰	
187	染付	皿	一掃 包含層	(10.2)	(5.0)	—	摹写底、底部露胎	薄い灰	薄い灰	
188	陶器	碗	(7 B)	—	4.3	—	染付露胎	淡黄	淡黄	肥前焼、兵器手
189	陶器	すり鉢	包含層	—	—	—	内面使用痕	にぶい赤褐色	橙	露胎焼
190	陶器	すり鉢	包含層	—	(11.5)	—	底部一単位9本の指推き条痕	灰赤	にぶい赤褐色	露胎焼
191	染付	碗	(6 C)	—	—	—	口縁部端反り 外面こもり文	灰白	灰白	肥前系
192	染付	皿	(2 D)	—	—	—	内面写持ち文	明緑灰	明緑灰	
196	弥生	甕?	SE 5 (2 C)	—	—	—	貼付三角突帯、横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	
197	弥生	高坏	SE 5 (3 B)	—	—	—	脚部、全体磨耗の為不明	橙	にぶい橙	

※右列4は培養状況推定である

6. V区の調査

V区のさらに南に続く発掘区である。V区は、東西30m、南北175mの南北に長い発掘区で面積5,250㎡をはかる。このV区までにいる発掘区がほとんど比高差のない平坦にちかひものだったのに比べ、V区の原地形は、南端に小規模な谷がはいる。全掘できていないため全体像は明らかではないが、谷は幅約20mで南東方向に延びているものとおもわれる。この谷上をSE30、32などの溝が延びているから、より古く埋没した谷であろうとおもわれ、遺構に影響をあたえていない。主な遺構は溝状遺構である。断面形の大きな溝状遺構SE29、32をはじめ、楕円形の窪みが規則的に連なるSE30など特徴的な溝がかさなる。これらの溝は、B6区西端からほぼ南の方向へ延びほぼ60mにわたって続いている。これらの溝は途中で分岐しているものが多い。

遺構

29号溝状遺構

V区の溝状遺構中、もっとも全幅、深さとも良く遺存するもので、A7区の西端から発して、A10区まで、全長45mを計測する。溝底は御池ボラ層までおよび、断面は浅いU字状を呈する。埋土に必ず灰白色ボラ（文明ボラ）を、U字状、あるいはレンズ状に包含している。A10区以南は、削平のため喪失し、発掘区の南端壁面に断面が遺存しているのでさらに南へ延びていたものと推定される。A8区でSE32が分岐する。SE29がこのSE32を切っている。

30号溝状遺構

SE29、32号より一段高所に位置するもので、Ⅲ区のSE24、25と同じように不定楕円形の掘り込みが、南北に規則的に連なる特異な遺構である。全長33mである。SE24、25より不定楕円掘り込みの規模、全幅、全長ともに大である。A10区、11区にかけては、上部削平のため遺存状態が不良であるが、A9区付近では良く遺存している。埋土の状態から、SE30もまた、灰白色ボラ（文明ボラ）降下以前の所産である。SE29とはほぼ平行しているため、同時期のようにおもわれたがE断面をみると、SE29がSE30を切っている。また、SE30上面は、ほぼ全面が酸化鉄の硬着のため、3.0～5.0mm幅の硬化面となっている。

31号溝状遺構

SE31は、SE30の東側にある硬化面の広がりである。レベルは、SE30よりやや高位にあり凹面にはなっていない。SE31は、一枚以上の硬化層（厚3.0～5.0mm）からなり、出土遺物から、近世の道となろう。

32号溝状遺構

S E 29によって、A 8区中央付近で切られている。そのS E 29との接点部分から検出できたA 11区の南端部分までの全長は約34mを測る。S E 32は、またA 9区の南端で二又に分岐しており、S E 32①、S E 32②となる。分岐したS E 32①②はさらに南へ延びてゆく。S E 32は切り合い関係によって、もっとも古い溝状遺構となる。埋土に、灰白色ボラ（文明ボラ）がU字状、あるいはレンズ状に入る。

遺物

29号溝状遺構出土遺物（第56図）

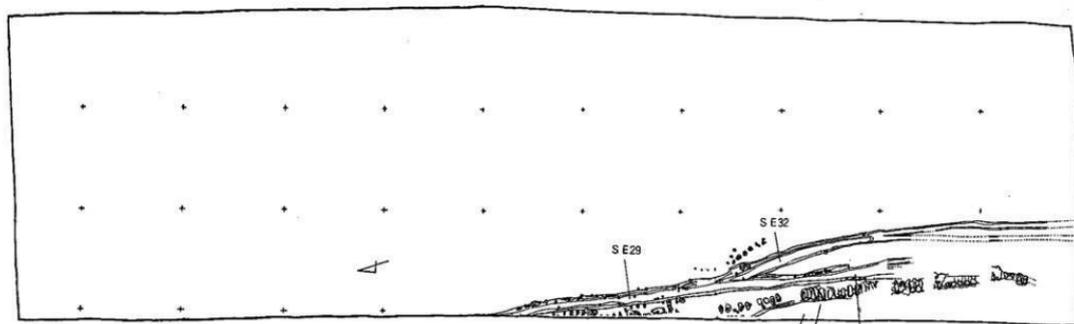
29号溝状遺構からは、国産陶磁器、陶器、輸入陶磁器、吹き羽口など小片を含めて約30点が出土した。

1. は輸入陶磁器で梵字文がみえる。2. は肥前系丸文碗の口縁片である。発色がにぶく灰緑色になっている。3. 4. 5. 6. は、薩摩系の鉄軸陶器である。3. は浅鉢の口縁部で、短かく強く外反する。4. は米家の底部で足の部分となる。足の周辺は露胎となる。5. は碗の底部、見込は蛇目状の軸ハギがみられ、高台内は露胎となる。胎土は赤褐色。6. は半胴の胴部片か、表面に比較的深いカキ目が施されている。7. 8. は輸入陶磁器である。7. は線描蓮弁文白磁碗で、復元推定口径11.5cmとなる。焼成は細かな空隙が多数みられ、必ずしも良好とは言えない。16世紀後半から17世紀初めのもの。8. は、荻筒底の蕉葉文皿である。発色不良で全体に灰味が強い。16世紀前半から中頃のものである。9. は吹き子の羽口で二分のほど遺存している。

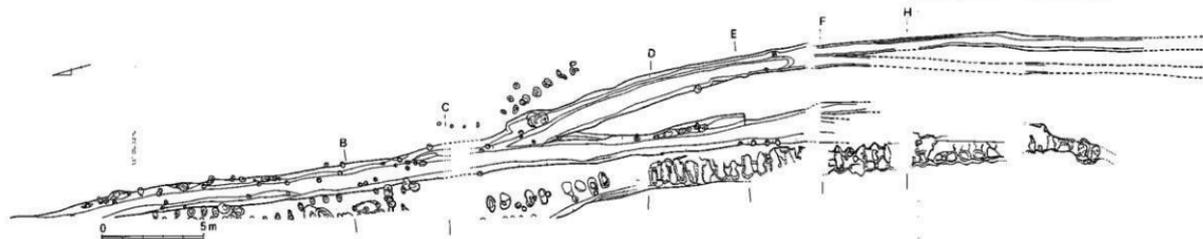
30号溝状遺構出土遺物（第57図）

30号溝状遺構では、土師皿、国産陶磁器、輸入陶磁器、陶器など小片を含む約20点が出土しているが、ほとんど小破片が占めている。

10. は、復元推定口径8.0cmの土師器の皿、口縁端を極端に厚くつくる。11. は、福建、もしくは広東系の染付碗である。一次的に釉の粗れた部分がある。12. は周辺の陶磁窯産と推定されるもの。胎土は灰色、やや緑色がかった透明釉がかかっている。14. 15. 16. 17. 18. は薩摩系の鉄軸陶器である。14. 15. は鉢の口縁部、16はその胴部となるか。17は碗、18は半胴の胴部片であろう。13は青磁稜花皿の口縁片である。

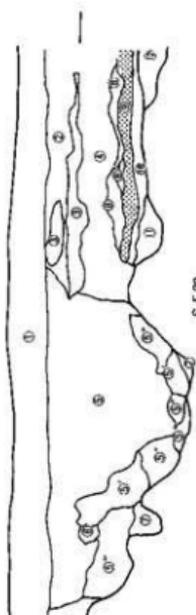


第52图 V区发掘调查区实测图(1/400)



第53图 29·30·31·32号溝状遺構实测图(1/200)

C断面

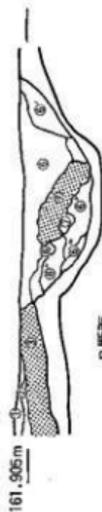


S E 29

C断面

- | | |
|--------------|--------------|
| ① 灰白色中-细砂质粘土 | ⑥ 灰褐色土 |
| ② 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑦ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ③ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑧ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ④ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑨ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑤ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑩ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑥ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑪ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑦ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑫ 灰褐色中-细砂质粘土 |

B断面

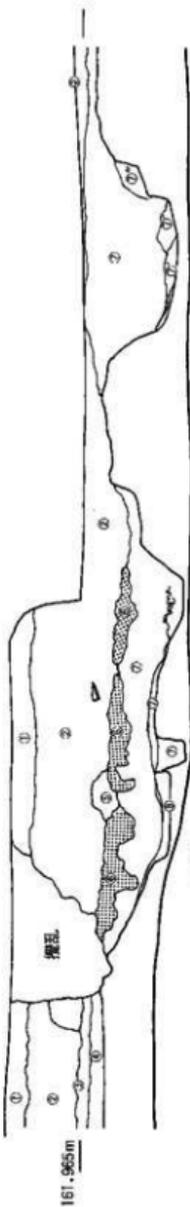


S E 29

- | | |
|--------------|--------------|
| ① 灰白色中-细砂质粘土 | ⑥ 灰褐色土 |
| ② 灰褐色土 | ⑦ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ③ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑧ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ④ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑨ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑤ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑩ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑥ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑪ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑦ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑫ 灰褐色中-细砂质粘土 |

B断面

D

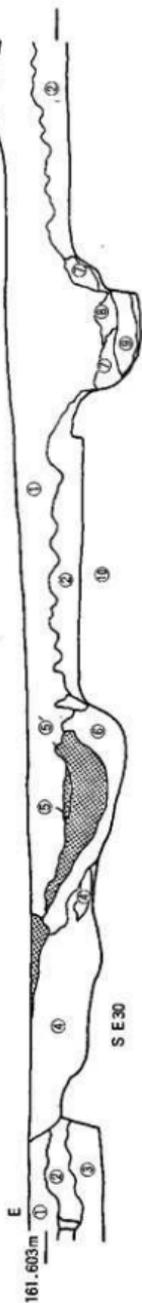


D断面

- | | |
|--------------|--------------|
| ① 灰白色中-细砂质粘土 | ⑥ 灰褐色土 |
| ② 灰褐色土 | ⑦ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ③ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑧ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ④ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑨ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑤ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑩ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑥ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑪ 灰褐色中-细砂质粘土 |
| ⑦ 灰褐色中-细砂质粘土 | ⑫ 灰褐色中-细砂质粘土 |



第54图 V区·C·D土層断面示意图



SE 29

- ① 灰白色ボラ混雑灰色土
 ② 黄色ボラ混雑灰色土
 ③ 灰白色ボラ混雑褐色土 (SE 30の埋土)
 ④ 灰白色ボラ混雑褐色土
 ⑤ 灰白色ボラ混雑褐色土
 ⑥ 灰白色粘質土
 ⑦ 灰白色粘質土
 ⑧ 灰白色粘質土
 ⑨ 灰白色粘質土
 ⑩ 灰白色粘質土
 ⑪ 灰白色粘質土
 ⑫ 灰白色粘質土
 ⑬ 灰白色粘質土
 ⑭ 灰白色粘質土
 ⑮ 灰白色粘質土
 ⑯ 灰白色粘質土
 ⑰ 灰白色粘質土
 ⑱ 灰白色粘質土
 ⑲ 灰白色粘質土
 ⑳ 灰白色粘質土
 ㉑ 灰白色粘質土
 ㉒ 灰白色粘質土
 ㉓ 灰白色粘質土
 ㉔ 灰白色粘質土
 ㉕ 灰白色粘質土
 ㉖ 灰白色粘質土
 ㉗ 灰白色粘質土
 ㉘ 灰白色粘質土
 ㉙ 灰白色粘質土
 ㉚ 灰白色粘質土
 ㉛ 灰白色粘質土
 ㉜ 灰白色粘質土
 ㉝ 灰白色粘質土
 ㉞ 灰白色粘質土
 ㉟ 灰白色粘質土
 ㊱ 灰白色粘質土
 ㊲ 灰白色粘質土
 ㊳ 灰白色粘質土
 ㊴ 灰白色粘質土
 ㊵ 灰白色粘質土
 ㊶ 灰白色粘質土
 ㊷ 灰白色粘質土
 ㊸ 灰白色粘質土
 ㊹ 灰白色粘質土
 ㊺ 灰白色粘質土
 ㊻ 灰白色粘質土
 ㊼ 灰白色粘質土
 ㊽ 灰白色粘質土
 ㊾ 灰白色粘質土
 ㊿ 灰白色粘質土

E断面

- 灰白色ボラ点々と混る。
 御池ボラ1.0~3.0mm大多く混る。
 ②層よりさらに多くのボラが混る。
 1.0~5.0mm大の灰白色ボラ混。酸化鉄赤斑が多くみられる。
 5.0~8.0mm大のボラ多く混る。
 ⑤/ 層ボラの混雑である。
 文相ボラである。
 ねばり気の多い黒褐色土である。
 5.0~8.0mm大の黄白色ボラ粒が多く混る。
 5.0mm大の黄白色ボラが時に混る。
 ⑧層と似る。粘性大。



161.573m

SE 29

- ① 黄色ボラ混雑褐色土
 ② 黄色ボラ混雑褐色土
 ③ 黄色ボラ混雑褐色土
 ④ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑤ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑥ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑦ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑧ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑨ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑩ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑪ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑫ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑬ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑭ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑮ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑯ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑰ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑱ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑲ 黄色ボラ混雑褐色土
 ⑳ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉑ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉒ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉓ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉔ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉕ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉖ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉗ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉘ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉙ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉚ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉛ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉜ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉝ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉞ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㉟ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊱ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊲ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊳ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊴ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊵ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊶ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊷ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊸ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊹ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊺ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊻ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊼ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊽ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊾ 黄色ボラ混雑褐色土
 ㊿ 黄色ボラ混雑褐色土

F断面

- 1.0~3.0mm大の黄色ボラが均一に混る。
 5.0~8.0mm大の黄白色ボラが多く混る。酸化鉄赤斑が顯著である。
 1.0mm大の黄白色ボラ混る。こまかい酸化鉄赤斑。
 5.0mm大の黄白色ボラ混る。酸化鉄赤斑あり。
 ラミナ状に堆積する。粘性大。
 3.0~10.0mm大ボラ混。
 3.0mm大の灰白色ボラがひじょうに多い。
 ややにこりがある。
 粘性大。
 黄色ボラ (3.0mm大) がラミナ状に入る



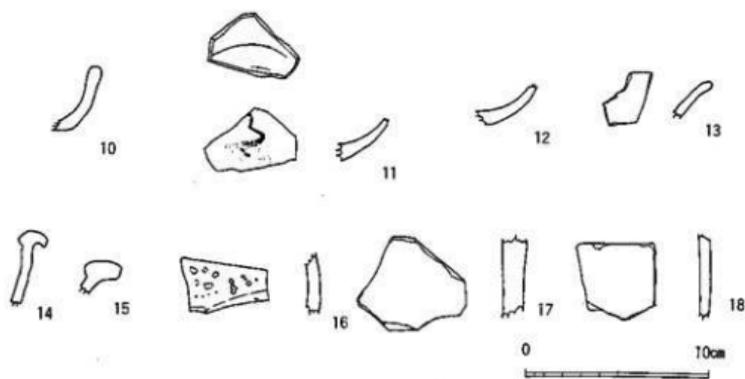
第55図 V区・F土層断面実測図



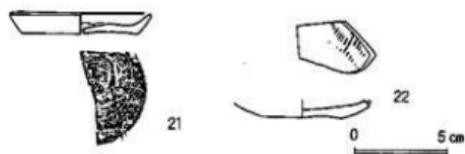
第56图 29号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)



第57图 31号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)



第58图 30号满状遗構出土遺物実測図(1/3)



第59图 32号满状遺構出土遺物実測図(1/3)

31号溝状遺構出土遺物 (第57図)

31号溝状遺構では、薩摩系陶器が主に出土している。細破片が多く約5点の出土である。20は茶家の蓋である。19は壺あるいは鉢の底部片と考えられる。

32号溝状遺構出土遺物 (第59図)

32号溝状遺構では、他の同遺構で顕著であった薩摩系陶器の出土をみていない。主な遺物は土師皿、輸入陶磁器で小片を含め5点である。

21は復元推定口径7.0cmの土師小皿で、典型的な糸切り離し痕がみられる。22.は青磁皿である。やや上底状、内面に髹描によるジグザグ文様を施す。底部は露胎。釉の発色は暗灰色で暗い。河安窯系と考えられる12世紀から13世紀代のものである。

図面番号	遺物番号	地区	器形	器部	調 整		文 様	胎 上	色 調		焼成	備 考	
					内 面	外 面			表	裏			
60	36	V	細鉢	口縁	横ナデ	斜方向ナデ	-	-	2.5mm以下の淡黄色ガラス質粒、1.0mm以下の黒色砂粒。	明赤褐 (2.5Y R5/6)	明赤褐 (2.5Y R5/6)	良好	
60	37	+	浅鉢	口縁	横へう巻き	横へう巻き	-	-	2.5mm以下の茶色砂粒	浅青緑 (10Y R6/3)	浅黄緑 (10Y R6/3)	良好	
60	38	+	浅鉢	口縁	横ナデ	横ナデ	-	-	1.5mm以下の白色ガラス質粒、0.5mm以下の茶、淡黄色砂粒を含む。	明赤褐 (5 Y R3/2)	黄 緑 (5 Y R3/1)	良好	
60	39	+	浅鉢	胴部	ナデ	ナデ	-	-	0.3mm以下の灰色・白色・黒色粒を含む。	黄 (5 Y R6/6)	黄 (5 Y R6/6)	良好	胴部器蓋部である。
60	40	+	(鉢)	胴部	ナデ	ナデ	-	-	0.3mm以下の茶色・黒色・白色粒を含む。	黄灰 (7.5Y R4/1)	にがい赤褐 (7.5Y R5/4)	良好	
60	41	+	(鉢)	胴部	粗いナデ	斜方向ナデ	-	-	1.0mm以下の淡黄色、透明灰色の細砂粒を含む。	明赤褐 (2.5Y R5/6) に近い赤褐 (2.5Y R4/4)	灰褐 (5 Y R5/2)	良好	
60	42	+	(鉢)	胴部	粗いナデ	斜方向ナデ	-	-	1.0mm以下の淡黄色、透明灰色の細砂粒を含む。	灰褐 (5 Y R4/2)	にがい赤褐 (5 Y R4/2)	良好	
60	43	+	(鉢)	胴部	ナデ	ナデ	-	-	1.0mm以下の淡黄色、透明灰色の細砂粒を含む。	にがい赤褐 (5 Y R4/4)	灰褐 (5 Y R4/2)	良好	洗胎

表 V区出土の縄文土器観察表



第60图 V区出土文物实例图(1/3)(2)

7. VI区の調査

VI区は、南北の長さ約130m、東西幅約30mにおよぶが、農道によって二つに切られる。北は約3,300㎡、南側は約800㎡を測る。遺構としては、溝状遺構4条（SE33-36）、井戸1基、土壇9基、そのほかに道路跡と考えられる硬化面を数箇所検出した。柱穴などは御池ボラ上面では検出されなかった（第61図）。

土壇（第62図～第63図）

調査区の中央から南にかけて9基検出された。土壇墓として考えられるもの2基、土壇あるいは祭祀に用いられた可能性のあるもの1基、不明6基、形態には円形、長方形、不整形などある。柱穴や掘立柱建物跡など検出されていないことや井戸から五輪塔が出土していることから、墓域として利用されていた可能性が高いが、土壇の分布密度が低いことや形態・主軸にまとまりがないなど注意される。

SC2

長軸1.5m、短軸約0.7m、深さ0.25mの長方形で、主軸はN-10°-Eを示す。床面は中央に向かって深くなるが、北側は10cm程度一段高くなりその下場に銅銭が7枚重なった状態で出土した。そのほかに木質片や木質が付着した断面方形の棺釘の小片が数点みられる。銅銭は2枚、3枚、2枚とそれぞれに張付いて計7枚出土した。すべて洪武通寶と想定され、そのうち1枚には裏に「治」の字がみられる。

SC3

長軸1.5m、短軸0.65mの隅丸長方形を呈し、深さ約0.6mを測る。埋土は御池ボラを多く含む暗褐色土で、床面には円形の掘り込みが四箇所検出された。棺釘24点、不明の鉄製品1点が出土していることより、木棺墓と考えられる。棺釘には頭部や先端がL字に曲がるものや折釘などがある。

SC4・5・6

SC4は長軸1.05m、短軸0.45mの長楕円形を呈し、深さ約0.25mを測る。南東端はさらに深く、底面から約50cm下がる。出土遺物は無し。主軸はN-49°-W。SC5は径0.6mの円形を呈し、深さ0.35m。遺物は出土しなかった。SC6は、長軸1.15m、短軸0.8mの不整形を呈し、床面にはさらにいくつかの掘り込みがあり、最深部で深さ約0.3mを測る。遺物はヘラ切り底の土師質皿や土師質土器の小片が少量出土した。

SC3出土鉄製品計測表

No	長さ(cm)	特 徴
1	(3.7)	内部に木質
2	2.8	頭部・胴部に木質
3	(7.9)	先端部欠損。頭部・先端部L字
4	7.9	頭部L字、先端部に木質
5	3.0	頭部L字
6	3.1	頭部L字、先端部に木質
7	(2.0)	先端部欠損。頭部・先端部L字、全体的に木質
8	(3.4)	先端部欠損。胴部に木質
9	3.5	
10	2.8	頭部L字
11	(1.6)	先端部欠損。先端部L字、胴部に木質
12	(2.3)	先端部欠損。頭部L字、胴部に木質
13	(2.2)	先端部欠損。胴部に木質
14	(2.0)	先端部欠損。胴部に木質
15	(2.7)	頭部・先端部欠損。頭部・先端部L字
16	(1.5)	先端部欠損。頭部L字、胴部に木質
17	(1.6)	頭部・先端部欠損。頭部L字、胴部に木質
18	(1.8)	頭部・先端部欠損。先端部L字、胴部に木質
19	(1.9)	頭部・先端部欠損。胴部に木質
20	(2.5)	先端部欠損。先端部に木質
21	(1.4)	頭部・先端部欠損。先端部L字、胴部に木質
22	(0.6)	頭部・先端部欠損。胴部に木質
23	(1.6)	頭部欠損
24	(1.1)	頭部・先端部欠損。胴部に木質
25	(0.3)	頭部・先端部欠損。胴部に木質

SC7

基本的には径0.8mの不整形を呈し、深さ約10cm。ピット状の落込みがみられるが、切り合いかどうかは判断できなかった。ピットの深さは床面から、20~40cmである。硬質の土師質皿や銅銭3枚(すべて洪武通寶)が出土している。

SC8

長軸1.55m、短軸1.0mの不整形を呈し、床面にはいくつかの掘り込みがあり、土壌の切り合いの可能性もある。出土遺物にはヘラ切り底の土師質小皿や釘のほか、加工が施された軽石片などがみられる。

溝状遺構

溝状遺構は南北に延びるものや南北に延びるもの、そのほか硬化面など8条が検出された。それらは調査区の北端と南端とに分かれて分布している。

SE33(第64図)

V区からの続きで、緩やかな弧を描きながら南北に走り、南端では、SE35を切りながらN-8°-Eを示している。溝幅0.5~1.5m、深さ0.1~0.4m、溝の断面は逆台形を呈す。溝底はSE36と交差するあたりが最も高く、標高差は約90cm。それからまた、南に下っている。これは、V区南に深い凹地がみられることから、当時の地形に由来するものかもしれない。埋土は暗褐色土であるが、底面近くに白ボラがみられる。

出土遺物は、口縁部が外方に短く引き延された土師質小皿(1)や常滑焼甕の胴部片もみられる。

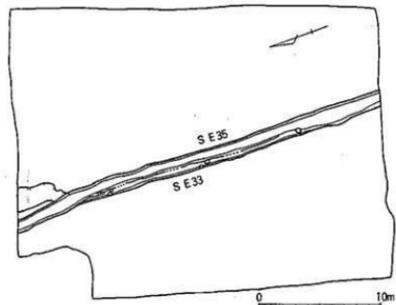
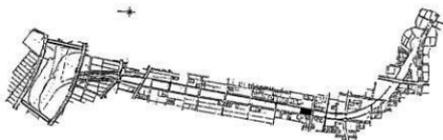
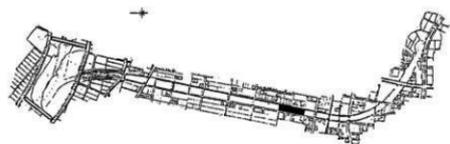
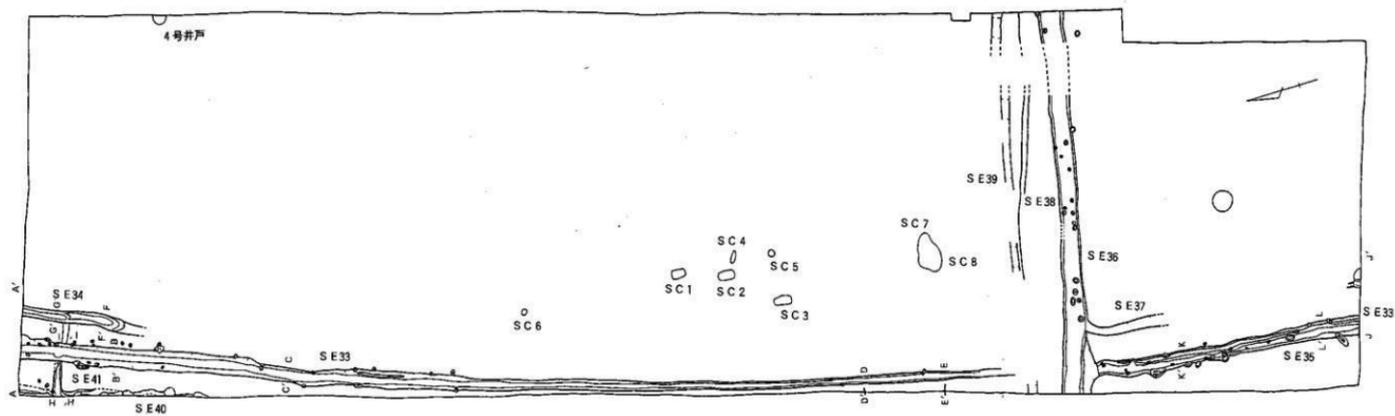
SE34(第64図)

調査区の北端、SE33に並行して走るが、溝底は階段状に上がり約10mで消失する。南北の溝底のレベル差は約0.55mを測る。溝の幅約0.8m、深さ0.05~0.5m、断面は逆台形で、暗褐色土を埋土とする。北側壁面で土層を観察すると、上層に白ボラが堆積している。白ボラの堆積状況からSE33より先に廃絶されたものと考えられる。遺物は出土していない。

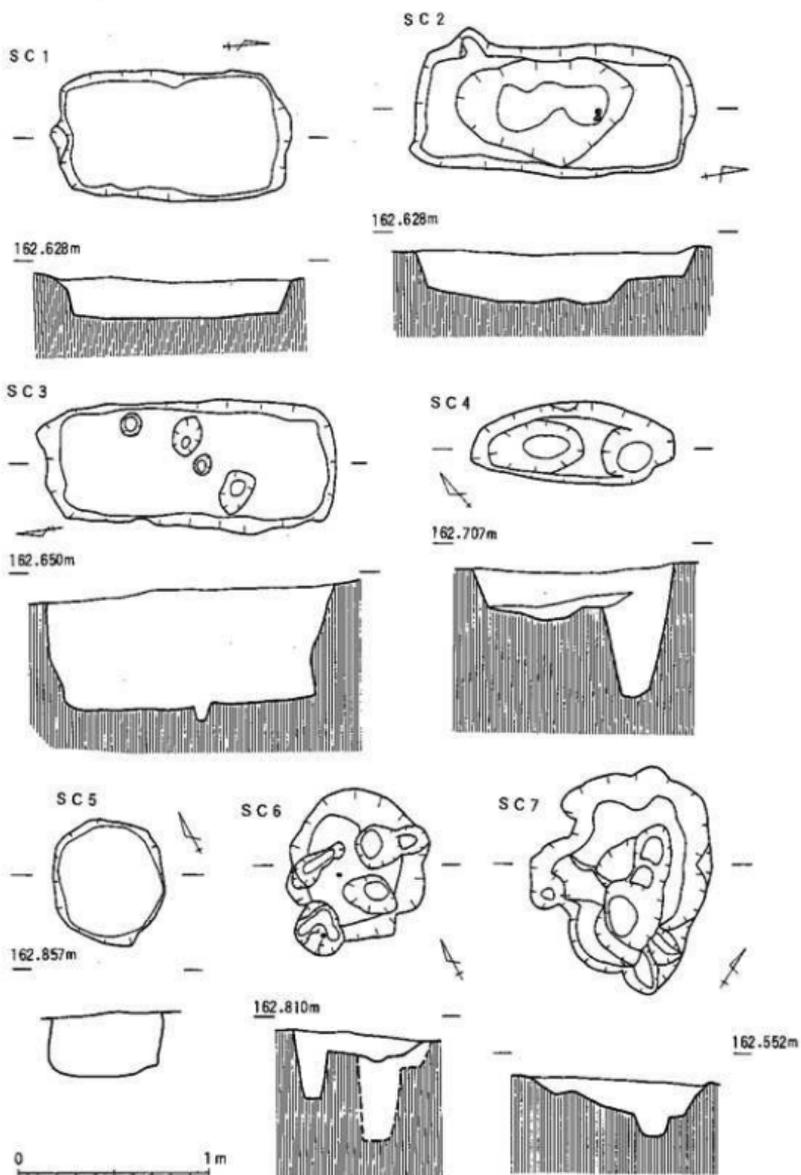
SE35(第65図)

調査区の南西隅、SE33に切られながら並行して、VI区南まで延びる。北はSE36と交わる直前でL字に西へ曲るがそれより以後はSE36に切られている。検出面での断面は逆台形を呈すが、南壁面では二段掘りされ、深さ約0.8m、推定幅約1.8mを測る。VI区検出の溝状遺構では最も古いと考えられる。

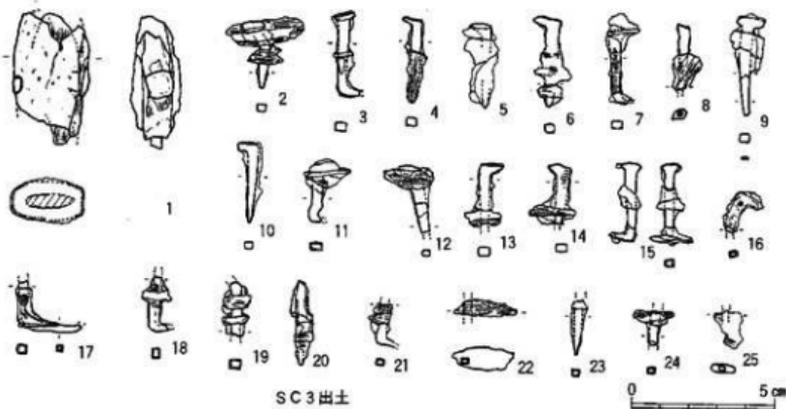
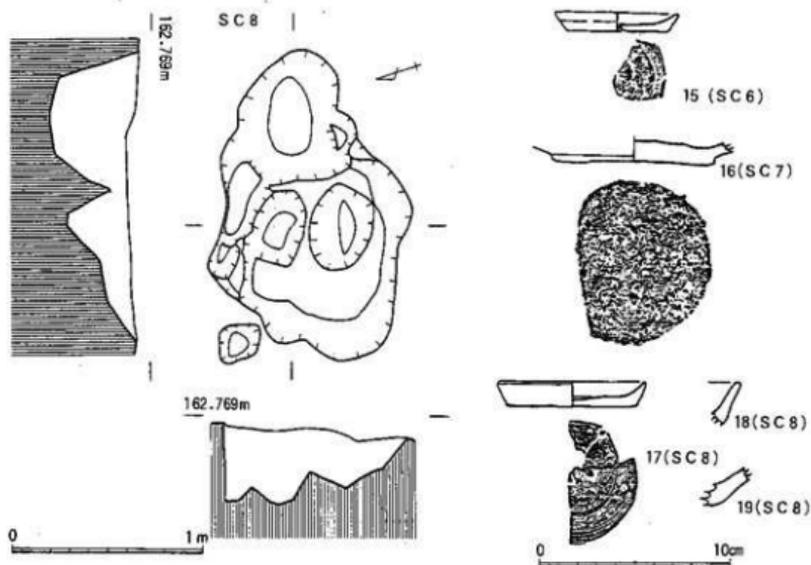
VI区北ではヘラ切り底の土師質小皿(5)や瓦質の摺鉢(6)が出土している。南では土師質皿(2~4)や青磁(7)、白磁(9)などが出土している。2は口縁部が内湾しながら伸び、底部には板状の擦痕がみられる。4はヘラ切り底である。7は青磁碗の底部で、高台は露胎となる。9は白磁皿で、高台は小さく体部下半は露胎となる。(第66図)



第61图 VI区全体配置图



第62图 土坛实测图

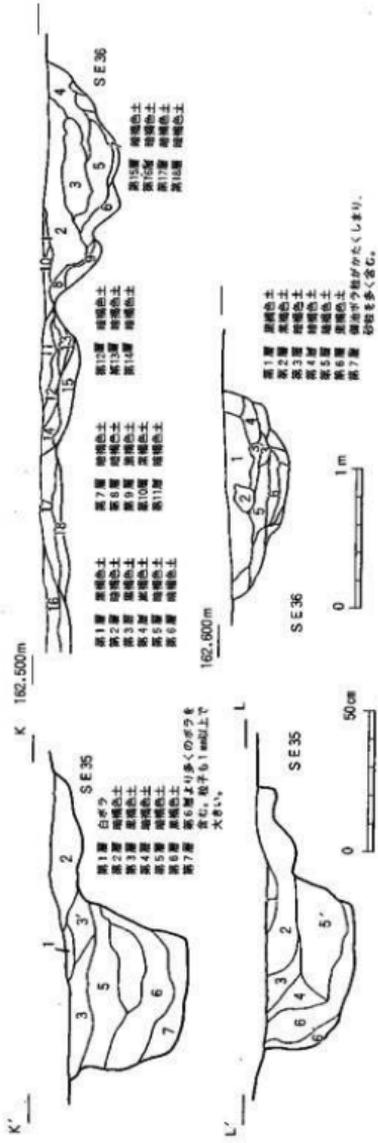
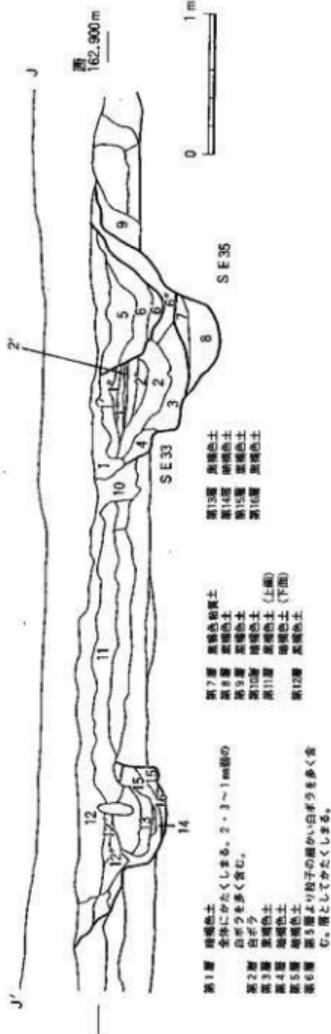


SC3出土

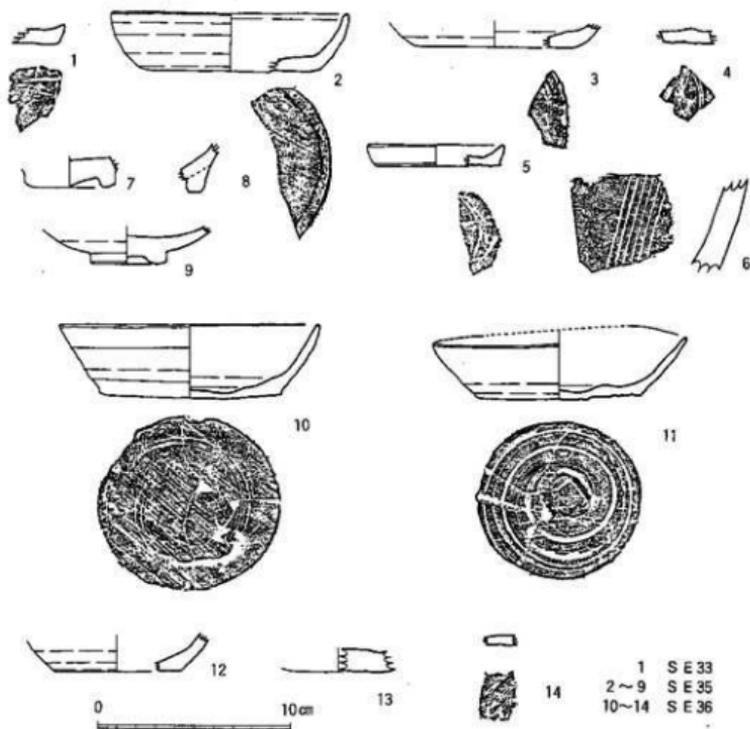


第63図 土壙及び出土遺物実測図

1. 2. 3 SC2
4. 5. 6 SC7



第65図 SE 35・36土層断面図



第66図 SE 33・35・36出土遺物実測図

SE 36 (第65図)

東西方向、N-78°-Wを示し、溝幅約1.8m、深さ約0.5mを測る。埋土は黒褐色土で、底面はやや固くしまる。この溝状遺構に並行して部分的に硬化面が検出された。

遺物には、土師質坏(10~13)や小皿(14)などがある。10・11はヘラ切り底の坏で東端近くで重なって出土した。10は底部に板日状の圧痕が残る。12~14は糸切り底をなすと考えられる(第66図)。

SE 37~39

薄く溝の痕跡だけ確認できた。SE 37は幅約1mで、SE 36と交わるところで東に曲るが、SE 36に切られる。SE 38・39は、東西に走る溝でSE 38は幅約0.4m、SE 39は幅約0.6mを測る。SE 38はSE 37と繋がる可能性がある。

SE40・41 (第64図)

SE40・41は硬化面のみが検出され道路跡と考えられる。SE40はSE33に並行して、調査区の北東壁面に検出された。幅約0.5m、深さ10cmで断面は浅皿上をなす。上層には暗褐色土が混じった白ボラがみられ、その下層は鉄分の沈着した硬化面となる。SE41は調査区の北西隅、道1やSE33・34を直交して東西に約10m確認できる。硬化面は幅約70cm、断面は浅皿状を呈す。底面には御池ボラの硬化面がみられ、その直上には鉄分が沈着している。

4号井戸 (第67図)

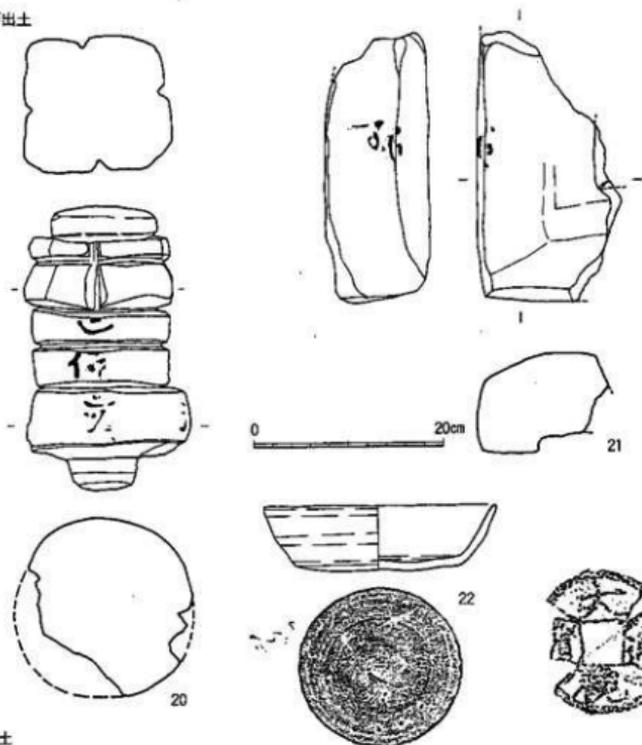
調査区の北東隅で検出され、一部東壁にかかったため、東に掘り広げた。井戸の掘り方は、径約1.2mの円形で、深さ約2.5mを測る。検出面(御池ボラ上面)で既に五輪塔の空風輪や火輪が確認され、ボラ上面から少し掘り下げたところでは完形の土師質土器や銅銭も出土した。

20と21は凝灰岩質の五輪塔の一部である。20は相輪に近い形態をなし、西方向に梵字が墨書される。21は火輪で1/2程度欠損している。20同様四方向に墨書が施されていたと想定される。22は全体に薄手で丁寧に仕上げられている。底部と体部との境は丸みを持ち、口縁端部も丸い。底部中央に墨書がみられるが、字体は判読できない。ただ、供伴した五輪塔に梵字が墨書されていることから、坏のものも梵字の可能性が高い。そのほか銅銭(大観通寶)が1枚出土している。

包含層出土の遺物 (第67図)

23-28は土師質土器の坏と小皿である。23はやや厚手で、底部と体部との境が未調整で粗い。底部はへう切り底である。26は体部が短く外方に引延ばされた小皿で、底部は糸切り底を呈す。29は近世以後の陶器碗の底部で高台内は露胎となる。30は青磁稜花皿の口縁部で、内面には櫛描き状の線彫りが施される。31は肥前系の磁器碗の体部である。32は近世の陶器で、甕か鉢の口縁部と考えられる。内面には5-6条を単位とする櫛描きが施される。

4号井戸出土



包含層出土



第67图 4号井戸及び包含層出土遺物実測図

品物番号	種別	器種	出土地	法 量 (cm)			形 態 ・ 文 様 の 特 徴	色 調		備 考
				口径	底径	器高		外	内	
1	土師質	皿	S E 33	-	-	(1.1)	ヘラ切底。口縁部は軽く外方へのびる	灰白	灰白	
2	土師質	皿	S E 35	(12.4)	(9.6)	3.1	底部に板状捺痕。横ナゲ	橙	橙	内面少量スス付着
3	土師質	皿	S E 35	-	(8.7)	-	横ナゲ。風化気味	浅黄橙	浅黄橙	
4	土師質	皿	S E 35	-	-	-	底部ヘラ切底	浅黄橙	浅黄橙	
5	土師質	皿	S E 35	(7.3)	(6.9)	1.2	ヘラ切底。横ナゲ	淡黄	淡黄	
6	土師質	すり鉢	S E 35	-	-	-	6条を一単位とする御指さ	灰灰	灰黄	備前焼
7	青 磁	碗	S E 35	-	(4.7)	-	鬚付及び高台内は露胎	灰白	浅黄	
8	陶 器	茶 碗	S E 35	-	-	-	底部、外周無縁	明赤褐	にぶい赤褐	
9	白 磁	皿	S E 35	-	4.0	-	鬚付及び高台内は露胎。貫入あり	灰白	灰白	
10	土師質	杯	S E 36	13.5	9.5	4.0	口縁部は内湾気味にのびる。底部薄手でヘラ切底	淡黄橙	淡黄橙	
11	土師質	杯	S E 36	13.2	8.7	3.9	全体的に薄手。底部鋭いヘラ切底。幾どりずみ	橙	橙	
12	土師質	杯	S E 36	-	(6.6)	-	風化の為調整不明	灰白	灰白	
13	土師質	杯	S E 36	-	-	-	底部糸切底	淡黄	淡黄	
14	土師質	皿	S E 36	-	-	-	底部糸切底	浅黄橙	浅黄橙	
15	土師質	皿	S C 6	(6.5)	(5.3)	1.0	底部ヘラ切底	浅黄橙	浅黄橙	
16	土師質	皿	S C 7	-	3.5)	-	風化気味で調整不明。硬質	淡黄	淡黄	スス付着
17	土師質	皿	S C 8	(7.7)	(6.8)	1.3	底部ヘラ切底	橙	橙	
18	土師質	皿	S C 8	-	-	-	横ナゲ	淡橙	淡橙	
19	土師質	皿	S C 8	-	-	-	底部糸切底。横ナゲ	浅黄橙	浅黄橙	
22	土師質	皿	包含層	12.1	8.9	3.5	底部ヘラ切底。横ナゲ	淡黄	淡黄	底部に露黄
23	土師質	皿	包含層	(12.0)	7.7	3.7	底部ヘラ切底。横ナゲ	浅黄橙	淡黄	
24	土師質	皿	包含層	-	-	-	横ナゲ	にぶい橙	にぶい橙	
25	土師質	皿	包含層	-	-	-	底部ヘラ切底。風化気味	灰白	灰白	
26	土師質	皿	包含層	(7.3)	(6.3)	1.2	底部糸切底。横ナゲ	浅黄橙	浅黄橙	
27	土師質	皿	包含層	-	(6.3)	-	底部糸切底。横ナゲ	浅黄橙	浅黄橙	
28	土師質	皿	包含層	-	-	-	横ナゲ	橙	橙	
29	陶 器	鉢	包含層	-	(8.0)	-	鬚付及び高台内は露胎	淡黄	淡黄	
30	青 磁	皿	包含層	-	-	-	模花皿	オリーブ灰	オリーブ灰	
31	染 付	皿	包含層	-	-	-	花文。見込みに圈線	明緑灰	明緑灰	肥前系
32	陶 器	すり鉢	包含層	-	-	-	5条を一単位とした御指さ。横ナゲ	灰赤	灰赤	

8. VI区の調査

VI区は、平成2年度最初の調査区で約1,160㎡である。基本土層は、I層が耕作土でII層は色土で少量の御池ボラを含んでいる。III層も黒色土でII層よりも御池ボラの量が多い。出土遺構は溝状遺構のみでほかは攪乱部分であった。

遺構

SE37

この溝は、幅約1.2m深さ約43cmで東西方向にのびている。溝の埋土の上層には文明の白ボラがあることから文明年間にこの溝は、埋まったと考えられる。

遺物

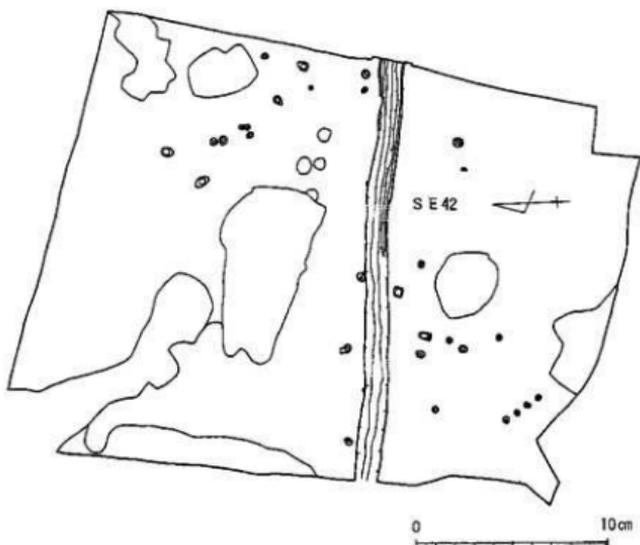
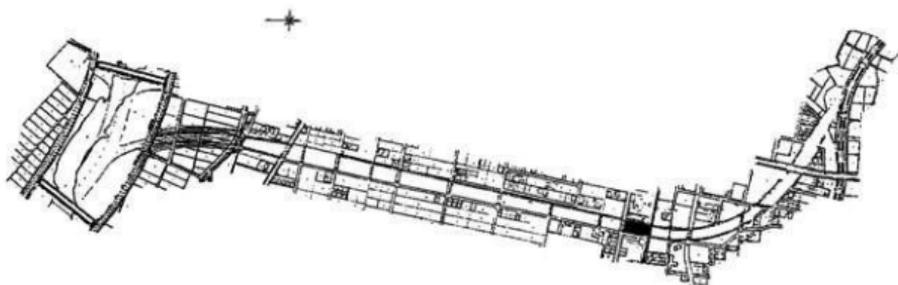
東播系埴鉢(1)

SE42の埋土中から出土したもので、口縁部が膨らみを持ち横ナデ調整が施してありその上に斜め方向のナデを施している。また魚住古窯群の田井支群7号窯の鉢に近い形態と考えられる。したがって13世紀頃であろう。

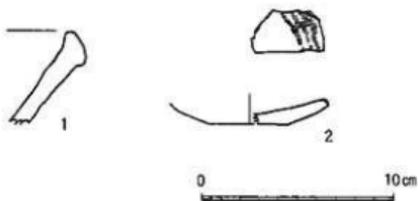
青磁(2)

Ⅲの底部で、ひっかいたような文様の上に釉薬を濃く塗っている。

VI区は、遺構としてはSE42のみであった。SE42は、埋土の上層に文明の白ボラがあり溝の床面に東播系埴鉢が出土していることからこの溝は13世紀前後で文明年間頃までに埋没したのであろう。



第68图 VI区遗址构配置图



第69图 VI区出土遗物实测图

9. Ⅶ区の調査

Ⅶ区は、前年度に表土剥ぎが済んでいたため包含層と思われた部分を掘り下げていった。しかし攪乱の外は何も確認できなかった。調査面積は、約660㎡である。基本土層は、Ⅰ層が耕作土でⅡ層は黒色土である。Ⅲ層も黒色土でⅡ層よりも御池ボラの量が多い。

遺構

Ⅶ区は、特別な遺構は、検出できなかった。倒風木がみられる程度であった。

遺物

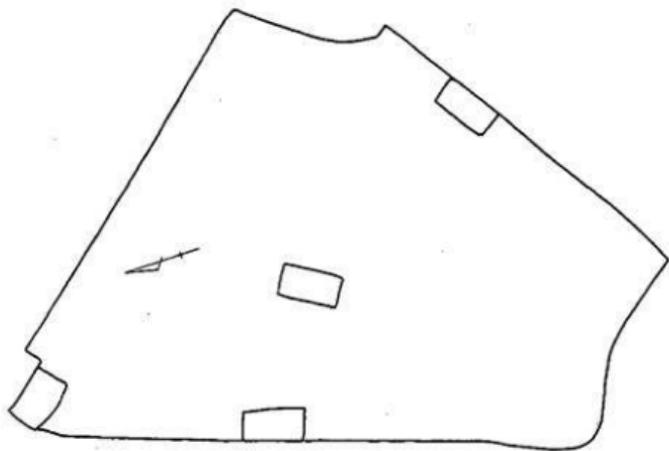
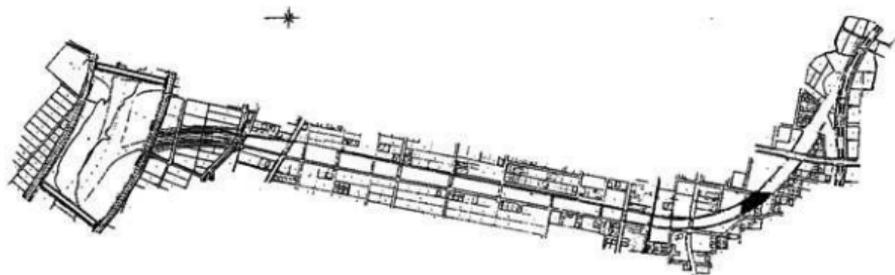
磨製石鏃 (1)

無茎の石鏃で厚さが2mmと大変薄く先端の部分が欠けている。また、斜め方向にフィッシャーがはいっている。

瓶 (2)

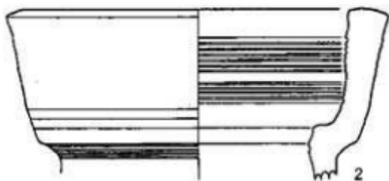
瓶の口縁部で口の部分が平たくなっていて横ナア調整が施されている。外側は全体的に横ナア調整を施している。内側の部分は樽状のもので横に掻いてある。口径は約18cmくらいである。

特別遺構は検出できなかった。御池ボラ層に3本ぐらいトレンチをいれて下の層を確認したが30cmくらい掘ったところで地下水が湧き出てきた。遺物も遺構に伴わないことから流れこみであると考えられる。



0 10m

第70图 VI区全体图



0 10cm

第71图 VI区出土遗物实测图

10. K区の調査

K区は、調査区の北側から掘りすすめた。調査面積は、約1,800㎡である。御池ボラ層の直上まで検出したが、特別な遺構は検出できなかった。基本土層は、I層が耕作土で乾燥すると白っぽくなる。II層が黒色土層でI層より粒が細かく粘性が強い。III層は、黒褐色土層でボラが混入してくるが密度は低い。IV層は黒褐色土層でIII層よりボラの密度は高くなる。V層は褐色土層で粒の大きい御池ボラが混入していて密度は大変高い。

遺物

縄文土器 (1・5)

1は浅鉢形土器で口縁部が平たくなっていて外面には文様はなくて口縁部の内面に稜線がみられる。5は、深鉢で口縁部が丸みを帯びている。口縁部から胴部の外面には横ナデが施されている。

弥生土器 (2)

胴部で最大径よりやや上部に3条の三角突帯をもっている。

須恵器 (3・4)

3・4とも甕で、3は口頸部が内外面とも横ナデを胴部外面が格子目叩きを施している。4は、胴部外面に平行叩きを施している。

土師器 (8)

碗で口縁部から底部にかけて両面に横ナデを施し外面には薄い渦巻き状の沈線が施してある。

青磁 (10)

体部が丸味を帯び高台を持つ碗で灰色の胎土に釉薬がかけられている。

白磁 (11)

甕で底の部分と内面にはナデが施されている。また、底の部分は釉薬がかけていない。

染付 (12・13・14・15・16・17・18)

12は、肥前焼系の碗の口縁部で外面に2重網目文が施してある。13は、皿の底部で文様については欠けているため不明である。14は、肥前焼系の碗で体部が丸味を帯び薄い高台を持っている。15・17は、肥前焼系の丸文で15は白色の胎土に釉薬がかけられてあり、17は灰色の胎土に釉薬がかかっている。16は、格子目の皿で口縁部である。18は、肥前焼系の筒形湯のみ碗で底部である。

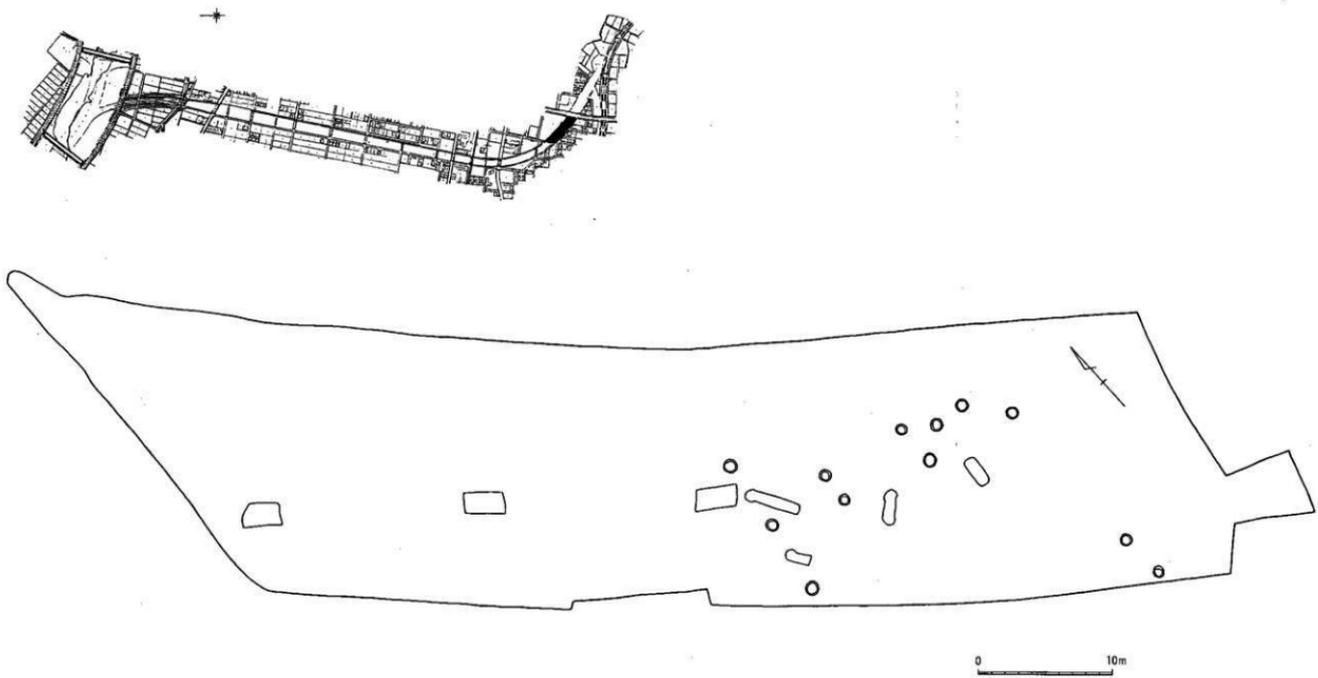
陶器 (7・9・19・20・21・23・24)

7は、口縁部で外部には釉薬がかけられているが内面は無釉である。9は、備前焼系の甕で両面とも横ナデを施してある。また、底部の表面には植物性の纖維質が付着している。19は、蓋で外面内面とも横ナデを施してある。20は土甕で穿孔のついた把手を持つ。口縁部から頸部にかけて釉薬を施してある。21は、口縁部で口唇部と外面の一部の施釉の上にハケ目が施されている。23は、瓶の底部で表面はなめらかでなくザラザラしている。24も瓶の底部で両面に釉薬を施してある。

その他の土器（6・22）

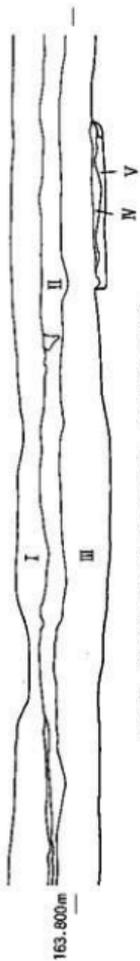
6は、口縁部で外面内面ともにナデが施してある。22は、胴部で両面を横ナデを施し内面は、横ナデの上を縦方向に櫛状のものでひっかいている。

今回のⅨ区の調査では、特別な遺構は検出できなかったが、縄文土器をはじめ弥生土器・須恵器・青磁・白磁・近世の陶磁器など時代幅の広い遺物が検出できた。しかし出土した土層は耕作土がほとんどであることからこのⅨ区の遺物は流れ込みの可能性が強いと思われる。V層の下の部分を確認するためにトレンチを入れた50cm位掘ったところで地下水が湧き出てきた。



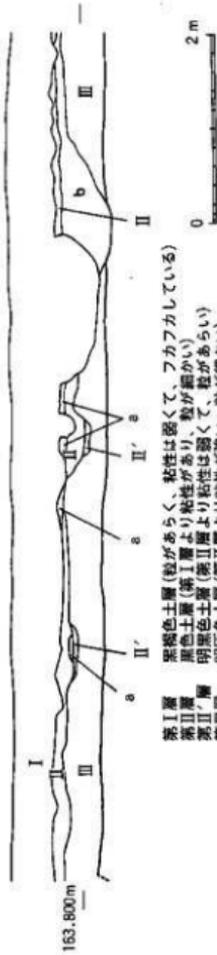
第72区 区全体图

Ⅷ区南壁



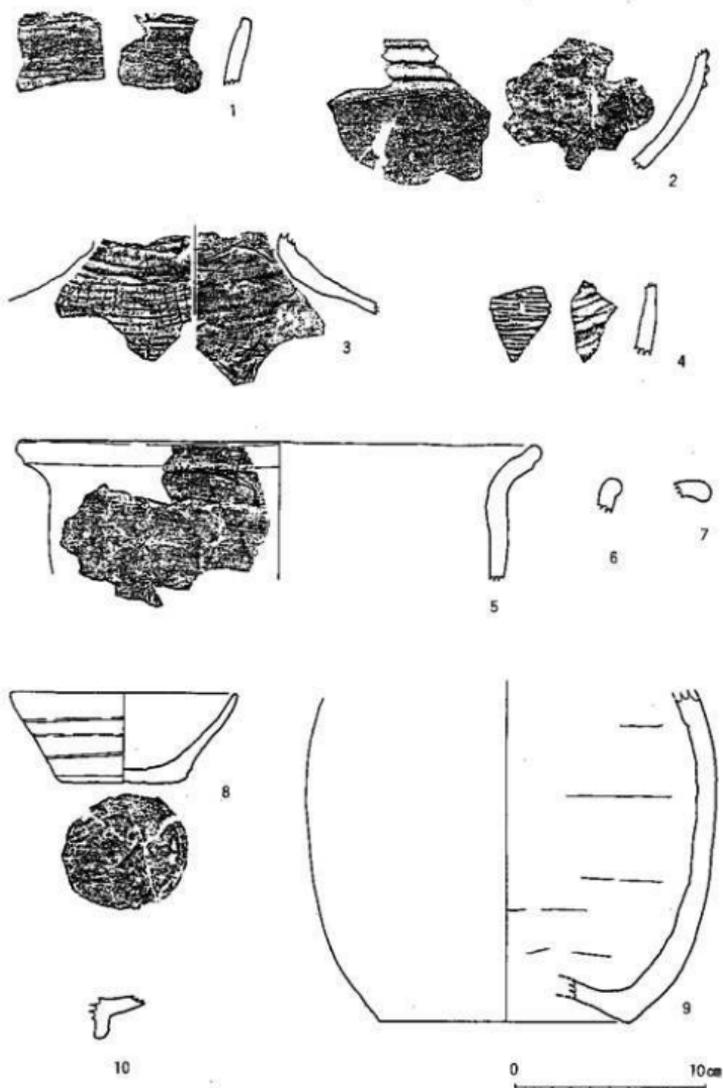
第Ⅰ層 耕作土(堅結すると白っぽくなり、バサバサしている)
 第Ⅱ層 黒色土層(第Ⅰ層より粒が細かく、粘性が強い)
 第Ⅲ層 黒褐色土層(ボラが混入してくるが、窒素は低い)
 第Ⅳ層 黒褐色土層(第Ⅲ層よりボラの混入は多い)
 第Ⅴ層 褐色土層(御池ボラの粒が大きいのが混入している)

Ⅹ区南壁

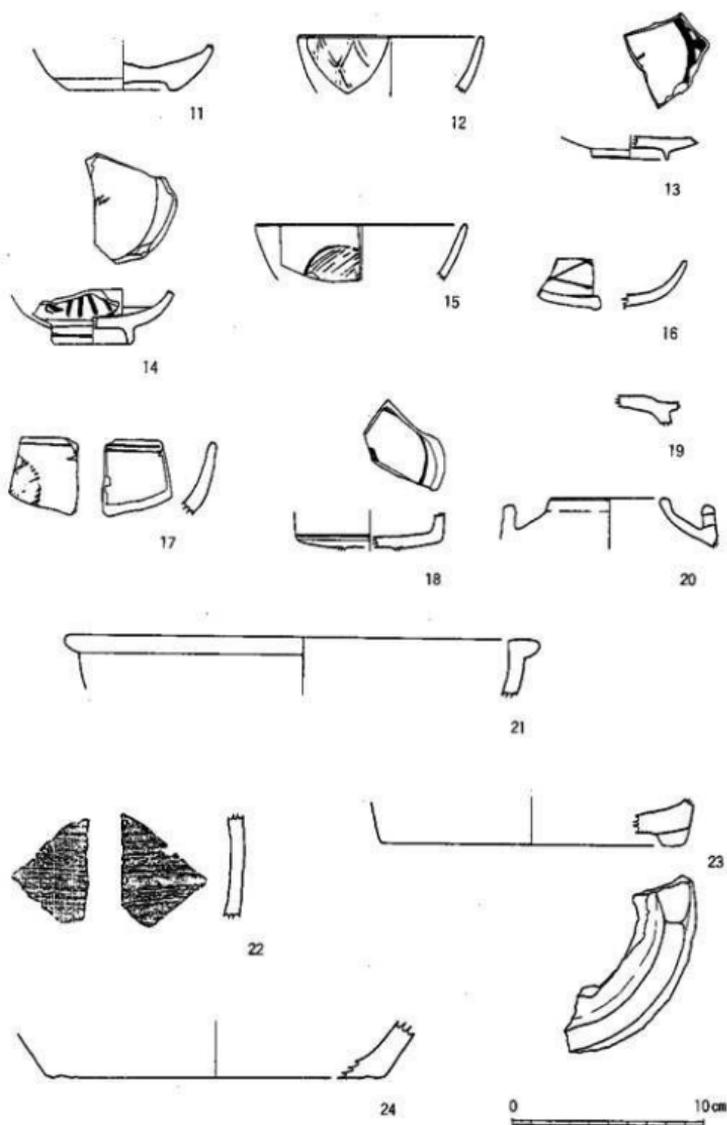


第Ⅰ層 紫褐色土層(粒があらく、粘性は弱くて、フカフカしている)
 第Ⅱ層 黒色土層(第Ⅰ層より粘性があり、粒が細かい)
 第Ⅲ層 明褐色土層(第Ⅱ層より粘性は弱くて、粒があらしい)
 第Ⅳ層 明褐色土層(第Ⅱ層より粘性が強い、粒が細かい)
 a 白ボラ層(白ボラを含んでいる。粒があらしい)
 b 明褐色土(大粒のボラがまじり、バサバサしている)

第73図 Ⅷ・Ⅹ区土層断面図



第74图 区出土物实测图(1)



第75图 Ⅹ区出土器物实测图(2)

遺物番号	器種	部位	圖案および文様		胎土	色調		備考
			外面	内面		外面	内面	
1	縄文	口縁	ナデ	ナデ 沈線	1mm以下の乳白色、半透明、無色透明で光る砂粒を含む。	黒褐色	黒褐色	
2	弥生 甕?	胴部	横ナデ、ナデ 3条の三角突帯	黒化ざみ	1.5mm以下の灰色、茶色、黒色、黄色、白色、金色に光る粒を多く含む。	にぶい橙	にぶい橙	外面…ス付着
3	須恵器	胴部	横ナデ 格子目タタキ	横ナデ タタキのあとナデ	1mm前後の黒い砂粒を含む。	灰	灰	内面に黒色付着物有り
4	須恵器		平行タタキ	平行タタキ	ガラス質の光る微細砂粒を少量含む。	灰	灰	
5	土師器	口縁	横ナデ	横ナデ へら状のケズリ	1mm以下の白色、乳白色の砂粒と1-2mmの灰色、黒色、黄色の粒をまじむ。	黒褐色	明褐色	推定口径 26.8cm
6	土師器	口縁	ナデ	ナデ	1-6mmの灰褐色の石粒を含む。	橙	橙	
7	陶器	口縁	横ナデ	横ナデ、露胎	1mm以下の灰色の砂粒を少量含む。	暗褐色	灰褐色	
8	土師器	底	横ナデ 底部へら切り	横ナデ	1-5mmの茶、褐色の石粒を少し含む。	橙 にぶい黄橙	橙 灰黄褐色	口径…11.7cm、 底径…6.5cm 器高…4.8cm
9	陶器	胴部 底部	タタキのあとナデ	ナデ 粘土の結晶が残り	黒色、白色の粒下を含む。	淡黄 にぶい赤褐色	灰赤 淡黄	露胎部、底径約 13cm
10	青磁	底	露胎文?	露胎	黒いごま状の粒下微量。	オリーブ灰	オリーブ灰	高台内露胎
11	白磁	底	露胎下平露胎	横ナデ、露胎	黒い細かな粒下を少量含む。	白	白	露胎底
12	染付	口縁部	二重網目文		堅緻	灰白	灰白	肥前系 推定口径…9.8cm
13	染付	底	黄付露胎	蛇目輪制ぎ	堅緻	明緑灰	明緑灰	推定底径…4.1cm
14	染付	底	黄付露胎	見込みに波とう文	堅緻	白	白	肥前系 推定底径…4.2cm
15	染付	口縁部	丸文		堅緻	白	白	肥前 (波佐見産) 推定口径…11.0cm
16	染付	口縁部		格子目文	堅緻	明オリーブ灰	明オリーブ灰	
17	染付	口縁部	丸文	二重の網線	堅緻	明オリーブ灰	明オリーブ灰	肥前 (波佐見産)
18	染付	底	器蓋及び文様	見込みに文様	堅緻	明緑灰	明緑灰	肥前系 い形
19	陶器	蓋	横ナデ	横ナデ、露胎	1mm以下の灰、黒色の砂粒を含む。	灰褐色	橙	
20	陶器	口縁部	横ナデ	横ナデ、無袖	1mm以下の灰、黒色の砂粒を含む。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	推定口径…5.8cm
21	陶器	口縁部	横ナデ	横ナデ 口縁部上部露胎	1mm以下の白、黒色の砂粒を少量含む。	赤黒	暗赤褐色	推定口径…24.0cm
22	陶器	胴部	横ナデ	横ナデの後、タテ 方向の磨き	0.5mm以下のガラス質の光る砂粒を少し含む。	黒褐色	灰褐色	
23	陶器	底	ナデ	ナデ	白色の細かな粒下を少量含む。	暗赤褐色	暗赤褐色	
24	陶器	底	横ナデ	横ナデ	1mm以下の白、黒色の砂粒を少量含む。	にぶい赤褐色 黒褐色	暗赤褐色 黒褐色	内外面とも露胎

11. X区の調査

X区は、平成2年度調査分の最終区である。前年度に表土層を重機で斜いであったので遺構検出面と思われた御池ボラ上面まで剃ぐ予定であったがX区の南側の年見川沿いの部分については、黒色の粘質土があって断片的にしか検出できなかった。調査面積は、約2,625㎡である。基本土層はI層が黒褐粗く粘性は弱い。耕作土である。II層は、黒色土層でI層より粒が細かく粘性が強い。III層は、明黒色土層でII層よりも粒が粗くて粘性は弱い。IV層は明灰色土層で、II層より粘性が強く粒が細かい。a層は、白ボラ層で粒が粗い。b層は明褐色土層で大粒のボラが混じる。

遺構

X区は、遺構として溝状遺構と柱穴が確認された。

a 溝状遺構

S E 38 幅約1m深さ約20cmの浅い溝である。東西に約40m程蛇行しながら延びている遺構に伴う遺物は確認できなかった。

S E 39 幅約0.5～1m深さ約15cmの浅い溝である。北東に約10m程延びたあと消滅している。遺構に伴う遺物は確認できなかった。

b 柱穴群

X区の南側に集中して検出した。幅も約30cmくらいのものが最も多かった。深さは、10～15cmくらいで掘立柱建物になるものはなかった。

遺物

縄文土器 (1～14)

1は、深鉢で口縁部に沿って外反している無文の土器である。また、口縁部から頸部にかけて沈線が入っている。4は、胴部で外反していて内面は横ナデで外面はナデが施してある。2は、口縁部で外側に外反していると思われ浅鉢であろうと推測されるが残存部分が少ないため判断しがたい。また内側に沈線を持つ。3も口縁部であるが、外面に横ミガキ内面に横ナデが施された深鉢であろう。5は、口縁部で両面に丁寧なナデを施した深鉢と思われる。また6～10までは口縁部で、6・8以外はナデ調整で、6は外面にミガキが内面に横ナデが施され、8は外面にミガキ、内面は横ナデ調整になっている。6～10は、深鉢であろうと思われる。11は口縁部から頸部にかけてで浅鉢であろう。両面とも横ナデを施してある。12は、胴部で板状工具による丁寧なナデが施してある。13も胴部で外面に貝殻縁連続刺突文があり、内面に粗いナデを施してある。14は底部で、外面には縦方向のナデを、内部には横ナデを施した深鉢であろう。

染付 (15)

高台付の小皿で山水文の文様をもっている。

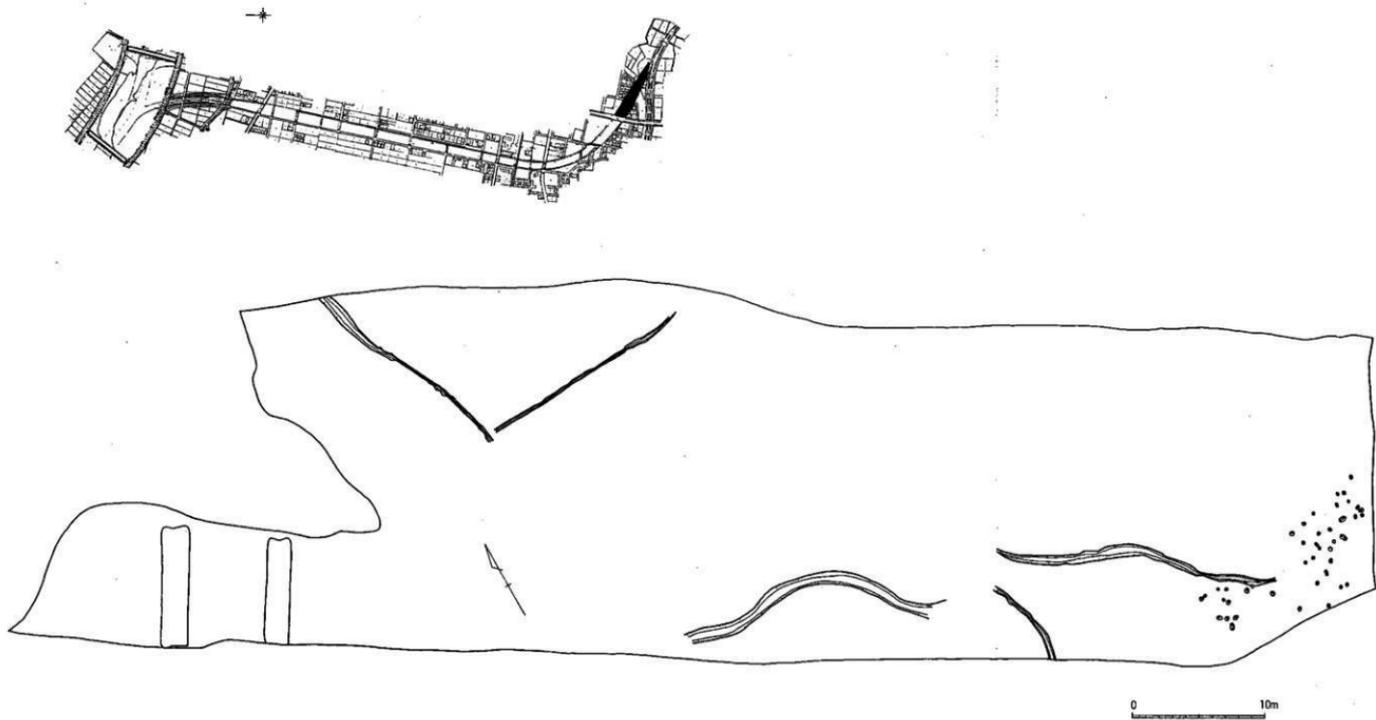
須恵器 (17)

甕の胴部で、外面に平行タタキ、内面に同心円状のタタキを持つ。大変磨耗がはげしい。

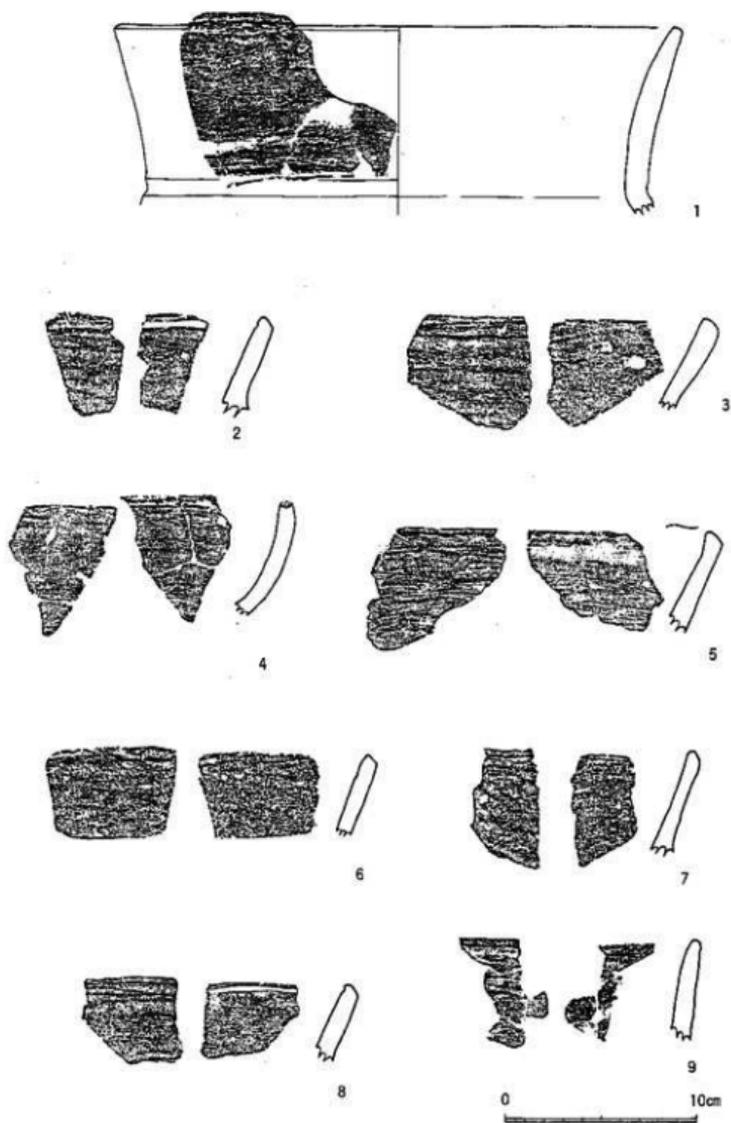
陶器 (16・18・19)

16・18・19とも口縁部である。16は鉢で、外面に横ナデを施している。18は鉢で、胴部に条痕を施し、内面は横方向のハケ目がある。19は、小皿であろうと思われる。両面に横ナデ調整を施してある。

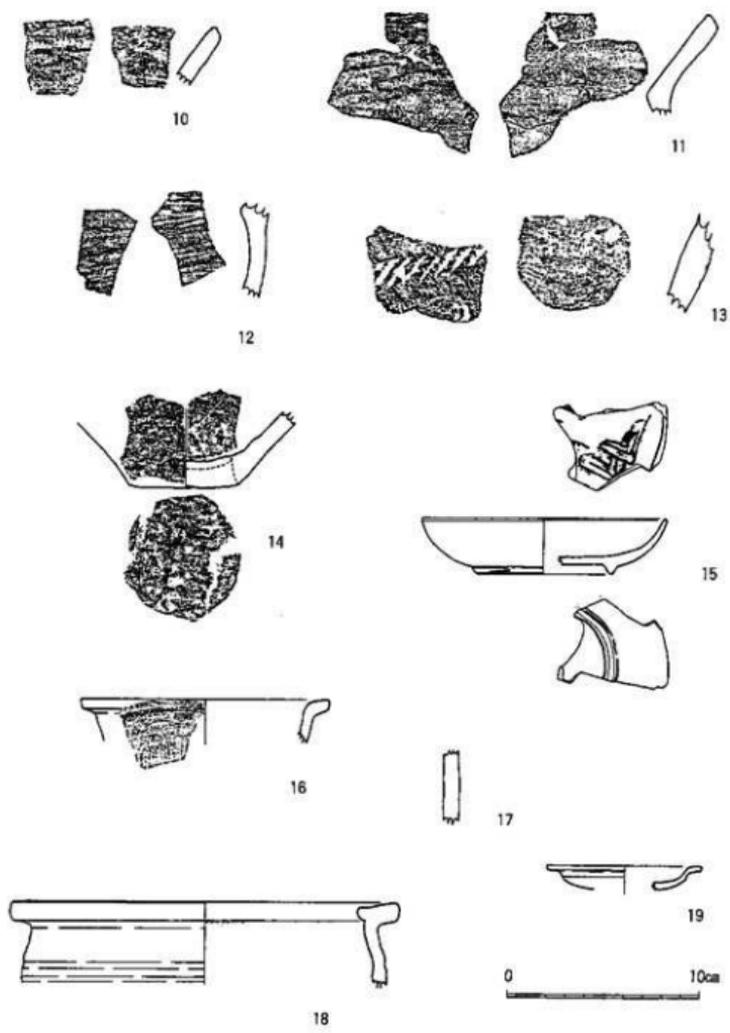
Ⅹ区は、遺構としては溝状遺構と柱穴群があったが、遺構に伴う遺物はなく、回りに散布している状況から流れ込みであろうと思われる。土層断面にS E 39の断面があるが、その下層に白ボラがあることから、この溝は文明年間頃のものであろうと思われるが、伴う遺物がないので断定しがたい。



第76图 X区全体图



第77图 X区出土遗物实测图(1)



第78图 X区出土遗物实测图(2)

第四章 まとめ

神山・郡元地区遺跡では、これまで報告してきたように中世を中心とした遺構・遺物が検出されたが、発掘区域が細長であったため、遺跡全体を把握するまでには至らなかった。ここでは、検出された遺構・遺物に関していくつかの問題点を述べて、まとめにかえたい。

遺物について

今回の調査で出土した土器類には、輸入陶磁器では青磁、白磁、染付が、国産の陶磁器には東播系捏鉢、渥美焼、常滑焼、備前焼、唐津焼、瀬戸・美濃系、肥前系磁器、薩摩焼のほか、土師質土器（坏・小皿・鍋）、須恵器がある。その遺構あるいは区ごとの出土一覧は別表のとおりである。青磁は、12～13世紀代の同安窯系皿や龍泉窯系の鎗蓮弁文碗が少量みられるが、主体にはならず、端反り碗や見込に印花文が施される碗など14世紀後半から15世紀代のものが多くみられる。一部、16世紀に下る線描蓮弁文碗や萼筒底を呈する皿も存在する。器種としては、碗・皿が大部分で、1点だけSE5から瓶が出土している。白磁は、时期的に古く考えられている口ハゲの皿や14世紀代の碗は、出土量が少なく、15～16世紀代の切り高台の皿や粗製碗・皿が多く、瓶あるいは水注の蓋もある。染付は、16世紀代に収まる碗・皿がほとんどで、煎茶文、玉取獅子文、巻貝など通有の文様が施される。碗の多くはいわゆる「レンツー」形で、皿には萼筒底と高台のものがあり、量的には前者の方がやや多い。国内産陶器では、12～14世紀代には渥美焼壺片、東播系捏鉢片や備前焼の須恵質捏鉢などが数点出土しているのみである。15～16世紀代では備前焼が最も多く、そのなかでも口縁部が垂直に立上がる形態の捏鉢が主体で、そのほかには、壺の胴部片や匱区から壺も少量出土している。それ以外に16世紀代では瀬戸・美濃系の天目茶碗や皿、17世紀代では唐津焼碗、肥前磁器皿、薩摩焼壺・二足鉢・碗が、18世紀以降では肥前系の磁器碗・皿や在地系のもがみられる。このように12～13世紀では、同安窯系皿や渥美焼、13～14世紀代では龍泉窯系の鎗蓮弁文碗、東播系捏鉢などがみられるが量的には少なく、15～16世紀代の青磁、白磁、染付が主体を占め、国内産では備前焼や瀬戸・美濃系が当てはまり、17世紀代になると唐津焼、肥前磁器、薩摩焼がそれに続くが、出土量は15～16世紀代に比較すると極端に減少する。

土師質土器の出土量は他の同時期の遺跡に比較して非常に少ない。器種には皿と坏があり、底部切り離しには、ヘラ切りと糸切りがみられるが前者の方が多い。土師質土器の年代は、国内外の陶磁器との供伴関係から決定されているが、県内では良好な一括資料がみられないため、形態や遺構内出土の陶磁器片からその時期を想定する作業が行なわれている。ここでは、遺跡に最も近い松原・久玉地区遺跡の分類を参考にある程度の年代を考えてみたい。4号井戸出土の22は、五輪塔や大観通寶（初鑄1107年）と供伴し、底部に墨書が施されている。全体に丁寧な作りで、体部は外方にのみ底部はヘラ切りである。この坏は、久玉遺跡A地区9号溝出土のものと同様、常滑焼壺が出土していることから、13世紀後半から14世紀前半に位置付けされている。SE36出土

の10と11は、底部から内湾気味に立上がり、底部と体部との境は明瞭で、底部内面には整形の凹凸がみられ、底部はヘラ切りである。松原地区遺跡のI-B-3類に当てはまると考えられるが、松原出土のものは糸切りで口径が大きいことから10と11はそれよりやや時代が上がると考えられ、14世紀前半から後半に存在した可能性がある。小皿はSE32出土の21からVI区出土の26、17、5と形態変化が辿れそうである。21は薄手で体部は若干丸みをもつてのび、底部内面には整形時の凹凸がみられる。SE32では同安楽系の青磁も出土していることから13世紀代に比定されるものと考えられる。26、17につれて体部が厚くなり、5では短く外方に引き延ばされた形態に変化している。

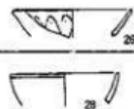
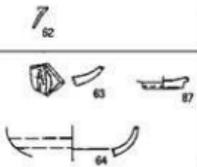
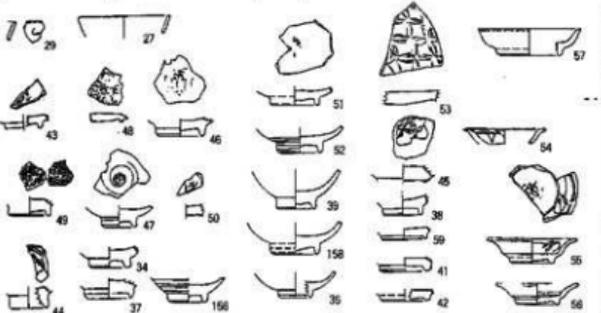
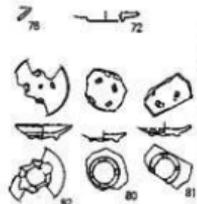
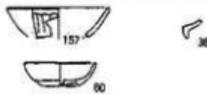
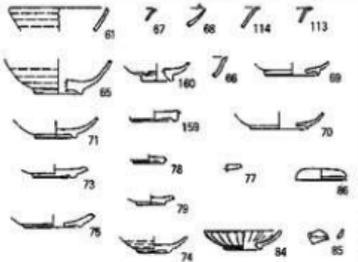
当遺跡では、現段階では糸切りの底部は14世紀前後に現れるが、都城地域の状況をみても松原地区遺跡は13世紀後半から近世まで存続した集落で、糸切り底は土師質土器の7割を超えるものの、ヘラ切り底のものも少量であるが存在し、13世紀後半から漸移的に転換したと想定されている。都之城跡では遺構の切り合い関係から14世紀後半から17世紀前半までIV期に分けられているが、すべて糸切り底である。中之城跡でも糸切り底のみ出土している。城跡の出土の土師質土器は、松原地区遺跡、久玉遺跡や当遺跡出土のものと同様に、県内の「墓」の副葬品を参考してみると、源藤遺跡1号土墳墓は、湖州鏡と考えられる銅鏡とともに糸切り底の土師質土器が副葬され、前原西遺跡検出の土墳墓は、周囲に方形の溝が巡り、土壌内から糸切り底の土師質土器と漆膜、銅鏡（熙寧通宝・元豊通宝）が出土している。逆に、坏や小皿の形態から源藤遺跡や前原西遺跡より時代の下る平畑遺跡や陣ノ内遺跡では、ヘラ切り底の土師質土器や洪水通宝が副葬されている。このように、副葬品などから有力層の墓と考えられる源藤遺跡や前原西遺跡では糸切り底が、一般庶民層と想定される平畑遺跡や陣ノ内遺跡ではヘラ切り底の土師質土器が出土し、糸切りとヘラ切りの違いは、階層の違いを反映していると可能性がある。また、源藤遺跡の例から糸切りは12～13世紀には出現しているものの、ヘラ切りは、15世紀あるいは16世紀まで続く可能性があり、一般庶民の間では根強く用いられた技法と考えられる。

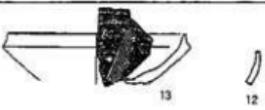
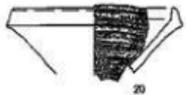
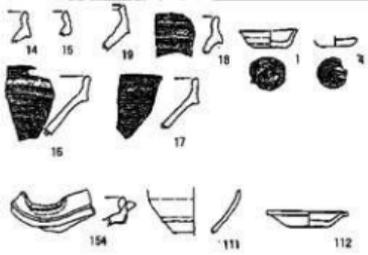
遺構について

検出された遺構は、溝状遺構42条、掘立柱建物跡16棟、井戸4基、土壇19基である。

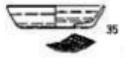
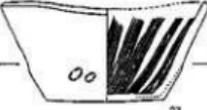
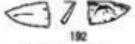
溝状遺構の方向は東西、南北など様々だが、屋敷地を把握するまでには至らなかった。そのなかで、SE1は方形に区画する溝状遺構で、ほかにSE10とSE28が繋がる可能性があり、一辺約30mの方形に区画された敷地となる。また、南北方向に走る溝状遺構の多くは途中で消滅しているものが大部分で、SE12の場合、約200mのび消失しており、単に溝状遺構は方形あるいはL字に区画するものばかりでないようだ。SE1・5・24・25・29・30・40・41は底面が固く締り、「道」として利用された可能性がある。特に、SE1・24・25・30の底面で検出された凹凸は、松原地区遺跡⁽⁹³⁾や久玉遺跡⁽⁹⁴⁾、幸田ノ上遺跡⁽⁹⁵⁾、熊野原遺跡C地区⁽⁹⁶⁾、水落遺跡⁽⁹⁷⁾などで検出されている。この「凹凸」には二種類あり、SE1・24・25のように円形あるいは不整の円形のものと同様に

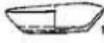
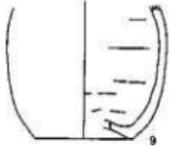
出土土器一覽表(SE1)

	青 磁	白 磁
1300		
1400		
1500		
1600		
1600 以降		

染 付	国内産陶磁器・土師質土器
	 <p>11</p>
 <p>91</p>	 <p>13 12</p>  <p>20</p>
 <p>85 86 7 105 107 95 108 94 90 92 93 110 106 96 98 100 97 103 99 104</p>	 <p>14 15 16 17 18 19 1 2 154 111 112</p>
	 <p>118 119 137 118 131 115 161 123 124</p>

出土土器一覽表(Ⅱ～Ⅹ区)

	Ⅳ 区			Ⅲ 区		
	青磁	白磁・染付	国内産	青磁	白磁	国内産
1200 以前						
1200						
1300						
1400						
1500	    	 		  		
1600	 	  	 	   		
1600 以降		 				 
		168・169-S E 5 171-174・176・177-S E 6 178-S C 4 182-S C 8 183-S C 9 184-185 189・191・192	一箇産			1・3-5・8 11・16-18 20・21・23・25・27 30・31・35

V 区		VI 区		VII-VI 区	
青磁	杂付	国内産磁器 土師質土器	青磁・土師質土器・国内産陶磁器	青磁・国内産陶磁器・土師器・須恵器	
					
			  		
			   		
 	  				
		  	 	  	
					
		1・5・76-S E 29 11・13 -S E 30 21・22 -S E 32	2・22・26・11・5・10・17 30-32-VI区	1・2-S E 42 3・8・5・9・12・15 20・21-VI区	

あるいはその中央がややくびれた形態のものが、傾斜地などの足掛けあるいは滑り止め、重量物運搬の痕跡として考えられている。しかし、これらの痕跡が溝の底にのみ検出されることや遺構内で部分的にしかみられないことから、さらに類例の増加を待ち検討したい。次に、溝の埋土に文明の火山灰（白ボラ）が確認できたのは、SE 5・6・12・21・22・23・26・27・28・34・35・42である。これらの前後関係は不明だが、次善の策として文明の火山灰の堆積位置（高さ）を基準にして考えてみると、SE 12・35は御池ボラ上面では検出されず調査区壁面で表土下に認められ、逆にSE 5・6・21・22・23などは底面より10～30cmの高さに堆積し、相対的な時期差は想定される。また、溝幅は検出面で1～2mで、当時はさらに幅広であったことがうかがえ、溝の底面には、水の流れた痕跡は認められず敷地の区画としての利用されていたと考えられる。一部にはSE 5・23のように底面が硬化しているものもあり、このSE 5・23は繋がる可能性がある。白ボラの堆積している溝状遺構は15世紀後半には埋没しはじめていることがわかるが、出土遺物において15～16世紀が主体になる状況からみれば、溝の埋没によって集落の廃棄は判断できないのではなかろうか。また、白ボラの堆積していない溝状遺構にもSE 6とSE 9の切り合いのように、白ボラの堆積した溝状遺構より古くなるものも存在しその時期比定は難しく、15世紀後半以降の溝状遺構として確実なのはSE 1のみである。

掘立柱建物跡は、Ⅲ区とⅣ区で検出しただけであったが、Ⅰ・Ⅱ区でも建物は存在していた可能性はある。逆に、SE 1より南側では柱穴自体の検出が少なくⅠ～Ⅳ区までの状況と対照的である。建物は、1間×1間が1棟、1間×2間が3棟、1間×3間が5棟、2間×2間が2棟、2間×3間が1棟、1間×5間が2棟となり、1間×3間が基本的な間取りであったと考えられる。床面積をみてみると最小が10.64㎡（SB 10）、最大が54㎡（SB 6）で、15㎡以下が3棟、16～20㎡が3棟、21～25㎡が6棟、30㎡以上が2棟となり、梁行が長いSB 6・13などが大きい。特にSB 6は、柱穴内に銅銭が出土し祭祀的要素がうかがえ、特殊な建物であった可能性がある。建物の時期や溝状遺構との関係は明確に捉えられないが、Ⅲ区SB 14とSB 15はSE 28と平行し、Ⅳ区SB 8は他の柱穴群や建物と離れていることからSE 10・28に区画された屋敷地に伴うことが予想される。SE 1で区画された屋敷は、SE 1がⅢ区に検出されていないことや通路跡の方向から西に広がると想定される。また、SB 6・10は柱穴埋土に白ボラが認められていることから他の建物との時期差も考えられ、SE 5、あるいはSE 6に伴うかもしれない。井戸は、時期不明であるが溝のそばにつくられることからすれば、1号井戸と3号井戸はSE 1に伴うかもしれない。また、Ⅵ区では4号井戸や土壌墓の存在からⅤ区を空白地として東に集落が形成されていたと思われる。

土壌墓として考えられる遺構は、Ⅵ区でまとまって検出された。これらの墓は、主体的となる集落の時期と並行すると考えられ、近くに4号井戸があり、そこから五輪塔の一部が検出されていることからいわゆる円敷墓としての性格をもつ可能性がある。

このように当遺跡では、断片的ではあるが掘立柱建物、井戸、土壌墓が確認され、出土遺物や白ボラの堆積する溝状遺構の存在から、12～14世紀では断続的あるいは小規模な集落であったものが、15～16世紀に入ると遺跡一帯に集落（屋敷地）が広がり、17世紀以後はⅣ区とした場所に集約されていく状況がうかがえる。同様に松原地区遺跡でも13世紀代においては台地の縁辺に立地し大溝に囲まれた居館がみられたが、14世紀以降台地全体に溝状遺構や井戸が検出されており、14あるいは15世紀に集落が大きく拡大しており、もしかすると松原地区遺跡から当遺跡まで広く集落が営まれていた可能性もある。

註

- (1) 「山内石塔群」『宮崎学園都市発掘調査報告書』第1集 1984年
岡本武憲「日向における古代から中世にかけての一樣相—宮崎学園都市を中心に—」『宮崎考古学会例会資料』1990年
 - (2) 「久玉遺跡（第3次調査）」『都城市文化財調査報告書』第13集 都城市教育委員会 1991年
 - (3) 「松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第7集 都城市教育委員会 1989年
 - (4) 註(3)と同じ
 - (5) 「都之城（主郭部）」『都城市文化財調査報告書』第13集 都城市教育委員会 1991年
 - (6) 「都城・中之城跡」『都城市文化財調査報告書』第3集 都城市教育委員会 1983年
 - (7) 「源藤遺跡」宮崎市教育委員会 1987年
 - (8) 「前原西遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988年
 - (9) 「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985年
 - (10) 「陣ノ内遺跡」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会 1988年
 - (11) 階層差以外に糸切りが上質の品物であったためにみられる現象かもしれない。
 - (12) 畑や「村落」の境界の溝とも考えられる。
 - (13) 註(3)と同じ
 - (14) 註(2)と同じ
 - (15) 「牟田ノ上遺跡」『都城市文化財調査報告書』第13集 都城市教育委員会 1991年
 - (16) 「熊野原遺跡C地区」『宮崎学園都市遺跡調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985年
 - (17) 「水落遺跡」『小林市文化財調査報告書』第1集 小林市教育委員会 1991年
 - (18) 早川 泉「古代道路遺構に残された丘頂—波板状凹凸面の性格について—」『東京考古』9 東京考古談話会 1991年
 - (19) 溝の廃棄と集落の廃棄は同一であろうか。今後の課題である。
 - (20) 中世の建物を50棟検出した天神河内第一遺跡においても1間×3間の建物が最も多く、全体の約半数を占めている。
「天神河内第一遺跡」宮崎県教育委員会 1991年
 - (21) 「下右田遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告書』第53集 山口県教育委員会 1980年
- 【参考文献】
日高次吉「宮崎県の歴史」山川出版社 1970年
岡本忠彦「備前」『世界陶磁全集』3 小学館 1977年
「宮崎県」『角川日本地名大辞典』45 角川書店 1986年

遺跡出土木材の樹種

宮崎大学 農学部 大塚 誠

遺跡出土木材7試料について、横断面(木口)、接線断面(板目)及び半径断面(まさ目)の3断面のマイクローム切片をつくり、組織構造を観察して樹種の同定を行った。

1. 試料1 まさ目板材(1号井戸1)

針葉樹。樹脂道、樹脂細胞は存在しない。仮道管に対列状のらせん肥厚がある。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はヒノキ型ないしトウヒ型。(写真1)

カヤ (*Torreya nucifera* Seib. et Zucc.) イチイ科

2. 試料2 半円形のまさ目板材(2号井戸2)

針葉樹。樹脂道、樹脂細胞は存在しない。放射組織の細胞数は多く、末端壁は数珠状に肥厚。分野壁孔はスギ型。(写真2)

モミ (*Abies firma* Sieb. et Zucc.) マツ科

3. 試料3 円形の板目板材(2号井戸3)

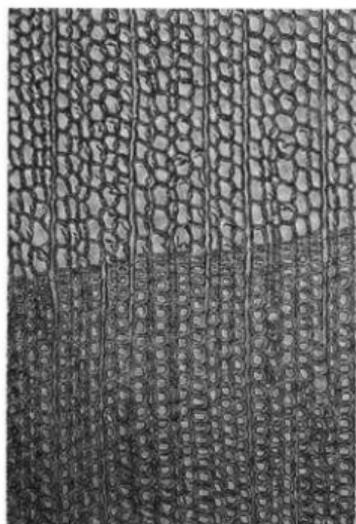
広葉樹。散孔材。道管複合数は4個以下、チロースが存在し、単穿孔。柔組織は顕著で、周囲状、翼状、連合翼状に配列、油細胞が顕著に存在する。放射組織は異性で2~3列。(写真3)

クスノキ (*Cinnamomum camphora* Sieb.) クスノキ科

4. 試料4,5,6,7 樹幹木部片と枝部片(2号井戸出土)

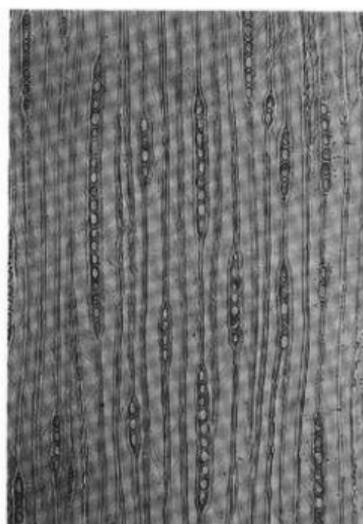
4試料同一樹種で針葉樹。樹脂細胞はなく、軸方向および水平方向樹脂道が存在する。放射仮道管に鋸歯状突起があり、分野壁孔は窓状。(写真4)

二葉松(アカマツまたはクロマツ) マツ科



横断面 (木口)

70倍



接線断面 (板目)

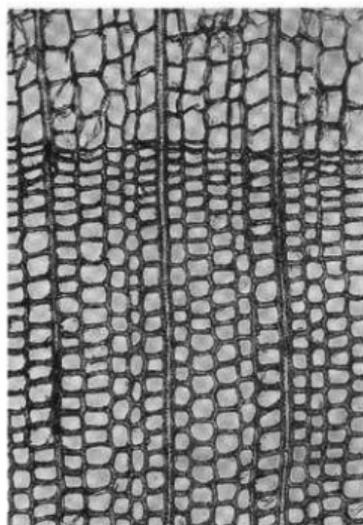
100倍



半径断面 (まさ目)

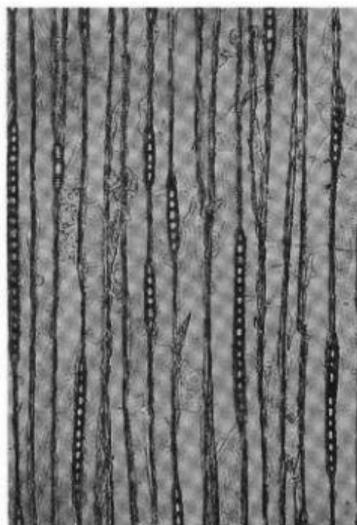
100倍

写真1 (試料1) カヤ



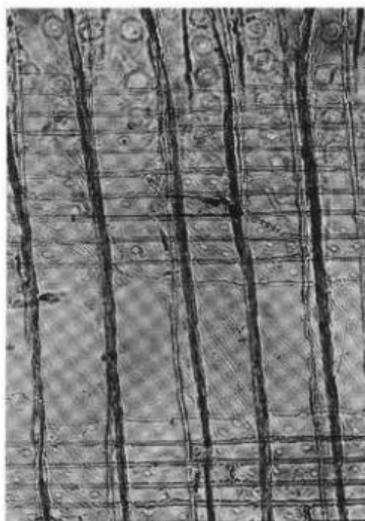
横断面 (木口)

100倍



接線断面 (板目)

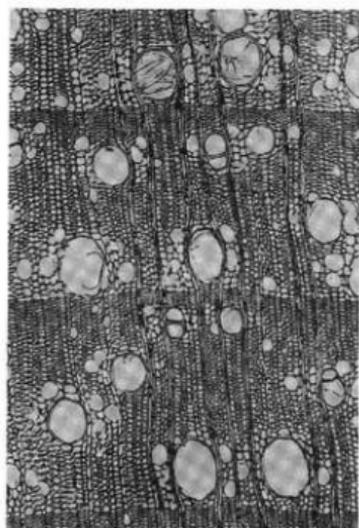
100倍



半径断面 (まさ目)

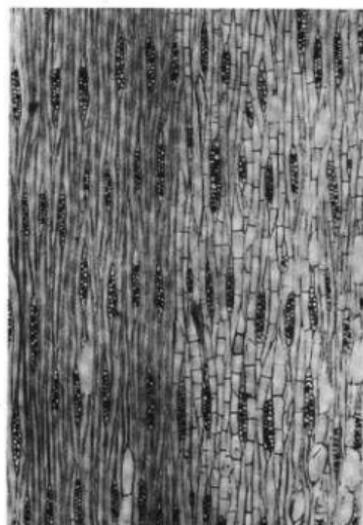
200倍

写真2 (資料2) モミ



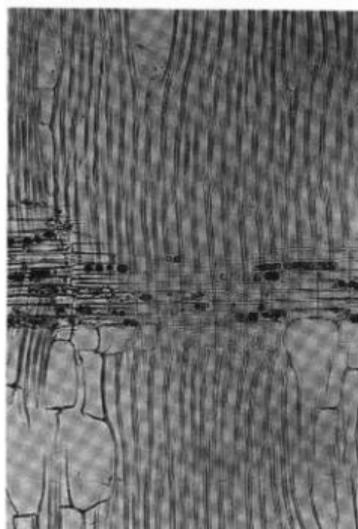
横断面 (木口)

40倍



接線断面 (板目)

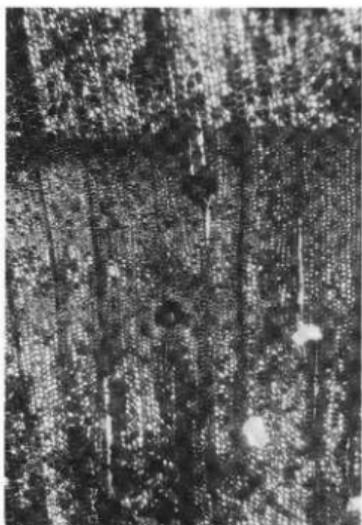
40倍



半径断面 (まさ目)

100倍

写真3 (試料3) クスノキ



横断面 (木口)

40倍



半径断面 (まさ目)

200倍

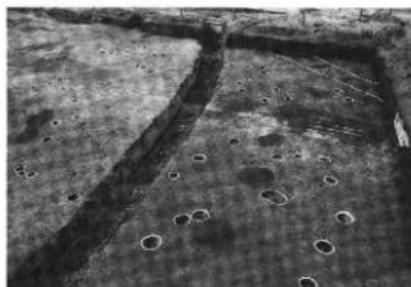
写真4 (試料4,5,6,7) 二葉松



遺跡遠景(北より)



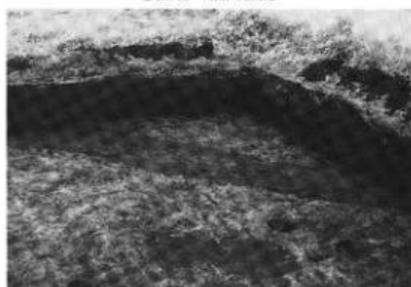
I区北 検出状況



I区北 検出状況



SE12



SE13 検出状況



樺山・郡元 I 区南



SE17. SE16



SE17. SE18



SE12とその断面

図版 4



SE 24・25検出状況



SE 24・25発掘状況



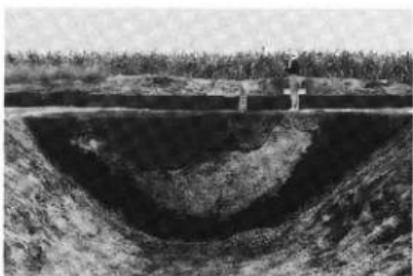
SE 26 (断面U字状溝)



SE 26の東壁断面

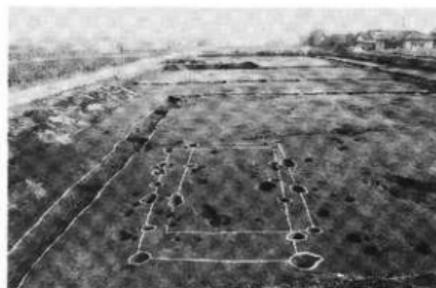


SE 26断面 (溝の埋土中の白色部分が文明ボラである)

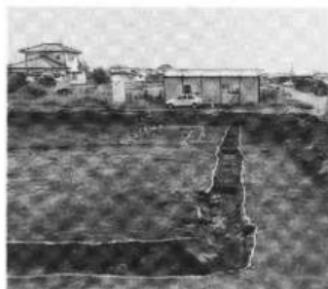


SE 26断面

禪山・郡元Ⅲ区



SE28と9号・10号掘立柱建物跡



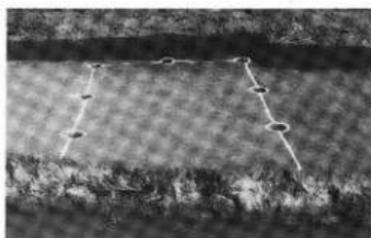
SE28の屈曲部分



SE27側からみたSE28と9号・10号掘立柱建物

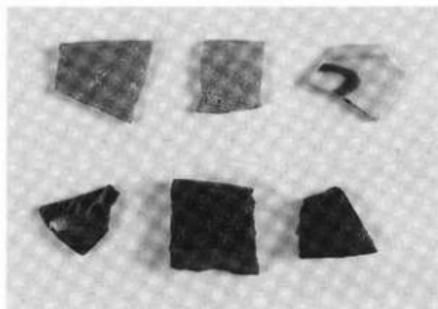


SE28 (西から)



11号掘立柱建物跡

樟山・郡元Ⅲ区



I区出土遗物



II区北出土遗物

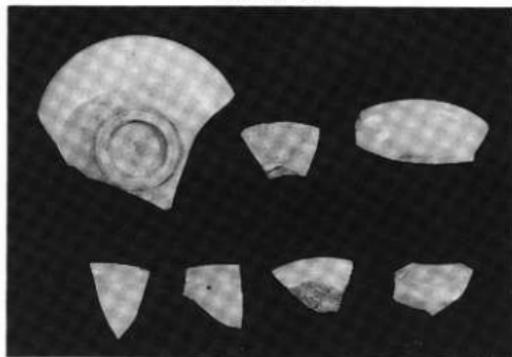


II区南出土遗物

Ⅲ区 出土遺物



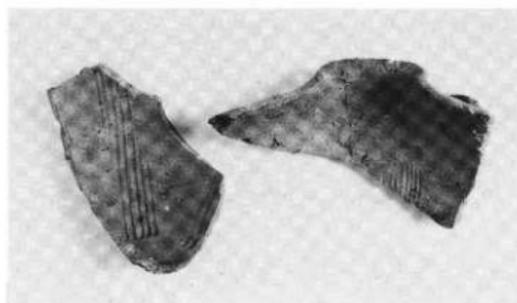
青磁 (碗・皿)



白磁 (皿類)

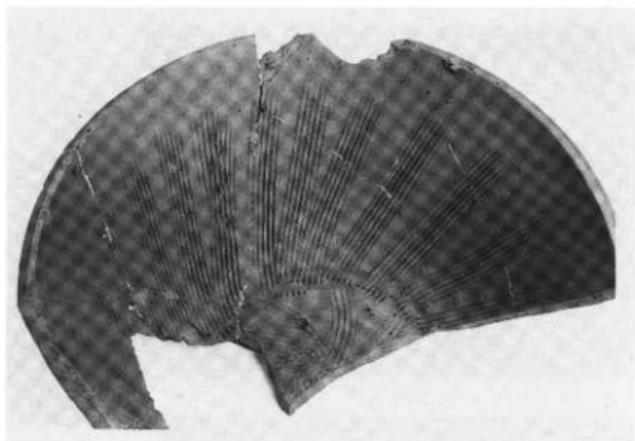


染付 (碗・蓋物など)

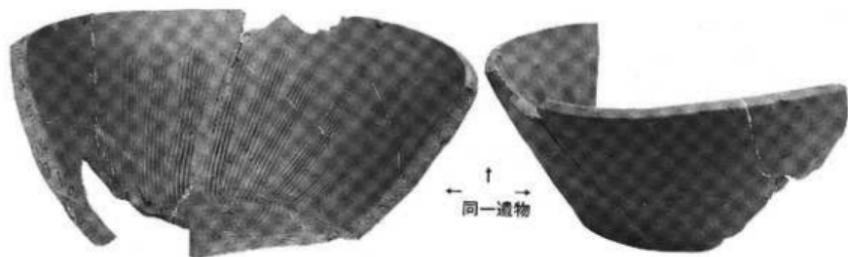


Ⅲ区 出土遺物

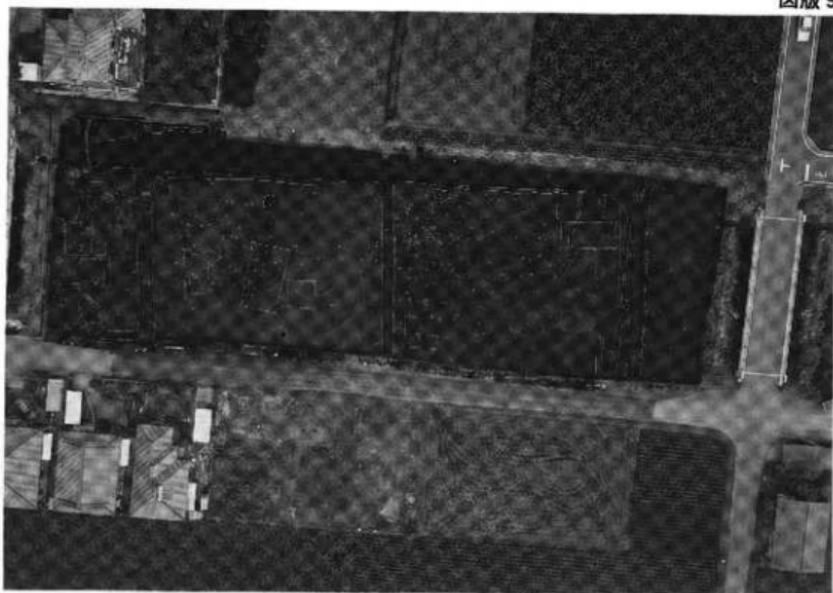
① ②
備前掬鉢



③



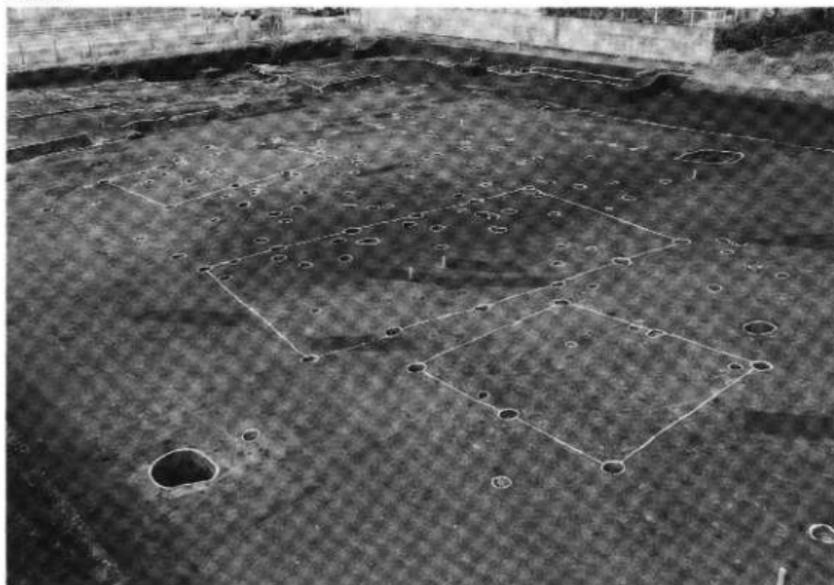
↑
← 同一遺物 →



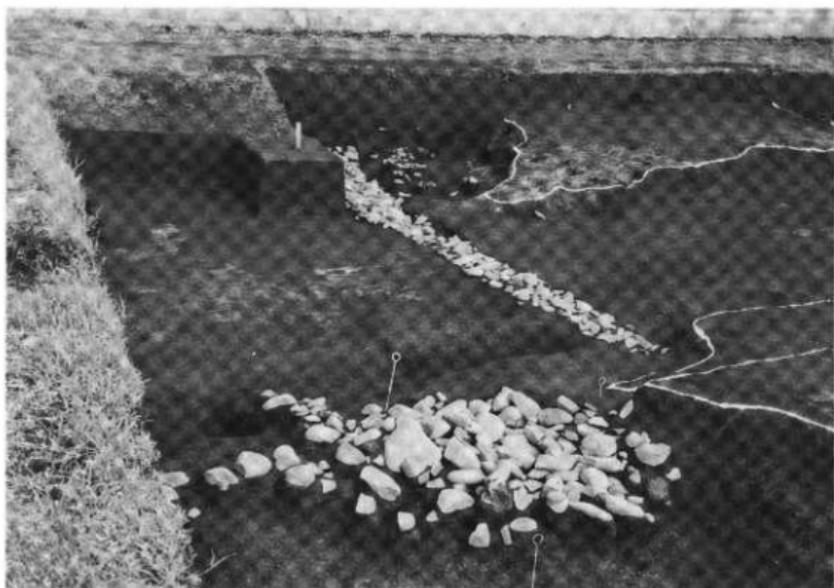
N区



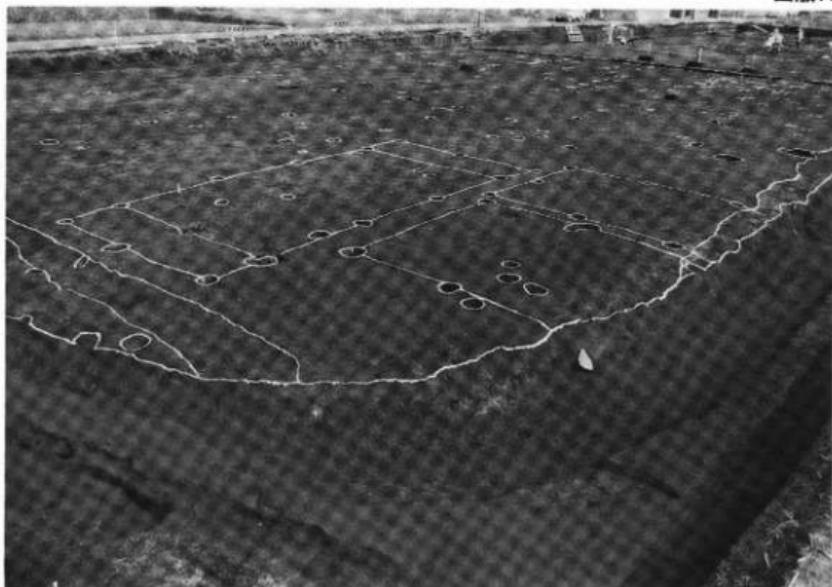
N区(北より)



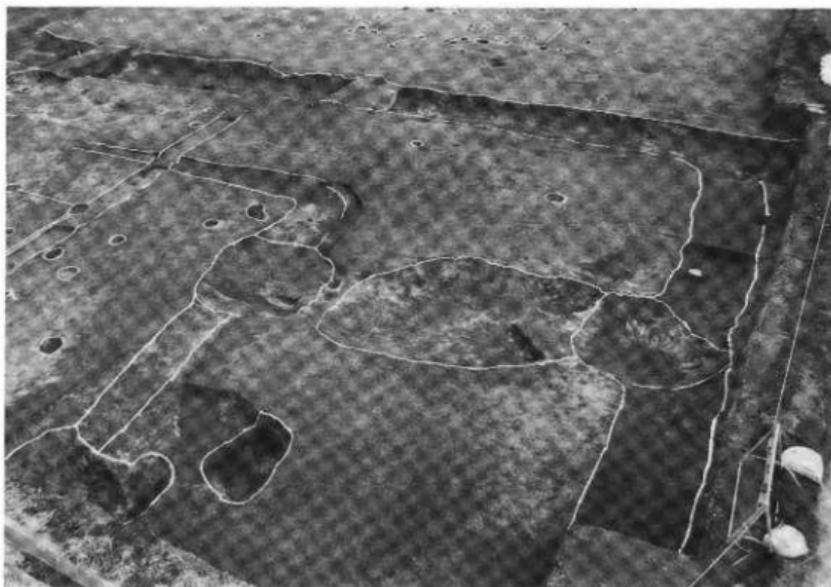
遺構検出状況



SE1 遺構検出状況



SB1~3・SE1



SE6・9・SC3~5(北より)

図版12



Ⅳ区 検出状況



SEI (東西方向溝)



遺構完掘状況 (北より)



石列遺構



通路跡検出状況 (上部)



石列遺構



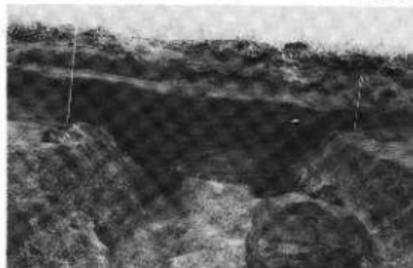
通路跡検出状況



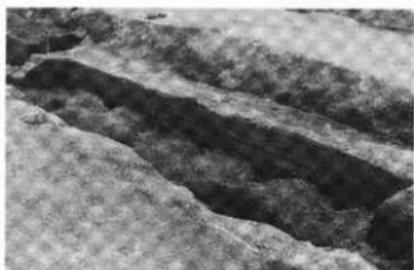
石列石白出土状況



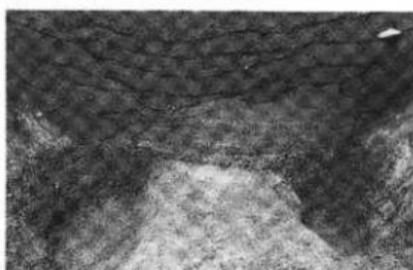
SE1 東西方向



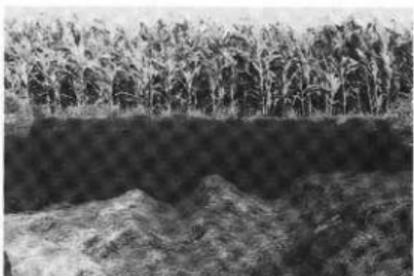
SE1 土層断面



SE1 硬化面下 凹み断面



SE1 硬化面



SE1, SE2土層断面



SE1 L字部 硬化面の状況



SE1土層断面



SE1土層断面



SEI 遺物出土状況



SEI 遺物出土状況 (床面)



SEI 北端遺構検出状況



暗渠状遺構断面



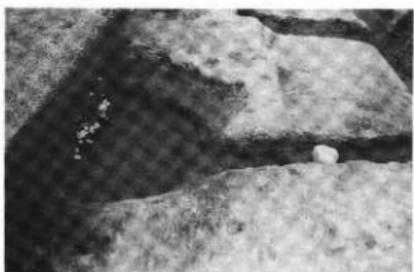
SEI 石積



暗渠状遺構遺物出土状況



SEI 土層断面



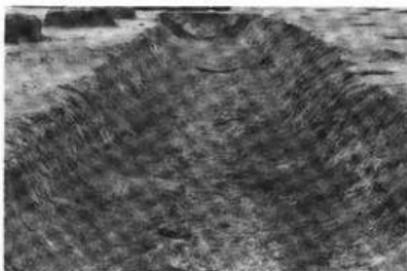
暗渠状遺構完掘後



SE5 土層断面



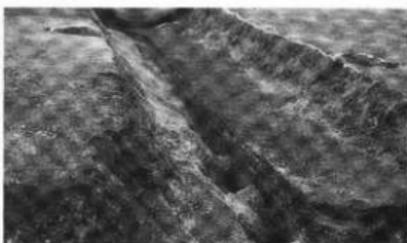
SE6 土層断面



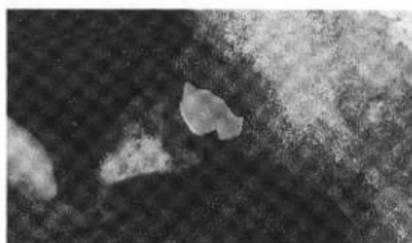
SE5 硬化面



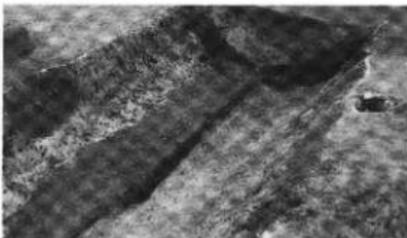
SE6 土層断面



SE5 硬化面下



SE6 遺物出土狀況



SE5 硬化面下



SE5 遺物出土狀況